權律師
律師
律師
權律師　四人

〔慶延記〕十四醍醐寺雜事記十四

注進

醍醐寺寶藏文書櫃目錄事　上

合玖合内

一官符櫃一合納○中略

官符一卷五枚内○中略

一枚諸國講讀師被置事　天暦三年十二月七日○下略

八日、丁丑、郡司召、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月八日、丁丑、郡司召、

九日、戊寅、大神祭使ヲ發遣ス、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月九日、戊寅、大神祭使立、

上卿不參ニ依リ外記ニ内侍ニ付シテ奏ス

陰陽寮申狀ニ依リテ神嘉殿ニ御セズ

御諷誦文作者大江朝綱

十日、己卯、御體御卜奏、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月十日、己卯、御躰御卜奏、上卿不參、仍外記付内侍奏之、

〔西宮記〕六月御躰御卜　天暦三年十二月十日九記云、神祇官候御卜文、而納言參議、或重服輕服、或觸穢不參、雖无先例、依勅旨外記付内侍所云々、○江次第ニ異事ナシ、

十一日、庚辰、月次、神今食祭、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月十一日、庚辰、月次、神今食、天皇不御神嘉殿、依陰陽寮申狀停止之、

十三日、壬午、荷前使、擬侍從ヲ定ム、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月十三日、壬午、被定荷前、擬侍從、

太皇太后、東西兩寺及ビ延暦寺ニ於テ、御逆修ヲ行ハセラル、

〔扶桑略記〕二十五村上天皇　十二月十三日、中宮職自一七日至七々日、逆修御諷誦文、作者朝綱、右奉令旨云、側聞、人身無常、似霜露之逢朝日、世間不定、同芭蕉之待秋風、方今百年之期、差過其半、一生之裡、漸少其殘、數年之後、枕席乖和、長信月光、逢苦霧而屢暗、永安竹色、受寒露而不鮮、雲母窻間、擣藥之聲不靜、翡翠簾下、

童子一人燒死ス
失火ノ穢宮中ニ及ブ
結願
錫杖ノ間琴ヲ彈ズ了リテ御遊アリ

問寢之訪頻聞、彼壯齒无病之日、猶起有爲之悲、暮春有恙之時、彌倍無常之歎、爰始自一七日、至于七々日、皇城東西二寺、天台嶺上五堂、瞻仰遠近七箇之精舍、結構今後二世之因緣者、宮臣奉下命、所修如件、敬白、已上、

十五日、甲申、故太政大臣忠平ノ小一條第火アリ、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月十五日、甲申、子時許、太政(忠平)大臣家有失火事、小一條、淨行法師童子一人燒死、

十六日、乙酉、昨日失火穢籠及內裏、

十九日、戊子、主稅寮返帳ノコトヲ定ム、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月十九日、戊子、被定主稅寮返帳事、

二十日、己丑、御佛名、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月廿日、己丑、御佛名、

〔九暦〕十二月廿日、御佛名事、

廿二日、御佛名結願事、

〔年中行事抄〕十二月十九日御佛名事云、

天暦三年十二月廿三(二カ)日、御佛名、終夜錫杖之間、簾中調琴、事畢有御遊、或云四年、

官符ヲ中務治部二省ニ給フ
建禮門出御
重服ノ人ヲ使ニ差セズ
雨儀ノ裝束ヲ晴儀ニ改ム

二十三日、壬辰、光仁天皇國忌、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月廿三日、壬辰、國(光仁)忌、

二十四日、癸巳、故太政大臣忠平ノ墓所ヲ荷前ノ幣ニ列ス、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月廿四日、癸巳、被定故(忠平)太政大臣墓所每年可獻荷前之由、卽給官符中務、治部兩省、

〔九暦〕十二月廿三日、以貞信公墓所、可預荷前幣之由蒙仰了、可令作官符之由、仰有相朝臣事、

二十五日、甲午、荷前、朱雀院御佛名、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月廿五日、甲午、天皇御建禮門、發遣荷前使、穢中、相加故太(忠平)政大臣墓所、今夜院御佛名、

〔九暦〕十二月廿五日、左右(實頼、師輔)大臣奉仕荷前使事、

〔小野宮年中行事〕十二月荷前事　天暦三年十二月廿五日、甲午、今日荷前之日也、重服之人、雖有憚參入、右大將殿(實頼)御記、稱固物忌、不參入、重服上達部、定無便宜、不差使、又使上卿彼此申障云々、仍參入、先著陣座、令問裝束、了問使等參不、申云、始裝束雨儀、而又改晴儀之間、頻令

出御

相催、頃之著幄座、按察在衡卿、修理大夫隨時朝臣著座、良久之後出御、雜儀如常、

〔小右記〕長元元年十二月廿日、庚辰、○略中權左中辨章信傳關(經通)白御消息云、重服人可參荷前哉如何歟、聞前例、縱雖無所見、廻思慮可示之者、引見故(實頼)殿御記、已無所見、但天暦三年八月、貞信公薨給、十二月廿五日、荷前、著幄座令行給、其外無所見、彼年私荷前事、不見件御記、

私ノ荷前

著鈦勘文ノ式ヲ定ム、

〔西宮記〕臨時十一於市行事裏書

勘申

著鈦囚人勘文、注囚人徒役年限幷年齒貫屬否之例事、○中略、五月十一日ノ條ニ收ム、

同(天暦)三年十二月廿五日以來、注贓物數幷色目、不注年齒貫屬徒役年限、

右被別當宣偁、以今月廿六日、可著鈦囚人之勘狀、右少志赤染時用不進署名、尋問其由、時用申云、年齒○以下闕ク、

二十六日、乙未、僧綱召、

〔日本紀略〕村上天皇

十二月廿六日、乙未、任僧綱、

東寺能治ノ勞

〔僧綱補任〕○二興福寺本

小僧都禪喜　十二月廿六日任大僧都、七十六（朱書下同ジ）

權小僧都空晴　十二月廿六日轉正、七十四○興福寺別當次第同ジ、

律師明珍　同日任權小僧都、七十九

權律師明達　十二月廿六日轉正、七十九

寬空　同日任權小僧都、東寺別當冊六○東寺長者補任同ジ、

延昌　同日任權小僧都、山座主、七十○天台座主記同ジ、

覺惠　同日轉正、七十七

〔貞覺律師弟子〕延珍　十二月廿六日任、法相宗、興福寺、已講勞、平城人、縣犬養氏、六十、○釋家初例抄同ジ、

延曉　同日任、眞言宗、元興寺、東寺能治勞、右京人、秦氏、五十九、○東寺長者次第同ジ、

〔東寺長者次第〕○上仁和寺本　第十四僧正寬空　天暦三年十二月、至一長者、年、律師、同十二月廿九日、任權少僧都、

二十八日、丙申、參議源兼明復任ス、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月廿八日、丁酉、復任宣旨、給二省、

〔公卿補任〕五　參議從三位源兼明、三、十六、治部卿、十二月日復任、

○兼明服解ノコト、九月二十二日ノ條ニ見ユ、

二十九日、戊戌、追儺、大祓、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月廿九日、戊戌、追儺幷大祓、

近衞舍人二百七度揚ゲテ墮サズ

御靈堂

官歷

是歲、仁壽殿ニ於テ、蹴鞠ヲ御覽アラセラル、

〔西宮記〕臨時八　蹴鞠　臨時宴遊　天暦三、御同殿（仁壽殿）、召殿上、藏人、近衞舍人等、有蹴鞠興、二百七度揚不墮、

諸社及ビ西寺ニ於テ、御讀經アリ、

〔北山抄〕六　備忘略記　奉幣諸社事　同三年（天暦）、諸社及西寺御靈堂御讀經、

大外記正五位下三統公忠卒ス、

〔外記補任〕二　少外記三統公忠　承平六年正月廿九日任、元民部大錄、天慶元年三月廿八日任大、同二年正月七日敍外從五位下、同四年正月七日入內、三月廿八日兼信乃權介、同七年近江權掾、同九年正月七日敍從五位上、同年十一月廿九日正下、悠紀國司、天暦二年正月卅日兼備中權介、同三年卒、

〔二中歷〕二　官局歷　大外記　寬平以後　三統公忠　天慶、

〔康富記〕九　文安四年十二月十三日、

大外記敍留例

大外記三統公忠

元慶（天）二年正月七日敍外從五位下、

天暦三年是歲

歌什

天暦三年月日卒、敍留以後十五个年、

〔勅撰作者部類〕自帝王至庶人之部　公忠五位、大外記、三統、至天暦三年、後撰集一、戀一、續後拾遺（撰）集、神、一、

〔後撰和歌集〕九戀歌一　題しらす

思ひやる心いつねにかよへともあふ坂の關こえすもあるかな

三統公忠

〔日本紀竟宴和歌〕天慶六年　得思兼神

從五位下行大外記兼近江權少掾三統宿禰公忠

度固豫那瑠、登離廼胡惠儞曾、伊婆斗々智、毗假利難岐豫波、安氣波芝賣氣流、

○公忠、日本紀竟宴ニ列スルコト、天慶六年十二月二十四日ノ條ニ見ユ、

年末雜載

京都積雪七寸

鴨社司敍位

平野社預卜部兼延補任

父好眞辭退ノ替

天文、

〔日本紀略〕村上天皇　正月廿四日、戊辰、夜雪、七寸於平地、

神社、

〔日本紀略〕村上天皇　四月廿三日、丙申、鴨社司敍位、

〔類聚符宣抄〕一諸神宮司補任事

卜部從八位上卜部宿禰兼延

右左少辨橘朝臣好古傳宣、左大臣宣、平野社預神祇權少史卜部好眞、依病辭退之替、宜以件兼延補之者、

天暦三年七月廿五日

奉行

伯王

大副大中臣朝臣

少副齋部宿禰

權少副大中臣

右大史阿蘇廣遠奉

大祐大中臣

權大祐中臣

少祐齋部

大史直

卜部好眞父子ノ世系

〔系圖纂要〕卜部朝臣姓 百號外十六

豐宗 卜部 承和遣唐使、
　平野預、
　好眞 平野預

兼延 伯、從五下、大副、吉田、平野預、
　永延元年十一ノ中申、行幸吉田社、可爲社務之由宣下、同二年、賜兼字、
　兼忠 大副、侍從、從五下、長上、
　　梅宮、吉田、平野預、
　　兼國 大副、
　　子孫在別、

〔吉田家譜〕系圖

豐宗 平野社預、
　好眞 平野社預、長上、

兼延 平野社、吉田社等預、從五位下、一條院御宇永延二年、以鎌足公諱片字、可置名字頭之由被宣下、以降當流用兼字、
　兼忠 平野、吉田、梅宮等社務、長上、正四位下、神祇大副、左衞門佐、
　　兼親 吉田社預、長上、從四位上、侍從、
　　兼國 平野、栗田宮、猪熊、藤井等祖、平野社預、從五位上、神祇大副、

佛寺、

延曆寺舍利會

〔日本紀略〕村上天皇 四月三日、丙子、天台山修舍利會、

〔慶延記〕十四醍醐寺雜事記十四

注進

醍醐寺寶藏文書櫃目錄事 上

合玖合內○中略○

一曾禰庄文書櫃一合納○中略○

四至帳幷寄人等夾名宣旨一卷五枚內○中略○

一枚公驗寺家請文

已上曾禰庄文書櫃納

天曆三年四月十六日○略○中

醍醐寺領伊勢曾禰莊公驗寺家請文

公家、

〔西宮記〕臨時一諸宣旨 中臣官人交替

〔北山抄〕十東途指南無直交易事 天曆三年、又立臨時用色目、不許其外、

中臣官人交替
臨時立用色目

諸家、

〔九曆〕三月廿一日、寅刻服紫雪二分、紅雪四兩三分、六度拾(イ)似快、

十月廿五日、家初行菊會事、

師輔服藥ス
同家菊會

延曆寺僧殺害セラル

尾張權介良岑是竝妻死ス

岡城寺僧敬一寂ス

圓珍ノ弟子

學藝、

〔淨土寺文書〕○一備後

妙法蓮華經卷第七

天曆（奥書）三年歲次己酉六月廿二日、奉仕畢、

□紀則常

一檀主物部氏

死歿、

〔日本紀略〕村上天皇

二月七日、辛巳、○中略今夜天台智淵阿闍梨弟子僧、於天台山爲人被斬殺、

〔九條殿記〕部類年中行事御體御卜

○九條家本

天曆三年六月十日、○中略自去月廿七日、尾張權介良岑朝臣是竝妻死穢、入交內裏也、

〔寺門傳記補錄〕十三僧傳部丁長吏高僧略傳上

敬一（智證）大師弟子、又學谷皇慶和尚補定心院十四禪師、任長吏、承平二年十月二十二日、從京意阿闍梨、入壇灌頂于山王院、年六十五、臘四十四、受後三年、以法傳於運昭供奉、天曆三年十月二十二日卒、年八十有二、

租稅、

天曆三年出雲勘出ノ穀穎

七條令解安倍良子ノ賣買地券文

延喜錢ヲ以テ價直ニ充ツ

〔延喜式裏文書〕○一公僧九條道實氏所藏

延喜式卷第十

主稅寮解　申正稅返却帳事

出雲國延久貳年正稅帳壹卷

從去延長元年至于延久貳年幷佰洋拾洋箇年、（年別返却帳、○中略）

（天慶）同三年勘出穀穎萬陸仟陸佰肆拾束洋把

穀仟伍佰貳斛洋斗壹升

顆仟洋佰拾束陸把○中略

以前附件人所進延久貳年正稅帳、依例勘畢、但應□（塡納）□（脫カ）□顆爲徵物勘出、即附返却、以解、

承曆貳年拾貳月參拾日

賣買、

〔東寺百合文書〕卷十之十二

○山城

七條令解　申立賣買地券文事

合地肆戶主、在左京七條一坊十五町西一行北四五六七門、

右得安倍朝臣良子辭狀偁、己之買領地也、而依有急用、延喜錢拾貫文充價直、

賣與檜前宿禰阿公子既畢、望請、依式欲立券文者、令依辭狀加覆、所陳有實、仍
賣買兩人幷保證等勒署名、立券文如件、以解、
天曆三年四月九日令

賣人安倍朝臣「良子」（自署下同ジ）
買人檜前宿禰

保證
右近衛船「濟」
中務史生伴「眞年」
內竪安倍「有名」
壹岐掾紀「　」

保證

左京職判、收家券弐通、一通職析、一通買人析、依延長七年六月廿九日本券文、判行如件、
同七年閏正月三日

大進藤原
少進橘
藤原

左京職判、收家券弐通、一通職析、一通買人析、依延長七年六月廿九日本券文、判行如件、
同七年閏正月三日

大夫源朝臣「國淵」
權大夫橘朝臣
亮藤原朝臣「遠」

伯耆講師

（題目裏ニ伯耆講師外四人ノ自署アリ、其上ニ物印二顆ヲ踏ス）

大屬　闕
少屬奈癸「利發」
立部「競口」十〇（本書、左京職印六顆ヲ踏ス、）

天曆四年庚戌

正月 大 壺 己亥 朔

一日、乙巳、節會、

〔妙音院相國白馬節會次第〕七日節會

李部王記云、朱雀、天慶（曆）四年正月一日、節會云々、右大（師朝）臣催立樂、申云、雅樂頭不參、可申代官、而日上不就陣頭、仍不能申其由、右大臣卽就宜陽殿、仰代官奏等云々、

〔三節會次第〕節會雜例

天曆四年正月一日、左少將伊尹爲代官、而間少納言參入、召之、○中略

外記不著外辨例

天曆四年正一、外記勘少納言不參例之間、○惡眼院關白白馬節會次第異事ナシ、

七日、己巳、節會、敍位、

〔西宮記〕正月中七日節會

吏部記云、天曆四年正月七日、雨儀云々、了右少辨好古立承明門東一間壇上、奏目錄、民部（藤原元方）卿云、須於廊下祿西、北面奏之、後日辨云、年來例皆如此、卿又經辨官者也、不知何善之、

天曆四年正月一日　七日

雅樂頭代

少納言代

雨儀目錄ヲ奏ス

〔三節會次第〕雜例　節會　中納言内辨例　略〇中

天暦四正七、民部卿元方、〇慈眼院關白白馬節會次第異事ナシ、

〔公卿補任〕五　大納言從三位藤顯忠、五十中宮大夫、正月七日正三位、

參議從三位伴保平、八四、十正月七日從三位、

正四位下藤師氏、三八、十右門督、正月七日正四下、

〔公卿補任〕五　天徳二年

參議正四位下源自明、四八、十同四正七正四下、

從四位下〔上〕橘好古、六六、十四年〔天暦〕正月七日從四下、

〔公卿補任〕五　康保四年　參議從四位上藤文範、五九、十天暦四正七從五上、

〔公卿補任〕六　安和二年　參議正四位下藤兼通、四五、十同四〔天暦〕正七從五上、

〔公卿補任〕六　永觀元年　參議正四位下橘恒平、六二、十同四〔天暦〕正七從五下、

〔公卿補任〕六　永祚元年　參議正四位下藤懷忠、五五、十天暦四正七從五下、氏、十六、

〔外記補任〕二　大外記從五位下出雲有時　正月七日敍、

〔菊亭文書〕一　空勘文草

勘申　女官加階敍位例事　略〇中

敍位例　略〇中　女孺敍位ノ例

女孺敍位例

額田全子　勞五十七年

天暦四年正月、敍外從五位下、〇略中

右補任、歷名等帳所注如件、仍勘申、

永正十八年四月廿七日　略〇下

〇額田全子敍位ノコト、便宜合敍ス、

八日、丙午、後七日御修法、

〔東寺長者補任〕一　長者權少僧都寬空　後七日法行之、

〔後七日御修法阿闍梨名帳〕村上天皇　四年、庚戌、權少僧都寬空　于時一長者、加持香水、律師延珍讀交名、

十一日、己酉、侍從ヲ補ス、

〔公卿補任〕六　天延元年　參議正四位上源忠清、三十同四正十一侍從、

十四日、壬子、御齋會内論義、

〔御質抄〕末加持香水　李部王記第二云、年中○中略天暦四年正月十四日、衆僧參入、寛空僧都進問答兀子間、加持香水、一灑而復座、等律師延珍立答者座北、讀僧交名云々、

寛空加持香水ス

〔台記〕久安六年正月十四日、壬辰、

先灑水後讀奏說

同記（李部王記第二）同卷、○中略天暦四年、○中略已上寛空僧正三度、件四人九度、皆灑水前、奏後、可下給諸記、

男踏歌、

〔花鳥餘情〕十三初子　同記（李部王記）云、天暦四年正月十四日、參中宮（穆子）、至于賜饗、用様器、水驛也、又侍院侍、須臾上（朱雀）皇還御寢殿、踏歌畢賜饗、猶驛也、

陽饌ニ様器ヲ用フ水驛ト猶驛

十八日、内辰賭弓、

〔西宮記〕二正月下　十八日賭弓　○前田家本　天暦四年正月十八日九記云、左右大將重服也、而依召參入、申刻召王卿、左大將給奏之後、早出云々、一度右勝、行酒事、仰中將義方朝臣出、是承平六年例也、此日所隨身弓矢裝束、黒漆弓、但以砥礪如蒔畫地、以篦爲弓柄骨、以鈍色絹耳（ハシイ）纏其上、不卷組、弓懸以鈍色革爲雁鼻

師輔所用ノ弓矢裝束

手覆、以白革著鞆緒、以雉雌羽作矢、以鈍色糸爲作糸、左（實頼）圀御弓調度、不異尋常、但弓不卷藤組、又矢作糸上塗墨、○北山抄同ジ、

重服中左右大將參內ス

天暦四年正月十八日小一條記云、今日賭弓也、左右（實頼、師輔）大將依召參內、乍重服、人左圀實頼、進奏後退出、右圀師輔、近衞府一度射訖乃退出、右近左兵衞勝云々、

〔北山抄〕十一年中要抄上　十八日賭射事　正月　重服大將依召參入、奉奏之後退出有例、○中略天暦四年例也、

二十日、戊午、參議平隨時ヲシテ、大宰大貳ヲ兼ネシム、

〔公卿補任〕五　參議正四位下平隨時、六十一、正月廿日兼大宰大貳、止修理大夫、

小野好古ノ替

從四位下野好古、六十七、大宰大貳、二月得替、

二十二日、庚申、式部卿敦實親王家歌合、

〔夫木和歌抄〕二十　雜部二　天暦四年正月庚申、（二十二日）敦實親王一品宮歌合、

よみ人しらす

霞より立こそまされひさかたのくものうへなるあまのかくやま

二十五日、癸亥、朱雀院ニ朝覲行幸アラセラル、

〔御遊抄〕二朝覲行幸　同四年（天暦）正月廿五日、幸朱雀院、謁見太后（穏子）、國史後抄、

〔近衛家文書〕十二勘例　代々朝覲行幸年々、○略○中

村上天皇　○略○中

同（天暦）四正廿五、癸亥、行幸朱雀院、○略○中

右注進如件、

閏二月十一日

〔陰陽博士安倍孝重勘進記〕下　六甲窮日例、以癸亥日、爲窮日、　備後守中原師季

村上天皇、天暦四年正月廿五日、癸亥、行幸朱雀院、

〔春記〕長久元年十二月十一日、壬辰、天晴、昨夜東宮權大夫被送無大將有行幸之例、○中略○天暦四年、朱雀院行幸、

二十九日、丁卯、女御藤原安子、若菜ヲ獻ズ、

〔師光年中行事〕正月上子日内藏司供若菜事　村上天皇天暦四年□（正カ）月廿九日李部王記云、是日女御安子朝臣獻若菜云々、

〔公事根源〕正月　供若菜上子日、

○上略天暦四年二月廿九日、女御安子の朝臣若菜を奉るよし、李部王の記に、見えたり、

○師光年中行事、月ヲ闕キ、公事根源、二月ニ作ル、今姑ク恆例ニ依リテ掲書ス、

二月小 己巳朔 盡

一日己巳、除目、

〔公卿補任〕五 參議正四位下大江維時、六、三、十(天暦)四年二月一日任參議、止大(式部)輔、

〔公卿補任〕五 天徳二年 參議從四位上藤朝成、四、二、十同(天暦)四正卅右中將、

從四位下(上)橘好古、六、六、十同(天暦四年正月)卅日民部大輔、

〔公卿補任〕五 康保元年 參議從四位上源重光、四、二、十天暦四正卅兼信乃權守、

〔公卿補任〕五 康保四年 參議正四位下藤齊敏、四、十、天暦四年正月卅日左兵衛權佐、

〔外記補任〕二 正月卅日任、元前越前守、

大外記從五位上多治實相 正月(正月)卅日遷駿河權守、

從五位下出雲有時 卅日任大、

雀部是連 正月卅日任少、

少外記紀理綱 正月卅日任、

權少外記春道有方 正月卅日任、(元敦カ)出納、

維時故忠平ノ顧問ニ備リ不次ノ賞ヲ蒙ル

心見渡ヲ過グ

山の井ニ到ル

藤原清正ノ赴任

〔敍位除目執筆抄〕天暦四正廿八縣召、二月一日入眼、執筆左大臣實賴、小野宮殿、

〔西宮記〕二 正月下 除目 大除目時、〇中略

〇前田家本 天暦四年正月卅日九記云、除目間、藏人來議所、召上達部、大臣參著膝突召之、納言以下參議乍立召之、而今乍(立召之カ)五日立下、是非也、

〔江吏部集〕中人倫部 昔高祖父江相公(音人)爲忠仁公(良房)之門人備顧問、祖父江中納言爲貞信(忠平)公之門人備顧問、皆蒙不次之賞、列卿相、

〔兼盛集〕〇圖書寮所藏 平兼盛(奥書)筑前守篤望(行平カ)、三男、母宮道氏、三十六人歌守、〇三十六人歌仙傳異事ナシ、天暦四年正月十六日任越前權

〔三十六人歌仙傳〕從五位上行紀伊守藤原朝臣清正 四年(天暦)二月、任近江介、

〔玉葉和歌集〕八旅歌 近江國へまかりけるに、人々まうてきて別おしみけるに、郭公待心をよみ侍ける、 藤原清正

さよふけて今もなかなん時鳥別をおしむ聲ときくへく

〔藤原清正集〕近江へ下りけるころ、心見のわたり過けるに、よいとふかし、あけぬとやこゝろみまてはきにけれとまた深きよのわたり成けり

又山の井といふ所に、道に人あへり、

みな人のむすひて過る山の井に我うちとけて影をみえぬる

○平棟盛、藤原清正等ノ任官、便宜合敍ス、

二日、庚午、右大臣師輔、内裏死穢ノ事ヲ定ム、

〔西宮記〕臨時一　定穢事　○前田家大永鈔本　天曆（裏書）四年二月二日、中院北門邊有死人頭、其形如破埦云々、右（師輔）大臣聞此由、蹔佇立、卽有定、不爲穢、諸祭如常云々、

〔石清水文書〕二　田中家文書　宮寺寶殿恠異事　勘申八幡宮寺言上穢物間事

右被仰下�append、八幡宮寺奏狀如此、可爲穢否事、可令注申者、○中略

天曆四年二月二日、中院北、内膳南門邊、有死人頭、其形如破埦、右大臣聞此由、蹔佇立、卽有定、不爲穢、諸祭如常、○中略

寬喜二年閏正月廿日

十日、戊寅、大藏省ヲシテ、諸國調庸雜物ノ好惡ヲ奏セシム、

〔政事要略〕五十一　調庸未進事　交替雜事十一

左中辨大江朝臣朝綱傳宣、（寬朝）左大臣宣、奉勅、諸國調庸雜物、各守參期、全可貢進者也、而不勤見納、巧成返抄、公用闕乏、莫不依斯、仍去天曆元年閏七月廿三日、

中院北門ニ死人ノ頭アリ穢ト爲サズ諸祭常ノ如シ

公用闕乏ス天曆元年

○其條ノ大同三年ノ格ニ精好合期可進納之由、下知諸國了、凌遲之漸積習不悛、大同三年正月七日格�append、輸納調庸、節制分明、勘責違期、料條嚴峻、而所司怠慢、鮮有遵行、不加督察、何以懲肅、宜仰大藏省、諸國所貢調庸等物、全精好濫惡之品、幷見進未進、合期過期等事、細錄上奏、各期限月（日カ）後卅日內奏盡、卽當隨事黜涉、以勵將來、兼下刑部、依法科處者、而件格出而不行、所司棄而如忘、今須見進未進、合期過期等事、細錄上奏、一如先格、隨其進納之多少、將定功過之褒貶、縱有他功、不勤見納之輩、抑其慶賞（歟イ）、將示懲誡、省宜始自今年、依宣行之、若有違越、處之重科者、

天曆四年二月十日　　左大史海宿禰業恒奉

十一日、己卯、得業生試、

〔類聚符宣抄〕九　得業生試　算得業生課試例事、○中略

式部省

勘竿生幷他道學生、准得業生課試、

又明經學生漆嶋長列、天曆四年二月十一日、下准得業生可課試宣旨、○中略

康保四年十一月廿七日

格ノ大同三年ノ格精好濫惡ノ品等ヲ勘錄シテ上奏セシム

格出デ、行ハレズ進納ノ多少ニ依リテ功過ヲ定ム

○試日詳ナラズ、姑ク本日ニ係ク、

十九日、丁亥、右兵衛佐従五位下藤原元輔ニ昇殿ヲ聴ス、尋デ、藏人ニ補ス、

〔公卿補任〕六　天祿三年　參議従四位上藤元輔、五十七、同（天暦）四二十九昇殿、三月七日補藏人、

〔職事補任〕村上天皇　五位藏人　右兵衛佐従五位下藤元輔　天暦四三七補、

是月、式部卿敦實親王、出家シ給フ、

〔僧綱補任抄出〕上　同（天暦）四年庚戌二月□日、寛平（宇多）第八、一品式部卿敦實親王入道、

〔大鏡裏書〕一品式部卿敦實親王事

宇多天皇皇子、母皇太后宮胤子、贈太政大臣高藤公女、寛平五年癸丑誕生、○中略

天暦四年二月□日出家、法名覺眞、

〔信明集〕式部（敦實）卿宮出家し給ける時、御とふらひに、小野（實頼）宮殿まいり給へるに、御あるしなとあるついてに、

うれしきも哀も深き春なれはわかかれかたき（ケカ）も見ゆるけふ哉

○敦實親王薨去ノコト、康保四年三月二日ノ條ニ見ユ、

御法名覺眞
實頼ノ訪問
源信明ノ歌

三月、大戊戌朔、盡

十日、癸未、石清水八幡宮領山城額田村稻八間里田畠臨時雜役ヲ免ズ、

〔石清水文書〕一　田中家文書　太政官符

太政官牒石清水八幡宮護國寺

宮寺所所庄園參拾肆箇處事

一應如舊領掌庄貳拾壹箇處事

山城國肆箇處○中略

壹處　字稻間庄　相樂郡

水田貳拾玖町貳段伍拾步　限南荒陵里參拾壹、參拾貳、參拾參之南畔、

四至　限東祝園稻間堺畷、限北下狛稻八間堺畷、

額田村參條稻捌間里壹坪壹町　貳坪壹町　參坪壹町　肆坪壹町

伍坪玖段　陸坪玖段　沫坪沫段　捌坪壹町　玖坪伍段　拾坪伍段

貳佰步　拾壹坪捌段　拾貳坪玖段　拾參坪伍段佰伍拾步　拾肆坪

伍段　拾伍坪沫段肆拾步　拾陸坪壹町　拾沫坪壹町　拾捌坪壹町

拾玖坪壹町　貳拾壹坪壹町　貳拾貳坪壹町　貳拾貳坪陸段　貳拾

山城國符

參坪伍段　貳拾陸坪壹段貳佰步　貳拾涋坪壹町　貳拾捌坪壹町
貳拾玖坪伍段　參拾坪壹町　參拾壹坪伍段　參拾貳坪參段　參拾
參坪貳段佰捌拾步
下村荒陵里拾玖坪壹町　貳拾坪壹町　參拾壹坪壹町　貳拾坪壹町
參拾貳坪參町　參拾壹坪壹町　參拾坪壹町　參拾壹坪壹町
右同符俾、同前勘奏俾、國司解狀云、田拾參町伍段、畠捌町伍段佰貳拾步
者、本寺注文云、件御庄御放生大會勅供代御庄也、所進天暦四年三月十
日國符云、奉免八幡宮御領額田村稻八間里田畠臨時雜役者、〇中略

河内國符

河內國涋箇處
壹處　字三宅山　在交野郡、
山仟肆佰町
御倉町幷舘院等內地陸町
免田貳拾參町
右同符俾、同前勘奏俾、〇中略　天暦四年三月廿日、守紀朝臣淑人賜彼郡符
云、可早免除八幡宮寺三宅御山司佃貳拾町正稅事、彼御寺去三年十一
月三日牒狀俾、件山在宮近邊尤要須也、仍免件正稅、充用宮雜事、將祈護
國者、已據神事、仍奉免如件者、〇中略

守紀淑人

以前庄園如件、國宜承知、依宣行之者、宮寺承知、牒到准狀、故牒、
延久四年九月五日修理左宮城判官正五位下行主計頭兼左大史算博士和泉守小槻宿禰（花押）牒
防鴨河使右少辨正五位下兼行左衞門權佐東宮學士備中介大江朝臣（國房自筆）

○二十日、石清水八幡宮寺領河內三宅山司佃田ノ正稅免除ノコト、便
宜合敍ス、

十一日、戊申、清涼殿ニ於テ、花宴アリ、

〔明星抄〕○三圖書寮本　花宴行事

天暦四年三月十一日、仁壽殿花宴、題、花樹雲深（裏ノ）コレモ宴ノ
〔北山抄〕三花宴事　拾遺雜抄上　清涼殿ニテアリ、

清涼殿東、又庇北第二間、立御倚子置物御机等、
供御硯、〇略ス、北階南簀子、敷菅圓座、爲王卿座、櫻樹下設文人座、西面北上、庭中當御
前立文臺、吳竹坤角設樂所座、御殿砌下給侍臣絃歌者座、〇中略天暦四年例也、如之、是賞櫻花也、
〔拾芥抄〕上末樂器部三十五　名物
琴　山水、李部王記云、天暦四年華宴、御遊琴、〇音律具類抄同ジ、

正稅ヲ免ジテ石清水宮ノ雜事ニ充用ス

櫻樹ノ下ニ文人ノ座ヲ設ク　吳竹ノ坤角ニ樂所ノ座ヲ設ク

權少僧都寬空ヲ金剛峯寺座主ニ、權律師延鑒ヲ東寺長者ニ補ス、

〔東寺長者補任〕一　三月十一日、圓明大法師補凡僧別當、延鑒任之替、

長者權少僧都寬空　三月十一日、補金剛峯寺座主、〇東寺長者次第同ジ、

權律師延鑒　眞言宗、東大寺三月十一日加任、六、四、十同廿七日拜堂、

〔東寺長者次第〕〇上仁和寺本　權大僧都延鑒　天暦四年三月十一日補長者、年、二長者、律師、秦氏、右京人、蓮舟律師付法弟子、同廿七日拜堂、

〔仁和寺御傳〕寬空僧正　同（天暦）四庚戌年三月十一日、補金剛峯寺座主、

十四日、辛亥、飛香舎ニ於テ、藤花ヲ御覽アラセラル、

〔新古今和歌集〕二春歌下　天暦四年三月十四日、藤つぼにわたらせ給て、花おしませ給けるに、　天暦御歌

まとゐしてみれともあかぬ藤なみのたゝまくおしきけふにもある哉

二十日、己丑、阿闍梨藥叡、職御曹司ニ於テ、女御藤原安子ノ平産ヲ祈ル、

〔御産部類記〕二錄利三十五所收　〇伏見宮御記　冷泉院　九條殿記　天暦四年閏五月十四日、〇中略　阿闍梨藥叡、去三月廿日、於式御曹司修善、其後至于今日、相從息所、頻修善及加持、今日稱疲歸向法性寺、仍施法服一具、入櫟匣一合、有鈍色袋、

御製

凡僧別當ヲ補ス

〇柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、

〇律師明達、女御安子ノ平產ヲ祈ルコト、五月三日ノ條ニ、皇子憲平御誕生ノコト、四月二十四日ノ條ニ見ユ、

二十九日、丙寅、觸穢ニ依リ、公卿ヲシテ、賀茂祭ノ日時ヲ定メシム、

〔西宮記〕四賀茂祭　天暦四年三月廿九日小一條記云、左（實頼）大臣以下、於陣頭議定賀茂祭事、外記勘申云、先例、无以下申酉日行此祭例、雖然准他祭、下申酉日可行之由、諸卿定申、仍從其定、進物所膳部觸穢、去廿日、參彼所也、仍有此定、

〇賀茂祭ノコト、四月三十日ノ條ニ見ユ、

上下社司ヲシテ祭ヲ延引等ノ事ヲ祈ラシム

四月大戊辰朔

五日、壬申、賀茂祭ノコトニ依リテ、御卜ヲ行フ、

〔年中行事祕抄〕四月下酉日賀茂祭例　天暦四年四月四日、辛未、仰云、今年賀茂祭、當今月十七日、而内裏有穢、來十八日可滿、已齋内也、先例、齋内穢時從停止、又有御卜停止、與以下申酉令祭吉凶事也、五日、壬申、□（召カ）鴨下社禰宜是秀、上社禰宜祝部春里、仰云、今年祭當十七八日、而内裏依有穢、停彼日、但下申酉當廿九、卅日、可被供奉、但神祇官卜云、被延引可宜、若臨彼期有不淨氣歟、上卿宣、奉勅、於明神社、各致誠可祈申者、○下略、賀茂祭ノコトニカヽル、本月三十日ノ條ニ收ム、年中行事抄同ジ、

〔北山抄〕一年中要抄上中申酉日賀茂祭事　四月　天暦四年、依穢令卜祭停止否之由、申云、後日被行可宜、若又穢氣出來歟、仍召上下社司、令祈申不淨氣不可出來、兼祭延日由、

十一日、戊申、外記政、

〔西宮記〕○臨時一　前田家　外記政　大永鈔本　召使（裏書）不參之時、官掌申時事、雖有前聞、引勘年日記、難見件由、天暦四年四月十一日、少外記理綱申大納言清蔭卿、上卿仰此事、雖有前聞、其例不顯著云々、卽起左衞門陣入内云々、近代有其例、

十七日、甲申、賀茂祭延引ニ依リテ、大祓ヲ修ス、

〔西宮記〕四月賀茂祭　天暦四年三月廿九日小一條記云、○中略、賀茂祭日ヲ改定スルコトニカヽル、三月二十九日ノ條ニ收ム、四月十七日、有賀茂祭延引大祓、

三十日、丁酉、賀茂祭、

〔年中行事祕抄〕四月下酉日賀茂祭例　○上略、賀茂祭ノコトニ依リテ、御卜ヲ行フコトニカヽル、本月五日ノ條ニ收ム、件祭有穢從停止、而今有朝議、以廿九、卅日可祭云々、廿七日、甲午、賀茂御禊也、卅日、丁酉、鴨祭也、○年中行事抄同ジ、

〔北山抄〕一年中要抄上中申酉日賀茂祭事　四月　天德四年○中略、賀茂祭、依天暦四年例、以下酉可行云々、

〔園太暦〕二十四　文和四年四月十一日、

賀茂祭延引例

天暦四四卅行之、○略、以上中、内裏穢、

○觸穢ニ依リ、公卿ヲシテ、賀茂祭ノ日時ヲ定メシムルコト、三月二十九日ノ條ニ依リテ、御卜ヲ行フコト、本月五日ノ條ニ、賀茂祭延引ニ依リテ、大祓ヲ修スルコト、同月十七日ノ條ニ見ユ、

是月、式部官人等不參ニ依リテ、郡司讀奏ヲ停ム、

〔北山抄〕三讀奏事　拾遺雜抄上　寬平四年、丞一人參仕之例、天曆四年、雖申此例、依可無儀式停止畢、

○本書月日ヲ闕ク、今恆例ニ依リテ掲書ス

五月　小盡　戊戌朔

三日、庚子、近衞府荒手結、

〔左經記〕長元元年五月十七日、辛亥、天晴、左近將曹延名來語云、去三日府手番日有定、○中略又大將（敦通）依御重服、雖給纒絁米十五石、不給被物等、是依先例所被行云々、去天曆四年、小野（師輔）、九條殿兩殿、共不出祿、纒絁等、而給纒絁之旨、依何所被行哉、

○本書月日ヲ闕ク、姑ク恆例ニ據リテ掲書ス、

律師明達等、女御藤原安子ノ平產ヲ祈ル、

〔御產部類記〕二錄利三十五所收　伏見宮御記　冷泉院　九條殿記　天曆四年閏五月二日、戊辰、○中略明達律師自去月三日至于今日祗候、修善兼守護云々、今日還上本山、被物鈍色細長一襲、單重袴一腰、童子等料、信濃布廿段、又圓賀師同自彼之日候、依今日歸去、施信濃布十段、○柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、

○阿闍梨藥叡、女御安子ノ平產ヲ祈ルコト、三月二十日ノ條ニ、明達ニ度者ヲ賜フコト、本月二十九日ノ條ニ見ユ、

五日、壬寅、上皇ノ女御從三位熙子女王薨ズ、

〔榮華物語〕一月宴　岡本（保明）女王也、文彥太子一女、母左大臣時平女也、○中略（物註）照子

左右大臣纒料等ヲ出サズ

新藤來月二日ニ至ルニ被物アリ圓賀ト交替ス

天慶(曆)四五五卒、

〔玉葉〕安元二年九月十四日、丙辰、

六條院御事○中略

又天曆四年三月十五日、從三位熙子女王薨、(主上姪子、)然而無薨奏、

〔玉葉和歌集〕十七雜歌四　女御熙子女王かくれて後、よませ給うける、

朱雀院御製

ひとりねにありし昔のおもほえて猶なき床をもとめつる哉

〔一代要記〕朱雀天皇後宮　女御正四位下熙子女王　承平七年二月十九日、爲女御、天曆四年五月五日、敍從三位、文彥太子女、母左大臣時平女、

〔本朝皇胤紹運錄〕

保明親王

熙子女王　朱雀院女御、

朱雀天皇

昌子內親王　冷泉院皇后、觀音院本願、母熙子女王、

薨奏ヲ行ハズ

上皇ノ御哀悼歌

御官歷

御世系

〔榮華物語〕一月宴　朱雀院は、御子たちおはしまさゝりけり、唯王(熙子)女御ときこえける御腹に、えもいはずうつくしき女(昌子)みこ一所そおはしましける、(熙子)はゝ女御も、御子みつにてうせ給にしかは、(朱雀)御門われひとゝころかしこき物におもほし養ひ奉り給ける、いかてきさきにすへ奉らんとおほしけれと、例なきことにて、くちおしくてそすくさせ給ける、昌子內親王とそきこえさせける、

○熙子女王薨去ノコト、玉葉、三月十五日ニ作ル、今姑ク富岡本榮華物語傍註ニ據リテ揭書ス、

〔參考〕

〔塙史料〕村上天皇事記五上　按一代要記、爲此日敍三位、蓋及疾危急、特有此恩歟、

下總守藤原有行ヲシテ、押領使ヲ兼ネシメ、隨兵三十人ヲ賜フ、

〔朝野群載〕二十二諸國雜事上申兼押領使幷給隨兵　從五位下下總守藤原朝臣有行、誠惶誠恐謹言、

請被特蒙天恩、因准先例、兼行押領使、幷給隨兵卅人狀、

右謹檢案內、當國隣國司等、帶押領使、幷給隨兵、勤行公事、其例尤多、近則前司守從五位下菅原朝臣名明、依天慶九年八月六日符、（其アリ、條）兼押領使、幷給隨兵卅人、凡坂東諸國、不善之輩、橫行所部、道路之間、取物害人、如此物忿、日夜不絕、非施公威、何肅國土、望請天恩、因准先例、不責官物、國廻方略、漸以宛行、然則若有凶黨之輩、且以追捕、且以言上、有行誠惶誠恐謹言、

天曆四年二月廿日　　從五位下（ナシ）

同年五月五日、左大臣宣、奉勅、依請、

十六日、癸丑、諸社ニ奉幣使ヲ發遣ス、

〔西宮記〕（七前田家本）（○臨時奉幣　天曆四五十六、中納言源（高明）卿著左衞門陣外床子、納言參議東面北上、四位以下座之間、坤角也、其後立外記史內記座、南二丈、公卿座與使四位以下北面西上、與公卿座相去四尺、件座上立辨床子、去

二十日、己卯、少僧都救世ヲ內供奉ニ補ス、

〔東寺長者次第〕（上仁和寺本）○少僧都救世　天曆四年五月廿日補內供、御記、

二十一日、戊辰、除目、

坎日除目召仰アリ

〔西宮記〕（二前田家本）○正月下除目　坎日除目召仰例（天曆四年五月十八日、）

〔公卿補任〕（六安和元年）非參議從三位藤兼家、四十、（天曆）四年五廿一侍從、

〔敍位除目執筆抄〕天曆四五十九京官、（廿一日入眼、）執筆左大臣、

二十四日、辛酉、丹後守藤原遠規ノ第ニ於テ、皇子憲平御誕生アラセラル、

〔日本紀略〕冷泉院　諱憲平、村上天皇第二之子也、母故皇后藤原安子、故右大臣師輔朝臣之女也、天曆四年五月廿四日、辛酉、誕生于丹後守藤原遠規宅、

〔大鏡裏書〕中宮　安子　崩事

村上御記曰、○略　中天曆四年五月生男子、

〔御產部類記〕（二錄利三十五所收）（○伏見宮御記）冷泉院（村上天皇第二皇子、御諱憲平、皇后安子、九條殿御女、）

外記御產養、（女御々產事）天曆四年五月廿四日、辛酉、寅刻女御有御產事、其所高倉小路東、春日南、前但馬守藤原遠規宅也、

九條殿記（御誕生、產養、同已後儀、）天曆四年五月廿四日、寅剋男皇子誕育、自去夜子剋女御々產事有產氣色、修善解謝、雖度數相重、爲期平安、重立色々大願、具由在（於在衙五條宅有御產事之由、或本□物——外記々云、遠規春日高倉宅云々、）願文、卯剋以書狀付少納言乳母命婦、令奏男皇子平安產之由、返報云、主上尤有和悅安慰

師輔御安產ノ爲メ種々ノ大願ヲ立ツ　願文　男皇子御

國司ノ押領使ヲ兼ネ隨兵ヲ給フ者多シ

安産ヲ奏ス　御返報　御降誕ノ後、御野劍犀角虎首等ヲ枕上ニ置キテ御護トス　御臍緒幷ニ御哺乳始等ノ日ヲ勘ヘシム　御産衣ハ黄色ヲ用ヒサセラル

自内裏返事御劍事之氣、卽仰之、（令カ）自今以後、殊能令成祈願、兼以驗僧令守護者、降誕之後、卽野劍□（一カ）柄、犀角一株、虎首一頭、置枕上爲護、（自今以後、懷姙皇子、豫可儲件等物、臨其時雖求、忽難具、）又以書狀、申送事由於中宮臺盤所、報命之旨、大底同內裏、同剋左衞門督源高明卿來臨、奉問、爲令勘申雜事、召陰陽助平野宿禰茂樹、而忽稱障由不參、仍□（遣カ）權助秦連茂樹宅、相共令勘申、

始御臍緒幷御哺乳日時

今日辛酉　時辰二點　若午時二點（用午時、）

始具御湯殿調度時

今日時辰二點

御沐浴時

今日戊（時脫カ）二點（但御浴水可汲卯方、御船可居申方、）　若午二點

初著給御衣日時

廿六日癸亥　時巳二點　若午二點

廿八日乙丑　時午二點　若酉二點

但以黄色衣可用給、

勅使綸命ヲ傳フ　中宮及ビ朱雀上皇ノ御使恩命ヲ傳フ　僧侶ヲシテ七日間神供ニ奉仕セシム

辰時中使藏人左衞門尉藤原季平來、傳綸命、仰旨同今朝少納言所傳之旨已剋左兵衞督中納言（師尹、）來問、其消息云、重服之人不可必參來、而承平安之由、蓋參門外、加以閤（關脫カ）下同重服也、因之參向云々、仁和寺禪公以書狀被訪、左（實頼）大臣差掃部頭源朝臣公輔奉問、午剋中（證子）宮御使亮常行朝臣、朱雀院御使侍從重光朝臣來、傳恩命、按察中納言（在衡、）來問、今朝召□法師、仰奉爲皇子、始自今日七个日間、可奉仕元神供之由、其料物以不穢之處物宛之、依件法師精知彼道也、

喚故中納言平時望卿女子、（兼通舊室、先日令奉仕乳付、）時午二點矣、晚頭臨時贈絹六疋、以繼褁之、先是、侍醫（豫被仰此由、）季富等供甘草汁、次以蜜和光明□（土カ）砂、塗御脣、以故當季朝臣息左（女脫カ）近局、爲乳母、（此事先日相定了、）修理大進源超率工部、令持材木、令作御湯殿雜具、（家爲職別當、仍所召仰也、）

御乳付　侍醫甘草ノ汁ヲ供ズ　蜜ヲ御脣ニ塗ル　御乳母　御湯殿ノ雜具

御湯槽一隻（有臺、）

床子二脚（一脚奉仕御湯殿人候料、）

二階一脚（具御劍虎頭犀角等料、）

疊臺四脚（居疊八口料、）

天暦四年五月二十四日

御浴湯ノ次第
童女等白装束ヲ著ス
御讀書人ハ勅定ニ依ル打弦二十人
師輔重服ト雖モ其所ニ臨ミテ行事ス
紀在昌孝經天子章ヲ讀ム
女御政所饗饌ヲ設ク
師輔皇子御誕生ヲ氏神鹿島ニ祈ル

未剋調置件雑具於中取二脚、舁立於庭中、女御宅政所、進匏四口、御樋、盌等之覆、供御湯槽下敷手作布打敷一條、件絹布等、（益カ）置其程、女房等調備付政所、戌剋供御浴、其次第者、南庇中間邊安御槽等、童女二人、下仕二人著白装束、女御政所知家事一人著絹當色、雑色長一人、雑色一人著手作當色、御湯供備畢之後、以仁和寺寛忠（法脱カ）師、先令奉仕護身、次令加持御湯、次式部大輔紀朝臣在昌取副古文孝經於笏、立於庭中、今日以後、讀書人皆依天氣也、打弦者五位六位各十人、取弓立於讀書者之後、北面東上、異位重行、秉燭者六人在其後、女房等各著白裳唐衣、一人持虎頭、一人犀角、一人御劔、人形、列立於御前、相從御後之女房等有其數、僕（師カ）雖有重服之忌、依事不得止、臨其所而行事、少將伊尹之乳母大和奉仕御湯殿、依此女能知此道也、故平中納言（時望）室菅根朝臣女、奉仕御對湯、在昌讀孝經天子章、式部卿重明親王差源朝臣講奉問、太宰帥有明親王差先使、送鴈一翼、幷家池鯉二隻、其後躬自來臨奉問、以兼通令申恐由、此夕女御□政所設饗饌、家司宗海朝臣、時舒朝臣、守忠等預仕件事、○柳原家記錄所收御産記部類ヲ以テ校ス、

〔左經記〕長元七年八月廿五日、壬午、天晴、朝間降雨、○中略近曾見故九條御日記之次、安子后被祈男皇子之間、依貞信公御教、九條（師輔）大臣被祈鹿島、其後不經幾年、頻男皇子誕生、仍所申行也、

〔榮華物語〕一月宴　もとかたの御息（所脱）所たゝならぬ事のよし申てまかて給ぬれはもしをのこみこむまれ給へる物ならは、又なうめてたかるへき事に、よの人申思たるに、一のみこ（腐ホ）のゝしる程に、九條殿の女御（安子）、たゝにもおはしまさすといふ事、をのつから世にもりきこゆれと、元方の大納言、いてさりとも、さきのこともありきなときゝ思けり、おほ（忠ホ）ん殿も、九條殿もいとうれしうおほすほとに、うへは世はともあれかうもあれ、一のみこ（腐ホ）のみこのおはするを、うれしくたのもしき事に覺しめす、ことはり也、○中略かゝる程に、廿四日に、九條殿の女御（安子）男みこ（冷泉）うみ奉り給つ、内よりは、いつしか御はかしもて參り、おほかた御ありさま心ことにめてたし、よのおほえことにさはきのゝしりたり、もとかたの大納言かくと聞に、むねふたかる心ちして、物をたにもくはすなりにけり、いといみしくあさましき事をも、しあやまちつるかな、物おもひつきぬむねをやみつゝ、やまひつきぬる心ちして、同しくはいまはいかてとくまなむとのみおもふそ、けしからぬ心なりや、九條

師輔ト藤原元方
元方第二皇子ノ誕生ヲ嫉ム

藤原在衡ノ五條第ニテ御誕生アラセラルトノ説

殿には、御うふやのほとの儀式ありさまなと、まねひやらんかたなし、（師輔）おとゝの御心のうちおもひやるに、さはかりめてたき事ありなむや、小野宮の（實頼）おとゝも、一の御こ（雅正）よりは、これはうれしくおほさるへし、御門（村上）の御心の中にも、よろつ思ひなく、あひかなはせ給へるさまに、めてたうおほされけり、

〔大鏡〕一冷泉院　つきのみかとゝ冷泉院天皇と申き、御いみなのりひら、是むらかみ天皇の第二の皇子なり、御母皇后宮安子と申き、右大臣師輔のおとゝの第一の御むすめ也、此御門天暦四年庚戌五月廿四日、在衡のおとゝのいまた従五位下にて、備前介ときこえ給へりしおりの、五條の家にて生れさせ給へり、

〔大鏡〕四右大臣師輔　元方民部卿の御（實不）むまこ、まうけの君にておはするころ、みかとの御庚申せさせ給に、この民部卿まいり給へるさらなり、九條（師輔）殿さふらはせ給て、人々あまたさふらひ給て、たうたせ給ついでに、冷泉院のはらまれおはしましたるほとにて、さらぬたにによひといかゝとおもひ申たるに、九條殿、いてこよひ、たつかまつらんと、おほせらるゝまゝに、このはらまれ給へるみこおとこにおはしますへくは、てうろくいてことてうた

師輔重六ニ依リテ御誕ヲ皇子打ツ

生ヲ豫知ス

せ給へりけるに、たゝ一とにいてくるものか、ありとある人めをみかはして、めて感しもてはやし給、わかこの民部卿のけしきいとあしうなりて、いろもいとあをうこそなりたりけれ、

〔一代要記〕冷泉天皇　諱憲平、村上第二皇子、母皇后藤原安子、右大臣師輔一女也、天暦四年庚戌五月二十四日誕生、（母年二十四、○大鏡裏書同ジ、）

○藤原安子ノ平産ヲ祈ルコト、三月二十日及ビ本月三日ノ條ニ見ユ、

二十五日、壬戌、勅使ヲ皇子（憲平）ノ御産所ニ差遣セラル、

〔御産部類記〕二（錄利三十五所収伏見宮御記）冷泉院　九條殿記　天暦四年五月廿五日、中使藏人中務丞信孝來、問夜來動靜、令申息所腹中痛惱之由、參議右衞門督、（師氏）大藏卿保平、太宰大貳、（隨時）（誤カ）右大辨等參問、巳二剋供朝御湯、文章博士三統宿禰元夏讀古文孝經、鳴弦者五位六位各六人、申剋夕御湯殿、讀書鳴弦如朝、以民部大輔橘好古朝臣息女爲副乳母、元是奉仕故殿（忠不）者也、（○中略）八月九日、以左少辨雅量朝臣女五富子、爲副乳母、（○柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、）

○八月九日、副乳母ヲ補スルコト、便宜合敍ス、

皇子ノ御動靜ヲ問ハセ給フ

御湯毎ニ讀書鳴弦ヲ行ハル

朝夕御湯ヲ供ズ

副乳母

御儀式
給物頗ル過差
御厨子所鯉ヲ獻ズ
饗饌ヲ儲ク
良源護摩ヲ修ス
橘敏通史記黄帝本紀ヲ讀ム

二十六日、癸亥、皇子憲平御三夜、勅使ヲ發遣シテ、絹綿等ヲ賜フ、

〔御産部類記〕二（伏見宮御記）　錄利三〇十五（所收）　冷泉院　九條殿記　天暦四年五月廿六日、朝夕御浴如例、讀書打弦同昨日、戌剋藏人頭內藏頭有相朝臣、爲勅使有給物、綠廿疋、絹八十疋、白卅五十、赤綿二百屯、調布三百端、件給物頗似過差、傳聞、中（經子）宮初產男皇子之時、給物數同之、至于其後御產時、給絹五十疋云々、而如一親王生產之時、有件給物、此度何用彼數、御厨子所膳部平是明、依仰持來鯉二隻、此夕美濃權守興方、前但馬守遠規等儲饗膳、興方饗女房棊手廿六貫、饗男方棊手廿五貫、此日天台良源法師奉送數日護摩卷數、是彼師私君所奉仕也、付廻信贈□（信カ）乃布廿段、廿七日、陰、朝暮御浴如例、大學頭橘朝臣敏通讀史記五帝本記黄帝所藏人所出納御舩定遠依仰持來鯉一隻、此夕少納言乳母來、奉見皇子、語云、主上恩言、非專輒可申、天氣感悦、不知所喩、臨歸贈物、女裝束一襲、綾二疋、絹四疋、白二、赤二、件祿法頗過差、而件命婦其用意勝他人、仍所相加也、兵部（元長親王）宮之室孫王、送犀角二株、有銀劒袋、入金銀蒔繪匣、使源公廉、給祿、白張細長一襲、袴一具、〇（柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、）

大法師光智ヲ東大寺別當ニ補ス、

寛救秩滿ノ替
御儀式
師輔饗饌ヲ儲ク
十市良佐禮記文王世子篇ヲ

〔東大寺別當譜〕第四十八大法師光智　尊勝院、初興、華嚴宗、　自天暦四年寺務、〇（中略）
太政官牒　東大寺
傳燈大法師位光智年五十三十七、華嚴宗
右左（實頼）大臣宣、奉勅、件光智、宜補彼寺別當寬救秩滿之替者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、
天暦四年五月廿六日　正六位上行左少史栗前宿禰
從四位下行右中辨兼內藏頭藤原朝臣

〔東大寺別當次第〕四十五傳燈大法師光智　天暦四年五月廿六日官符、年五十七、臘卅七、花嚴宗、本寺、寬救秩滿替、左京人、平氏、

○醍醐雜事記、異事ナキヲ以テ略ス、

二十八日、乙丑、皇子憲平御五夜、

〔御産部類記〕二（伏見宮御記）　錄利三〇十五（所收）　冷泉院　九條殿記　天暦四年五月廿八日、雨、御浴殿竝讀書如昨、但不奉仕朝御湯、是依去夜御膳落也、家（略歟）政所儲饗、息所御膳、公幹、女房時方守行、有饗三具、男方、
廿九日、〇（中略）朝暮御浴打弦如昨、但明經博士十市宿禰良佐讀禮記文王世子

讀ム　師輔重服ト雖モ御五夜ノ儀ニ奉仕ス　至親ノ時重服ヲ忌マズ　御息所平產祈禱ノ功

篇、〇柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、

〔永昌記〕於院殿上有議定事

大治四年七月十日、丙戌、於院殿上、々達部等有被定申事云々、〇中略

御產後被渡御劍間事、〇中略

御產以後可被渡御劍、御袴等於皇子、御服以後可憚否被尋仰事

予未出仕、別當卿送院宣云、御產以後、被渡獻御劍若御袴於皇子事、御服以後、可被憚哉、若可有其憚者、自何所可被渡獻乎、可被計申者、

（藤原忠隆）

答申云、天曆四年五月、冷泉院於外祖父右丞相（師尹）第有御誕生、相府御重服、養產并次第事、多有沙汰、就中五夜事、偏令勤仕給、但於簾外座列事令憚給之由、所被注載也、然而被奉渡御劍、何事候乎、凡至親之時、强無其忌候事歟、事已大事、重可引見候、若又自大內令獻御如何、延長村上御誕育之日、朱雀院東宮有五夜御養產事、可被准據候歟、且以此旨、令洩奏給耳、

二十九日、丙寅、律師明達ニ度者ヲ賜フ、

〔御產部類記〕二〇伏見宮御記錄利三十五所收

九日、終日雨、中使藏人右衞門尉助信來、仰云、昨日所惱如何、令奏平存由之次、令加奏天台律師明達、年及九十、往日守護、而明日欲歸去之由、晚頭勅使藏人頭有相朝臣來、召出明達、傳仰云、息所平產、是依和尙祈念也、今依有所思食、給

度者一人者、明達稽首、承綸命悅懌不少、〇柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、

〇明達等、女御安子ノ平產ヲ祈ルコト、本月三日ノ條ニ見ユ、

藤壺女御御儀式

良佐尚書典ヲ讀ムヲ承ル

子内親王饗饌ヲ設ケラル

王卿座非參議及ビ殿上人ノ座

棊手錢ヲ分配ス

兩度勅使

閏五月大丁卯朔

一日、丁卯、皇子憲平御七夜ノ儀ヲ行ハセラル、〔御産部類記〕二 錄利三十五所收

丁卯、今日藤壺女御産後七日也、上官皆悉見參云々、

冷泉院 外記 女御々産七夜、上官皆參事

天曆四年閏五月一日、

九條殿記 天曆四年閏五月一日、丁卯、天陰、朝夕御浴如昨、良佐讀尚書堯典、

此日當第七夜、姬宮(承子内親王)政所設饗饌、息所御膳、衝重廿前、(織カ)繧打敷四枚、棊手五十貫、以上所洲濱、又有酒壺具一具、又親王公卿料廿前、每前繧打敷四枚、棊手五十貫、以上男房饗卅前、別當宮内少輔橘朝臣隆平奉仕、王卿座在西廂三間、南上東西面、南廂西妻懸軟障一條、其西面御笠維宗幷政所寄人等奉仕、幷母屋簾外合三間、幷北障子邊立五尺白綾屏風、同又庇有非參議幷殿上五位以上座、東面南上、中務卿式明親王、太宰帥有明親王、中納言兼左衞門督源卿、高明、非違別當、參議大藏卿伴保平卿、左大辨源庶明、大江維時、太宰大貳平隨時、右大辨源等來向、五六巡後分配棊手、親王三貫、納言二貫、參議一貫、殿上四位八百、五位六百、地下四位六百、五位四百、六位以下不預之、件錢分配以前、非違別當中納言退歸、依畏法制歟、至子剋各分散、須設召兩度中使勸盃事、付給祿事被物、而依纏頭制新舊相重、所不設也、王卿未著座之前、喚兩度中使藏人頭內

給物勅使ト恩問使

師輔重服ニ依リ簾中ニテ事ヲ行フ

師輔讀書博士侍醫等ニ祿ヲ給ス

讀書博士等七个日奉仕ス

僧綱以下來リ賀ス

藏頭有相朝臣者、爲廿六日給物勅使也、藏人左衞門少尉季平者、爲皇子降誕日恩問之使也、依事有先例、女房等勸盃酌、其座在南簀子敷、々長筵一枚、其上土敷二枚、茵一枚、圓座一枚、肴物每人折敷四枚、五六巡後纏頭、有相女裝束一襲、兒衣綵褓各一襲、季平白張細長一襲、袴一具、加物同上、此夜僕(將歟)依重服、不能垣下、蹙於簾中行事、

二日、戊辰、晩喚七个日讀書博士式部大輔紀朝臣、在昌、少輔三岑(統カ)宿禰元夏、大學頭橘朝臣敏通、但明經博士十市良佐、稱夜來本病發動之由不來、幷侍醫櫻井宿禰季富、陰陽權助秦連茂、右近將監三島眞祥、件眞祥、自□內宗信後、□等、給酒肴而給祿、在昌朝臣蟬翼朽葉色小褂、袴一具、三人博士各白張細長一襲、袴一具、但良佐宿禰、差息男以忠遣之、季富絹綿各一疋、連茂白絹、眞祥綿一疋、季富以上三人、七个日間祇候、仍厚賞祿、件人々給祿之後、於庭中再拜退出、此日以下、僧綱及諸寺名僧等面々來賀、依非要事不注具由、〇下略、明達、安子ノ平産ヲ祈ル

〔爲房卿記〕御産記 康和五年正月廿二日、壬寅、〇略 中ルコトニカ、ル、五月三日ノ條ニ收ム、柳原家記錄所收御産部類ヲ以テ校ス、

儀、仍臨昏如例人々參集、〇略 中座定之後、勅使藏人右少將顯國持參御前物饗祿等、〇略 中天曆冷泉院御産、天元一條院御産、二遣(ママ)絹、絹、不遣御前物、依爲藏人重隆之行事、可依先例之由諷諫之處、清涼記云、后宮懷孕之時、遣產具、又

女御更衣同之由被注者、無辨備、而有天氣云々、

〔伏見宮御記錄〕

利三十八皇子降誕浴殿讀書例

皇子降誕時浴殿讀書儒事

醍醐天皇之時、聊雖有此沙汰不分明、朱雀院以來、其儀炳焉、大略以學士侍讀爲其仁、有學士者必被用之、當代侍讀又用之、學士侍讀各一人相竝用之、或又被用侍讀之子、又母后宮司多被用之、其例在左、

一四位五位二人例

冷泉院　天曆四年五月廿四日降誕、

從四位下行式部大輔紀在昌

從四位上行式部大輔維時卿也、公卿不勤之、仍召加元夏、

當代侍讀

今一人侍讀者、參議式部大輔文章博士三統元夏

從五位上行式部少輔兼文章博士三統元夏

四日、庚午、申文アリ、

大舍人不參ニ依リ内豎ヲシテ盤ヲ羞メシム

〔西宮記〕

臨時一　申文

○前田家大永鈔本

（裏書）天曆四年五月四日九記云、申文了、左大辨云、預大舍人各申障由不參、仍納言以下無人羞盤者、忽有定、召內竪二人令役、

壹岐守ノ解由

男女房ノ饗アリ

勅使ヲシテ皇子ノ御動靜ヲ問ハシメ給フ

師輔奉答ス

（裏書）天曆四年閏五月四日小一條記云、業恒宿禰來、申壹岐守如松解由事、許之、今日左相府著廳政、著南所、無所預幷大舍人等、仍召內竪、權從事矣、

五日、辛未、太皇太后、皇子平憲ノ御產養ヲ行ハセラル、

〔御產部類記〕

二　○伏見宮御記

錄利三十五所收

（裏書）五日、辛未、陰、此日自中宮（藤子）給產餉、息所前衝重廿枚、面幷打敷等用蟬翼、有銀筒、箸、上洲濱等、酒壺具如例、有男女房饗、各用朱臺盤、（男方尺臺盤、前、女方尺前、）荒飩食十具、皇子御衣十襲、（五具唐綾、五具平絹、）繰五具、以上納橡木匣二合、有白絹縫立、同裏二條、棊手五十具、納深折櫃四合、置中取二脚、申刻先舁立飩食、次亮以下宮司及候彼宮、四位五位各取打敷及衝重等、進於御簾前、女房數十人於簾中待受傳奉之、次傳入衣祿匣、御使常行朝臣、其仰云、昨今動靜如何、然男皇子平安誕育之由、悅豫尤切、不堪感歎、專輒有此志者、謹奉仰事、頻勸盃酌、（其座在西又廂、敷土鋪幷茵、）肴物折敷四枚、四五巡後、（節朝）僕出勸盃、令兵衛佐兼通纏頭、女裝一襲、衣祿各一襲、報啓以恐悅之詞、○柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、

○皇子憲平御七夜ノコト、本月一日ノ條ニ見ユ、

ノ條ニ、御三七夜ノコト、同月十四日

十一日、丁丑、始メテ、豐受大神宮ニ權禰宜ヲ置ク、

〔類聚大補任〕豐受大神宮禰宜始加任二員事　豐受大神宮禰宜正六位上神主雅風　閏正(五)月十一日、加任二員、在任廿二年、禰宜冬雄二男、權禰宜大內人良彥二男也、宣旨權禰宜也、

十四日、庚辰、皇子憲平御三七夜ノ儀ヲ行ハセラル、右大臣師輔、皇子ノ御爲メニ、權律師實性ヲシテ、不動調伏法ヲ修セシム、

〔御產部類記〕二　〇伏見宮御記　錄利　三十五所收　冷泉院　九條殿記　天曆四年閏五月十四日、庚辰、此夜當三七日夜、式部(重明)卿宮北方(愛子)女房進向、奉問皇子、隨身衣褂各五襲、納櫟木白鑞、置口衣匣二合、有白縮線綾縫立蟬翼、納帷白綾裏等各二條、破子廿荷、檜破子十荷、朱破子十荷、臨歸絹十疋　裹纖、給相從女房等之中、〇中略、僧藥叡、女御安子ノ平產ヲ新ルコトニカヽル、三月二十日ノ條ニ收ム、請權律師實性、奉爲(金)今宮(不親王)令修不動調伏法、伴僧八口、依御湯殿殉爲鼠被喫之恠也、

廿一日、御修善了、阿闍梨以下給布施、但絹代施錢、〇柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、

檜破子
朱破子
御湯殿怪アリ

六月　小　丁酉朔　盡

十日、丙午、御體御卜奏、

〔御產部類記〕二　〇伏見宮御記　錄利　三十五所收　冷泉院　九條殿記　天曆四年六月廿五日、〇中略、召御前仰云、今月御躰御卜云、〇下略、柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、

〇本書月日ヲ闕ク、今恒例ニ據リテ揭書ス、

十一日、丁未、大神宮ニ奉幣ス、

〔園太曆〕十五　觀應元年十月五日、

被仰下二个條

一大嘗會條々、穢中其沙汰可爲何樣哉、可注進先傍例事、〇中略

一大嘗會條々、穢中其沙汰可爲何樣哉、可注進先傍例事、〇中略

同四六十六、伊勢以下諸社奉幣、〇中略、但伊勢幣、去十一日被加奉了、〇中略

觀應元年十月四日　神祇權大副卜部兼豐

〇諸社ニ奉幣スルコト、本月十六日ノ條ニ見ユ、

十四日、庚戌、越前氣比大神宮司ヲ任ズ、

〔類聚符宣抄〕一　諸神宮司補任事

太政官符式部省

天曆四年六月十日　十一日　十四日

宮司中臣良門　中臣良用　秩滿ノ替　陣ヨリ奉幣使ヲ發遣ス　上卿源高明

應補任氣比大神宮司正六位上中臣丸朝臣良門事

右左大臣宣、件人宜補彼大神宮司中臣良用秩滿之替者、省宜承知、依宣行之、

符到奉行、

左中辨

天曆四年六月十四日　　右大史

十六日、壬子、諸社ニ奉幣ス、

〔西宮記〕臨時六　臨時奉幣　伊勢使進發後還宮、自陣發諸社使、略　中　仰馬寮別以藏人、遣丹生、貴布禰給御牒、天曆四五十六、中納言源高明、去尋常座二許、

〔園太暦〕十五　觀應元年十月五日、

兩局

仙洞卅个日觸穢時、御禊大嘗會、院中御沙汰可有憚否准據例事、略　中

同四六十六、諸社奉幣、見兼豐注進、○中略

十月四日　　大外記師茂　略　中

被仰下二个條

一大嘗會條々、穢中其沙汰可爲何樣哉、可注進先傍例事、略　中

陣外ニ床子ヲ立ツ　請僧十二口　結願　藤原伊尹ヲ召シテ立太子ノ

同四六十六、伊勢以下諸社奉幣、陣外立床子、上卿以下著行之、○中略

觀應元年十月四日　　神祇權大副卜部兼豐

十七日、癸丑、皇子憲平東一條第ニ移御アルベキニ依リ、右大臣師輔、大僧都禪喜ヲシテ、同所ニ大般若經ヲ轉讀セシム、

〔御産部類記〕二　錄利三〇伏見宮御記

七日、奉爲今宮、於東家令轉讀大般若經、請僧十二口之中、僧都一人、禪喜、律師、覺惠、凡僧十口、是依自遠規宅來月十日可移御也、○柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、

○皇子、憲平、師輔ノ東一條第ニ移御ノコト、七月十日ノ條ニ見ユ、

二十五日、辛酉、臨時御讀經、

〔御産部類記〕二　錄利三〇伏見宮御記　三十五所收　五日、臨時御讀經結願、○柳原家記所收御產記部類ヲ以テ校ス、

二十六日、壬戌、立太子ノ日ヲ定ム、

〔御産部類記〕二　錄利三〇伏見宮御記　三十五所收　冷泉院　九條殿記　天曆四年六月十日、丙午、依固物忌閇門、左近少將伊尹來云、昨夜主上有所被仰之事、相會之次可申者、卽仰晩頭可來之由、爲愼午上也、酉剋召伊尹、申云、昨夜夕召御前、良久

師輔ヲ御前ニ召シテ立太子ノ事ヲ先例ニ御諮問アラルルニ師輔ノ奉答文徳宇多二天皇立太子ノ例

コト等ヲ仰セラルル皇太子位ハ暫モ曠クスベカラズ

被仰雑事、就中皇太子位不可暫曠之由、古今所誡、近者陣中幷后宮頻示物恠、不慮之妖非可測知、加以如云云者、有成祈願之輩者、若早不行、恐有噬臍之悔、而大臣期明年云々、頗似緩怠、抑件事、或依公卿上表、或雖不表請、而定行之、今所思者、依上表、請益於太上天皇、有便宜歟、具由大臣參入之由可相談者、答云、此仰不可更出口外、但期明春之由、是所不答申也、皇子降誕之後、第四夜、少納言乳母來著、談說之次曰、天皇聞食皇子降誕之由、歡悦之氣尤深、卽仰云、數年之願、已以圓滿、尋勘先例、誕育之後、三四月間、有立儲貳之例者云々、其時答云、事之速者、還有所畏、縱非今年、何有其恨云々、此事者言談之次、私所語彼命婦也、若命婦以此事漏奏歟、左右進退、只可順叡慮者也云々、十五日、參內、召御前仰云、儲宮事、往代之例、速以行之、於大臣心如何者、復命云、左右只在聖斷、非愚臣之可定申、但承伊尹傳仰之旨、戰懼無極、抑勘公卿上表之例、承和九年者、恒貞親王、彼年七月、依伴健峯等謀反、被廢黜也、至八月、諸卿上表也、其時田邑天皇生季十有餘年、承運雖在彼親王、至于忽行其事、必可有所憚、見此氣色、所獻表也、仁和三年八月者、是忠親王爲同腹之一男、抑勘次第、法皇是第七郎也、仁和天皇鍾愛雖深、依其藐次之下、非無所憚、太政大臣昭宣

清和陽成朱雀三天皇ノ立太子例

文獻彦太子ノ立儲例

公伺天氣之如此、相議所表也、彼帝又生年十有餘年、然則件兩例非可相准、但延喜初皇太子、四年十一月晦日降誕、至于明年正月、公卿上表也、幼稚皇子雖無表例、至于此般、頗有內謀云々、其故者、延喜天皇始加元服之夜、東院后御女妃內親王、幷今太皇太后共欲參入、而法皇承母后之命、被停中宮之參入也、其後彼妃內親王、不幾而依生而薨、其時彼東院后宮聞浮說云、依中宮母氏之寃靈、有此妖云々、因之重可被停中宮之參入云々、而故贈太政大臣時平左右廻令參入也、法皇雖有怒氣、事已成也、不能遏給、大后不經幾程、產男皇子、延喜天皇雖存舊例、爲恐法皇之命、不敢及其儀、贈太政大臣見此氣色、相議上表也、此事不見文簿、又雖乏相知之人、昔側所傳承也、然則件例亦非可全准、又天安皇子三月降誕、十一月立爲太子、今玆雖諒闇、依事不得止也、貞觀皇子十二月降誕、明季三月爲太子、是經三个月也、朱雀院太上天皇延長元季降誕、三年十月爲太子、件等例已無上表、若早可被行者、何必待表請、加以左右大臣以下重服之人、何行其儀若猶可待上表者、大臣等除服之後、八月以後被行者宜歟、仰云、遠期非所美、勘先例、七月多行大事、無殊妨者、來月可遂行之、抑進向中宮、將語聞此由者、○中略、皇子移御アルベキニ依リ、大般若經ヲ轉讀スルコトニカ、ルニ、本月十七日ノ條ニ收ム、

陰陽師等ヲシテ吉日ヲ選バシム

勘文ヲ進メシム

御使

廿五日、○中略、臨時御讀經ノコト了後召御前仰云、今月御躰御卜云、七月上旬、依行幸、若有御藥事歟云云、今案事、十六日、已入七月節也、何無所恐障、仍以書狀奉中宮、報命云、此事悚思惟可被行者也、至于國家大事、愚心難計者也云々、但先定期日後、可請上皇處分、明日召陰陽師等、令擇申吉日者、退出後、令伊尹奏云、以誰人可令擇之、又於何處可令進勘文乎、仰云、先(桓武)帝御日記云、延長三年、故太(忠平)政大臣爲左大臣、而召陰陽頭氏弘一人於大臣家、令勘申者、然則召助茂樹(此間頭闕)、於大臣家、令勘申者、

廿六日、召茂樹令進勘文、來月廿三日、戊子、尤吉者、午剋參內、令伊尹奏之、仰云、以件日可遂行之、○中略、立太子後ノ御所ヲ定ムルコトカ、七月十一日ノ條ニ收ム、

廿七日、參朱雀院、候中(貞子)宮御前、密仰云、近曾有內裏御消息、是可立儲貳之旨也、若早可被行者、以其旨可被聞上皇者也、事已成就之後、有御消息者、若有所思食歟者、○柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、

○憲平親王ヲ立テ、皇太子ト爲スコト、七月二十三日ノ條ニ見ユ、

二十八日甲子、立太子ノ由ヲ、後山科山陵ニ告ゲ給フ、

〔日本紀略〕冷泉院　天曆四年六月廿八日村上天皇遣參議大江維時朝臣於

宸筆御書

御書ヲ陵前ニ燒ク

後山科山陵、告可立太子之由、

〔御產部類記〕(二條伏見宮御記錄所收)冷泉院　九條殿記　天曆四年六月廿八日、甲子、天皇差參議大江維時朝臣、被奉御書於後山階山陵、其詞云、某頓首再拜謹言、前申遙望山陵之德、偏仰雨露之恩、禱請可生胤嗣之由、方今丹祈有驗、冥感無疆、男子新生、當遵舊典、仍卜佳期於來月、欲定位於前皇、伏乞彌施恩德、常加靈翼、幼稚之日、能保守器之名、長成之時、遂致傳業之慶、頓首再拜謹言、

天曆四季六月廿八日　有御名、

件事、後日江相公密々傳示之、爲後所記也、讀申之後、卽於御前燒之云々、○柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、

○憲平親王ヲ立テ、皇太子ト爲スコト、七月二十三日ノ條ニ見ユ、

是月、東大寺羂索院ノ雙倉朽損セルニ依リテ、納物ヲ正藏ニ移ス、

〔東大寺要錄〕四諸院章四　羂索院雙倉納物尤多、

右前帳云、阿彌陀堂藥師堂等雜物、依去延喜廿年十二月十四日宣旨文、皆移納於羂索院雙倉、以爲綱封、○其條アリ、而不開勘者、件倉朽損、前別當大法師任中、

蓋瓦材木悉頽落、仍解文言上之日、依天暦四年六月綱牒旨、威儀師(脱アラン)從儀師勸茂爲使、件所納之雜物寶、併移納正藏三小藏南端藏、綱封云々、

蓋瓦材木悉ク頽落ス

七月　大　丙寅朔　盡

二日、丁卯、右大臣師輔、石清水、平野等ノ七社ニ皇子(憲平)ノ御息災ヲ祈ル、

〔御産部類記〕二〇伏見宮御記錄所收　冷泉院　九條殿記　天暦四年七月二日、始自今日三个日間、於七箇社、奉爲今宮(憲平)、令祈御息災由、使僧八幡奉還、平野寬仁、賀茂上正賀、下延喜、春日義合、大原野顯朝、稻荷辰應、中略、○送料物於圓賀師所、奉爲今宮、始自今日廿一个日間、令供聖天、又於橫川良源所、同廿一个日間、令奉仕火供、又自今日至廿五日、於廣隆、清水、法性三个寺、奉爲同宮、每日諷誦、施物寺別、每日各調布一端、○柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、

○皇子憲平御降誕ノコト、五月二十四日ノ條ニ見ユ、

良源ニ火供ヲ修セシム　廣隆寺等ニ御諷誦アリ

三日、戊辰、大納言正三位源清蔭薨ズ、

〔公卿補任〕五　大納言正三位源清蔭　七月三日薨、六十參議十五年、中納言十年、大納言三年、

〔一代要記〕村上天皇大納言　源清蔭　同(天曆)四年七月三日薨、年六十七、

〔西宮記〕臨時六官奏　天暦四年七月十七日、○中略有薨奏、

〔公卿補任〕參議正四位下源清蔭、四十二、十元慶天皇第一皇子、母紀氏、號紀君、延

薨奏　官歷

喜三正七従四位上、同四十二廿八補次侍従、同七正十三信乃權守、十月十日
大藏卿、同十九正七正四位下、延長三年正月卅日任參議、十一月兼大藏卿、同
四年正月廿九日兼備前權守、〇以上四、承平五年二月廿三日兼右衞門督、同六年
正月廿九日兼備前守、同七年正月七日從三位、天慶二年十二月廿七日任權
中納言、右衞門督如元、同四年十二月十八日轉正、天暦元年六月六日兼按察
使、同二年正月卅日敍正三位、任大納言、止按察使、〇以上五、

〔尊卑分脈〕陽成源氏

陽成天皇
- 源清蔭 大納言、正二、(三カ)大藏卿、延長三五廿陽源姓、後撰、新古、新勅等作者、天暦四七三薨、六十才、(七歟ヒ)母紀氏、號紀君、
  - 兼房 上總介、從五下、(上イ)改兼序云々、母、
  - 忘江 周防介、從五上、母、
  - 兼忠 參議、從三位、母、
  - 兼材 右馬權頭、從五下、
  - 兼基 左衞門佐、從五上、母、

〔花鳥餘情〕二十七寄生

同皇女〇略 中 (靈關)
- 韶子内親王、配大納言源清蔭卿、後配河内

清蔭ト藤原褒子

清蔭ト俊子

守橘惟風、

〔大和物語〕上 故源大納言(清蔭)、宰相におはしける時、京極のみやす(褒子)ところ、亭(宇多)
子院の御賀つかうまつり給〇延長四年九月二十八日ノ條參看、とて、かゝる事をなんせむ
と思ふ、さゝけもの一えた、二えたせさせて給へと聞え給ひければ、ひけこ
をあまたせさせ給ふて、としこにいろ〳〵にそめさせ給ひけり、しきもの
ゝをりものともいろ〳〵にそめ、よりくみなにかと、みなあつけてせさせ
給ひけり、そのものともを、九月つこもりに、みないそきはてゝけり、さてそ
の十月ついたちの日、此ものいそきたまひける人のもとに、をこせたりけ
る、

千々の色にいそきし秋は過にけり今は時雨に何を染まし〇新勅撰和歌集同ジ、

そのものいそき給けるときは、まもなく、これよりもかれよりもいひかは
し給けるを、それよりのちは、その事とやなかりけむ、せうそこもいはて、し
はすのつこもりになりにけれは、

かたかけの舟にやのれる白浪のさはく時のみ思出るきみ

清陰ト俊子ノ女あやつこ　清陰トよぶこ

となんいへりけるを、その返しをもせて、としこえにけり、さてきさらきはかりに、やなきのしなひ、ものよりもけになかきなん此家に有けるを折て、

青柳の糸うちはへてのとかなる春日しも社思出けれ

とてなんやりたまへりければ、いとになくめてゝ、のちまてなんかたりける、

源大納言の君の御もとに、としこはつねにまいりけり、そうまゝゝてすむときもありけり、おかしき人にて、よろつのことを常にいひかはし給ひにけり、つれ〳〵なる日、このおとゝ、としこ、又このむすめあねにあたるあやつことといひて有けり、母にゝて心もおかしかりけり、又このおとこ（一カ）のもとによふことといふ人有けり、それも物の哀まりていと心おかしき人なりけり、これ四人つとひてよろつの物かたりし、世中のはかなきこと、せけんのあはれなることといひ〳〵て、かのおとゝのよみ給ける、

いひつゝも世ははかなきをかたみには哀といかて君にみえまし　○新勅撰和歌

集同ジ、

とよみ給けれは、たれ〳〵も返しはせてあつまりてよゝとなんなきける、

あやしかりけるものともにこそはありけれ、

故源大納言のきみ、たゝふさのぬしのみむすめ東のかたを、年比思てすみわたり給けるを、亭子院の若宮（御子）につき奉り給ふて、ほとへにけり、子ともなとありけれは、ことともたえすおなしところになんすみ給ける、さてよみてやり給ひける、

住の江の松ならなくに久しくもきみとねぬよの成にけるかな　○拾遺和歌集、

二句ヲ松ならねともニ作ル、

とありけれは、返し、

久しくもおもほえねとも住のえの松やふたゝひ生かはるらん　○拾遺和歌集、

三句ヲ住吉ノニ作ル、

となむありける、

おなしおと（清陰）ゝ、かのみやをえ奉り給ふて、みかとのあはせたてまつり給へりけれと、はしめころおのひて、よる（なか）〳〵かよひ給ひけるころかへりて、

あくといへはおつ心なき春夜の夢とや君をよるのみはみん　○新古今和歌

清蔭ト藤原定國ノ室

集同ジ、

〔後撰和歌集〕十戀歌二　さたくにの朝臣のみやす所（和香子）、きよかけの朝臣と（一ト脱カ）、みちのくにゝある所々をつくして、歌によみかはして、今はよむへきところなしといひけれは、

さても猶まかきの嶋のありけれは立よりぬへくおもほゆるかな

源清蔭朝臣

清蔭ト御匣殿別當

〔後撰和歌集〕十戀歌五　みくしけとのゝへたうにつかはしける、

きよかけの朝臣

身のならん事をもしらすこく舟はなみの心もつゝまさりけり

清院ノ東對ノ女

年をへて、かたらふ人のつれなくのみ侍りけれは、うつろひたる菊につけてつかはしける、

清蔭朝臣

かくはかりふかきいろにもうつろふを猶君菊の花といはなん

清蔭ト本

〔拾遺和歌集〕十戀二　本院のひんかしのたいの君に、まかりかよひてあしたに、

大納言きよかけ

ふたつなき心は君にをきつるを又ほともなく戀しきやなそ

歌什

〔勅撰作者部類〕自帝王至庶人之部　清蔭正三位、大納言、源陽成院御子、天慶四年薨、後撰集春下、一戀五、

御産衣産婦ノ饌等ヲ贈ラル

王卿以下詩ヲ上ル

支佐木筥使ニ纏頭ス

二源清蔭朝臣、拾遺集二戀二、新古今集一戀三、新勅撰集一雜三、

五日、庚午、除目、

〔公卿補任〕五康保四年　參議從四位上藤文範、五、十、同（天暦四年）七月五日右衞門權佐、

〔公卿補任〕六天延三年　參議從四位上藤爲輔、五、十、同（天暦）四七五因幡守、

七日、壬申、七夕御遊、

〔北山抄〕三花宴事　拾遺雜抄上　天暦四年七月七日、章明親王以下獻詩、奏管絃、御書所樂所人等預參、

女御藤原安子、皇子憲平ノ御産養ヲ行フ、

〔花鳥餘情〕二十七寄生　李部王記、天暦四年七月七日、是夕藤女御（安子）有產養事、產婦饌、衝重十六合、破子食七荷、屯食八具、碁手錢二萬、贈物兒衣、襁褓各五重、納支佐木筥二合、有白絹裏、使大藏丞藤原守忠傳言云、物雖鄙陋、今宮（憲平）所贈、蓋可有意、報云、恩問備至、恐喜兼深、況承宮恩命、忻恐無極、卽纏頭白細長一重、袴一具、守忠令遁出門、追傳報賜祿、

十日、乙亥、皇子憲平、右大臣師輔ノ東一條第ニ移ラセラル、

〔御産部類記〕二〇伏見宮御記錄利三十五所收　冷泉院　九條殿記　天暦四年七月十

宅主饗ヲ設ク

日、亥剋女御及今宮、女一宮等、自遠規朝臣宅、移徙於中御門家、宅主遠規設男女房饗、内裏殿上四位五位六位等合十人、依仰來向也、設座於西又庇、薦酒食、時剋已至、欲出門之間、令陰陽助茂樹宿禰行反閇之事、

反閇

一車（庇指、）二金押檳榔云々、（以上二両車副等、著當色、）

雅子内親王饗ヲ設ケラル

未移著之前、々齋（雅子）宮内親王設女房男方等饗、（男方饗、在西對南面、）屯食十一具、（一具精進、加持僧料、）舁立於南庭、棊手五十貫、分配法、（殿上四位一貫、五位八百、六位六百、地下五位六百、）子剋各分散、遺錢廿餘貫、入於内方云々、此夜大風、到曉飩食頒給於所々、（○柳原家記錄所收御産記部類ヲ以テ校ス、）

棊手錢ノ分配法

○師輔、皇子（憲平）ノ移御ニ依リ、東一條第ニ於テ、讀經セシムルコト、六月十七日ノ條ニ見ユ、

東宮御所ノ選定ヲ勅問アラセラル

十一日、丙子、東宮御所ヲ定ム、

〔御産部類記〕（二錄利三十五所收）

六日、（○中略、六月二十六日ノ條ニ收ム、）午刻參内、（○中略）仰云、（○中略）抑先例、立皇太子之後、不經幾日、入於東宮若職曹司、而東宮凶事之後也（已カ）及數十年、荒凉也（已カ）甚、至于職者、亦有所憚、（延喜次皇太子於東職薨也、）尋求宮中便所、修造之間、若經數月歟、恐事之乖先例、奏云、如此之事、隨便宜可被行者也、在昔東宮及職曹司、無有破損、仍早移入也、當今

此兩處雜舍顚倒、所殘不幾、又諸司之間、忽無其處、加以秋三月王相在西、皇子居處、當宮城之東擇便處、而三个月間加修理、移徙尤宜歟、仰云、所申之宜（便宜カ）非無其理、然而庶事依先例可行者也、若數月在里第者、遺後代之謗歟、重奏云、太上天皇遜位之後、不可一日留禁中、而去天慶九年四月、禪位之後、上皇猶御弘徽殿、至七月、御出於朱雀院、是則依夏三月南方王相也、又皇后數日不可住人家、而當今大后（穆子）者、延長元年四月后（立脫カ）、住太政大臣五條家之間、即職至十月（九）、移御主殿寮、（○延長元年九月五日ノ條參看、）是亦雖非無憚例、有新議被行云々、以是謂之當時之定、無殊難歟、若猶可有其難、先造設居處、可被行其事歟、（○中略）

重ネテ勅ヲ賜フ

七月十一日、（○中略、皇子ノ御名ヲ定ムルコト、十五日ノ條ニ收ム、）退後相語頭辨（右相）云、如先日仰者、東宮是皇太子之居處也、何依一度之凶事、長棄其處、宜加修造、令住彼宮者、仰旨是尤道理也、非可敢申、然而延喜初太子（保明親王）成人之後、於彼宮俄天、其後破壞尤盛、殆如曠野、今偏論道理、令住幼少之皇子、非無所畏、延長、天慶之例、以凝華舍爲皇太子宿廬、至于此兩太子者、已后腹親王也、非可敢准因先例、貞觀之代、右大臣良相卿給曹司於中重、臣下已候陣中、然則此度太子、以桂芳房欲爲宿廬、宜量便宜奏此由、仰云、事是宜矣、可隨行者云々、（○柳原家記錄所收御産記部類ヲ以テ校ス、）

延長天慶ノ例

桂芳坊ヲ宿廬ト爲サントス

十五日、庚辰、皇子憲平ヲ親王ト爲ス、

〔日本紀略〕冷泉院　天暦四年七月十五日庚辰、爲親王、

〔御産部類記〕二〇伏見宮御記　利三十五所収　冷泉院　外記親王宣旨、　天暦四年七月十五日、庚辰、大納言顯忠卿參、著仗座、召權少外記春道有方、仰云、親王宣旨初下之日之內官符請印乎否、其由可勘申者、有方延長元年、朱雀院　上天皇、同四年今上、等日記長案、挾算奉覽上卿、件年日記、不見宣旨下日請印由、亥一點女御藤安子、去五月廿四日所產皇子、爲親王之宣旨下畢、御名憲平、

親王宣下

藤原在衡ヲシテ御名ヲ擇ハシム

重ネテ御命名ノ日時ヲ擇バシム

九條殿記　天暦四年七月十一日、召御前仰云、先下爲親王宣旨之後、可行此（立坊）事、召茂樹令擇申吉日者、又名字以參議維時朝臣令擇、而未勘申、加之延喜後皇太子名字、彼時維時朝臣、爲侍中勘申也云々、雖事非可然、非無所憚、仰中納言在衡卿、令擇申其字者、卽向陣頭傳仰件卿了、〇中略、東宮御所ヲ定ムルコトニカヽル、本月十一日ノ條ニ收ム、

十四日、依先日仰云、（旨カ）召茂樹宿禰、令擇申可奉授皇太子御名之日時、十五六日午剋是吉也、依有所勞、加封字、送藏人頭有相朝臣許、令奏聞云々、

御名ヲ憲平ト選定セラルル卿

藤氏公卿ヲ奏ス

官符ニ請印ス

省毎ニ親王宣下ノ官符ヲ給フ

十五日、辰剋按察（在衡）中納言來授勘文、依召參內、仰云、藤原朝臣所勘之慶業、憲平是宜、就中憲平有便稱謂、又云、欲引勘字書唐韻等、午剋已過歟、答云、重服之人不可承行件事、大納言藤原朝（顯忠）臣奉行宣歟、罷出之後、爲令引例、念佛事參內（向カ）法性寺、亥剋伊尹告送云、以憲平字撰定了、卽件剋大納言顯忠卿蒙宣旨、召仰所司、其後率氏大夫等、參進弓場殿、令左近中將良岑義方朝臣奏慶由、此大納言之外藤氏公卿不參、仍大納言一人、及殿上氏大夫、幷左少辨雅重等相從云々、

十六日、昨日親王官符、今日請印了、今日內可請印之由、所被仰也云々、〇柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、

〔類聚符宣抄〕四親王

太政官符中務、式部、民部、大藏、宮內省、外、每省給別符、

憲平（冷泉）親王、年一、

右今上親王所定如件、省宜承知、依例行之、符到奉行、

天暦四年七月十五日

〇大鏡裏書、皇年代略記等、異事ナキヲ以テ略ス、

十七日、壬午、官奏、

〔西宮記〕臨時六　天曆四年七月十七日、〇中略此日官奏云々、

〔北山抄〕官奏　〇前田家本　有薨奏日、被行官奏、（天曆四年七月十七日、〇條參看、）

十八日癸未、憲平親王ノ御爲メニ、阿闍梨喜蓮ヲシテ、息災法ヲ修セシム、

〔御産部類記〕二〇伏見宮御所收記　冷泉院　九條殿記　天曆四年七月十八日、始自今日奉爲今宮、五箇日間、令修息災法、阿闍梨喜蓮伴僧八口、是爲平安令遂來廿三日宣命事也、〇柳原家記錄所收御産記部類ヲ以テ校ス、

二十日乙酉、史生ヲシテ、作物所ニ候セシム、

〔類聚符宣抄〕十可賜上日人候作物所人々　權少外記春道有方奉

史生淺井清遠

右中納言藤原朝臣在衡宣、件人宜令蹔直作物所、其間准見仕、給上日者、實奉勅者、

天曆四年七月廿日

二十二日丁亥、立太子ノ由ヲ諸司ニ仰ス、

〔御産部類記〕二〇伏見宮御所收記　冷泉院　九條殿記　天曆四年七月廿二日、外記是連來云、藤大納言顯忠、參內、承殿上仰、明日可立皇太子之狀仰外記、之隨傳仰緣事諸司了者、天慶七年例、皇太子御飯、自中宮度料米於內膳司、（々々カ）

見仕ニ准ジテ上日ヲ給ス

五箇日ヲ限ル

令炊進、准彼例、主膳監未定之間、度本家米於彼司、可令炊進之由、仰史維宗典膳仲舒等了、件事先例、若依宣旨行歟、令彼司勘申、爲後可記、〇柳原家記錄所收御産記部類ヲ以テ校ス、

二十三日戊子、憲平親王ヲ立テ、皇太子ト爲ス、東宮傅、春宮坊官等ヲ任ズ、

〔日本紀略〕冷泉院　天曆四年七月廿三日、戊子、於外祖右大臣（師輔）第、立爲皇太子、

〔大鏡裏書〕中宮安子崩事　村上御記曰、〇中略以同年（天曆四年）七月、立爲皇太子、

〔扶桑略記〕二十五村上天皇　七月廿三日、憲平親王立皇太子、降誕以後歷三箇月、

〔御産部類記〕立太子事　三日戊子、天晴、今日有奉立皇太子宣命之事、仍無例政、此日奉立皇太子、仍於承明門前、行外辨事、諸司裝束如常、長樂門東掖壇上立兀子、木工寮渡假橋二所、但不開長樂、安福兩門、庭中又立床子四脚、西面北上、一脚少納言辨座、一脚史生二人座、一脚官掌召使座、但外記前立床子一脚、爲置日記筥也、承明門前立屏幔、此間少納言橘南金、左少辨藤雅量、少外記菅野正統、左少史淺井守行、率史生二人、官掌召使等、著床子行事、午一剋式部卿重明親王、中納言藤元方卿、源高明

二二伏見宮御所收記　冷泉院　外記立太子、　天曆四年七月廿三日、憲平親王立皇太子、降誕以後歷三箇月、

立太子宣命　外辨諸司裝束

重明親王等著座セラル

内辨大納言藤原顯忠

諸司裝束殿幷ニ庭中ヲ裝束ス

卿、藤在衡卿、參議源庶明卿、大江維時朝臣、源等朝臣著兀子座、次式部少輔丞錄相分東西、率侍從等、列立承明門前、次彈正大疏、次左右兵衛佐府尉志等東西列立、各居床子、于時左右近衛開承明門、次左右兵衛志一人、率兵衛各三人開建禮門、次大舍人四人、祇候承明門前屏幔外、于時內辨大納言藤原顯忠卿召舍人、二聲、大舍人四人進立門前壇下、同音稱唯、退出本所、次少納言南金朝臣入自承明門東扉、進立版位、在上宣、稱唯、出屏幔外、立內外壇下召之、其間親王公卿次第自同門東戶參入、次侍從等參入、六位承明門外候之、此日奉立皇太子、早旦諸司裝束南殿幷庭中、垂御簾、中務省入自同門、立親王以下標於左右庭中門、幷上卿兀子座立宜陽殿西廂第三間柱西側、去柱一許尺、但上卿不著此間、主殿寮立斑幔於軒廊北庭、又立弓場殿南庭、掃部寮敷鋪設於階下、如節會座、午二剋天皇出御南殿、卽左右近衛將曹各二人、率中少將已下、入自日花門、月花門兩門、陣於南階東西、不立胡床、于時內侍臨檻召人、內辨大納言藤顯忠卿、降左仗座著靴、昇自東階、著殿上兀子座、次左右近衛將曹各一人、率近衛各六人、趁進開承明門、將曹留壺下、北面立、近衛跪置弓壺下立、進開扉、左右兵衛開建禮門、但不開長樂、永安門、檢先例、或開或時不開、々々者是從省略也、次闈司二人降殿、經安福殿前、著承明門同(內カ)

內辨宣命使ニ宣命ヲ賜フ

宣命

親王以下退出ス

本殿還御

東西草墪座、卽內辨大納言喚舍人二聲、大舍人四人、列立承明門外屏幔內、同音稱唯、退出、少納言橘朝臣南金、參入自承明門東扉、進立尋常版位下、內辨上卿宣、召刀禰、少納言稱唯、退出召之、王卿自(入脫之)同門東扉、列立各標下、相次諸大夫入自東西扉、列立標下、立定之後、內辨大納言召宣命使、中納言藤在衡卿稱唯、經左仗南頭、昇東階進立內辨大納言後、賜宣命退降、暫軒廊西第二間砌上、南面、(立脫カ)是間內辨上卿降殿、進立庭中標下、立定之後、宣命使進立宣命版位下、宣制一段、親王以下再拜、又宣制一段、同又再拜、但宣命使不拜、

現神止大八州(洲)所知須倭根子天皇詔旨良麻止勅命於親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、頃年水旱失節天人民疲勞多留爾依天有費牟事波不行給之止所念行天隨法爾可有支政度爲天奈牟憲平親王於皇太子止定賜不、此位於波不得已天鎭置給止毛、諸事波從儉約天行賜布、故此乃狀於悟天、供奉禮止詔勅旨於衆聞食止宣、訖宣命使自親王公卿列西退、還加立本列、立定之後、親王以下一々退出、如初入儀、闈司又還、訖天皇御本殿、王卿還著左仗之座、厥後大納言參御所、令藏人頭右近中將源雅信朝臣、奏聞啓陣可差奉之由、雅信朝臣良久不歸、其間上卿

東宮啓陣

儲宮御所ハ東一條ニ
第ノ東ニ在リ次第相傳時人東宮ト稱ス
勅シテ實頼ヲ皇太子傳ト爲ス
先年ノ坊官召名及ビ歴名帳ヲ召ス

暫還本座、少時雅信朝臣奉仰、著膝突座、傳承勅語、爰上卿召大外記雀部是連、仰云、可召左右近衛中少將、左右兵衛佐等、而是連差使部召府官、仰事由、爰左近少將藤原伊尹、右近少將藤直忠朝臣、左兵衛佐同兼通朝臣、右兵衛佐同元輔朝臣等參來、上卿先召左近少將伊尹朝臣、即入自敷政門、就膝突座、上卿仰云、(可脱カ)率參東宮啓陣之由、次左近少將、左兵衛佐一々奉上宣、如初儀、爰四衛府官人以下、同以率參左右近衛府各少將、々監、將曹、府生、番長、物節各一人、近衛十人、左右兵衛府物節各一人、兵衛十人、左右近陣西廊、中門北左近、中門南右近、左兵衛府陣東門、右兵衛府陣西門、于時儲宮御右大臣東一條第、件第三(二)品式部卿(重)ノ保親宮也、相次(可脱カ)第、太政(忠平)大臣所領、太政大臣家在西、件宮在東、時人不棄本號曰東宮、大相府以件家給二男右大臣(実頼)、仍儲宮御此第、右大臣則皇太子之外祖父也、東宮之號也所有徴、是間左大臣依召參入、即入自和徳門、直以參上御前、良久之後、召先年坊官召名、少外記理綱持參去、天慶七年、延長三年等召名、次又召五位已上歴名帳、權少外記春道有方持參、竝付藏人奉之、左大臣獨候御前、書出坊官夾名、黄昏之間、左大臣就陣座、令參議左大辨源庶明朝臣清書坊官召名、此間大納言藤顯忠卿依召參上御前、以左大臣爲皇太子傳之由、奉仰還著、以同庶明朝臣令書黄紙、左大臣覆奏坊官召名、還著之後、大納言又覆奏傳召名、即又還著、訖後左大臣仰外記、令召

官召名ヲ覆奏スト皇太子ニ御劔ヲ賜フ
傳及ビ坊官等ノ夾名

式部省、大丞藤清雅參入、賜召名罷出、然後被物有差、但左大臣獨留陣座、(是依素服不被參入也、)頃之參上御前、被定東宮藏人殿上人等、亥二剋退出、今日早朝御帳一具、銀器一具、朱臺盤二脚、出自仁壽殿、府奉遣皇太子御在所之、宣命了後、御劔一柄令左近權中將良峯義方朝臣遣之、有纏頭、傳坊官幷藏人、殿上人夾名如左、

東宮傳從二位藤原實頼　兼
春宮大夫從三位藤原師尹　兼
亮從四位上源朝臣雅(信)經　兼
權亮從四位下藤朝臣有相　兼
大進從五位下藤原遠規
少進正六位上藤朝臣守忠
大属正六位上御立宿禰維家(宗カ)　兼
少属正六位上山前連興範(○下掲ノ九條殿記、豊範ニ作ル、)
藏人、少監物橘仲任、左兵衛尉源惟正、文章生橘爲政、蔭孫藤爲保、殿上人四位、
左近中將良峯義方朝臣、藤信恒、忠清朝臣、右近少將藤直忠朝臣、五位、左少辨

實頼御前ニテ坊官ヲ定ム
大夫以下ノ召名ヲ奏ス
仰ニ依リテ披門ヲ開カズ

藤朝臣雅量、左近少將藤朝臣伊尹、右兵衛權佐藤齊敏、散位藤朝臣親賢、六位、
蔭孫藤公雅、〇柳原家記錄所收御記部類ヲ以テ校ス、

〔西宮記〕〇臨時立皇后太子前田家大永鈔本

左大臣參御前、議坊官、持草就陣座、召折帋硯等、令左大辨庶明清書、大夫已下除草、此間大納言顯忠依召參御前、持除傅草還仗下、同付庶明令書之、先是左大臣經階下參御所、奏大夫已下召名、還大納言以傅除目示左大臣、々々返付、即奏如前、大臣令外記召式部丞清雅、入宣仁門立軒廊北、大臣召給召名如天慶例、天慶三(七)年、大納言師輔兼大夫、〇天慶七年四月二十二日條參看、猶不自名、惣而奉行、今左大臣不奉自除傅之詔、大納言別奉之、不似先年例云々、了王公參東宮云々、左中將義方作勅使、令賫御劔參來、即召寢殿南欄賜白大褂、而退出云々、了令亮雅信(朝臣下同ジ)ヲシテ啓王卿候由、了來中門、王卿入一列立西對南庭、雅信傳令々々候座云々、三獻後諸卿及帥(有明)親王勸盃、了給祿、有定無拜、各退出、天暦四年七月廿三日、立憲平親王爲皇太子云々、有仰不開披門、唯開承明、建禮等門、不拜舞、唯再拜之、

〔御産部類記〕二〇伏見宮御記錄利三十五所收

冷泉院　九條殿記立太子　天暦四年七

左右衛門府白砂ヲ撒ク
勅使ヲ遣シテ物ヲ賜フ
給物
御器
銀器及ビ御帳帷ヲ新調ス
藤原顯忠宣命ヲ奏ス

月廿三日、戊子、天霽、寅剋左右衛門府白砂(兩府督或因緣或近親也仍先日示送消息每府令曳五十兩)、卯剋修理職官人率雜工等、造作成功、(家爲職別當仍先日仰遣令修理所々)、辰剋藏人左近少將伊尹、依召參內、即爲勅使、令持色々給物到來、即令奏恐由、給祿(白張細長一具、袴一具)、即以本家侍人、令供設御帳等、所給之物、

御器

飯垸一口(有蓋)
羹垸四口
盞一具三物、
馬垸盤一枚
御匕二枚
御帳一具(有張臺加帷金物等)、
犀角二株(有緒等)

但銀器幷御帳帷料所被調也、自餘物者、大嘗會時之基(主カ)方所獻也、

水垸一口
四種坏四口
盤八枚
箸二雙
朱御臺盤二脚(各有臺)
御鏡二面(加繡緒幷宮臺等)
御疊二枚(大御帳御座料、張帷立御)

依重服忌、此日不可參入、而依伊尹傳仰參入、不更經陣座、著殿上侍、召御前被定仰坊官、此儀大略一昨日了、而今重有此仰、依時剋已來罷出、是大納言藤原

紫宸殿出御立太子儀

坊官除目

殿上人藏人等ヲ定ム

皇太后藏人ヲ推擧シ給フニ東宮ニ護剱ヲ賜フ

御劔裝束鉸尾

勅使ニ祿ヲ給フ

重明親王

顯忠卿奏宣命案、（件卿者、同忌月也、今月所謂服也、而爲行今日事、垂纓卽吉、）次奏清書、午三剋御南殿、儀式如例、具由在外記日記、宣命了、左右近衞、左右兵衞率啓陣參來、左右近陣（衞カ）少將、將監、將曹、府生、番長、府掌各一人、近衞各十人、左右兵衞尉、番長各一人、兵衞各十九人、卽設左少將以下府生以上座於西中門北廊、右近右兵衞官人座於同中門南廊、左兵衞官人座於東對東板屋南庇、（本家侍所、）番長以下者左右近在西中門西庭、右兵衞在西御門外、左兵衞在東御門外、須左右東西相分令候、而隨便宜令候之、（但今日以後十餘日間、物節以下候於幄下、其後者右近候南片庇、左近候北中門東掖片庇、）未剋左大臣參入、依今朝召也、候御前、有坊官除目、又被定殿上人、藏人等、大臣中問（間歟）還就陣座、入夜有召、又參上、如云々者、自中宮以藤原公雅、被擧藏人、而依無其聞、御使再三往反、被相定間、已及酉剋云々、戌剋坊官亮雅信朝臣、少進守忠等令啓慶、大進遠規付女房令傳啓、但傳大夫依重服不參入、此間勅使左近權中將良（峯歟）〻義方朝臣、令持護御劔參來、賜座於東渡殿令著之、（錦土敷一枚、圓座一枚、）義方朝臣揖劔著座、件劔元是納宜陽殿也、刃長二尺五寸五分、（鉸尾、）鞘長二尺七寸五分、柄長五寸八分、金銀蒔繪、海鳥文浮津波鼈頭、以青消（滑歟）革裝束三（之カ）、有唐錦袋、左近少將伊尹傳取奉之、卽令奏恐由、給祿白大褂二領、勅使拜舞退出、次式部卿重明親王、中務卿式明親王、太宰帥有明親王、大納言顯忠、中納言元方、高明、在衞卿、參議左大辨庶明、維時、右大辨等朝臣參、大納言令伊尹示云、拜舞之間、可立何處、答云、內裏奏慶之人、不必向御在所、只隨便宜、今日饗處在面對南面（西歟）、然則北面東上頗不穩便、東面北上有其便歟、抑件事、非可下官定申、左右宜被相定者、此間王卿議定縱橫云々、王卿令亮雅信朝臣、啓慶於西對南西廊東三庭（面カ）、而北上東面、拜舞了著饗座、本家諸大夫等役於垣下、六七巡後給祿、納言以上白大褂二領、參議紅染二領給云、各散、但無拜舞、王卿饗女一宮（承子內親王）政所設之、男女及女房料（女御宅政所儲）之、右近衞府、右馬寮、修理職等各儲屯食二具、（家爲府大將、寮御監、職別當、仍先日仰事所令調備也、）四具給四陣、一具給女官、一具納政所、宛雜用、（須午二具給女官、而失錯所行之、）本家設基手廿貫、十貫殿上侍、十貫給四陣、（近衞各三貫、兵衞各二貫、）戌剋初啓時、以女一宮喚繼令啓之、件簡今朝仰修理職、令作進之、以內裏藏所紀時文令書之、但至于杭者、本家在前以黃楊木、作設之也、又殿上內（日歟）給簡、召內裏御書所書手一人、令書之、但女房簡、廿四日令書之、件簡等、同大進遠規仰修理職所令作進也、此夜女官數十人參來、不進夾名、狼藉尤甚、以自西對東庇第三間以北四間、爲御物宿、采女卽可候件所、兼賜其座、（兩面端二枚、綠端三枚、）以北對馬道間、爲女史以下候所、同對馬道西、母屋庇各

等拜舞セラル

承子內親王王卿ノ饗ヲ設ケラル

修理職等屯食ヲ設ク

菜手錢

殿上ノ日給簡ヲ書カシムカ女夾名ヲ上ラズ

御膳ヲ供ズ　阿末可都料在所御寛忠夜居ニ候ス　朱雀院御使　本家調食ス　酒直ト號シ錢ヲ賜フ　中宮御使

一間、爲彼女御厠人候所、依人數甚多、不入別給鋪設、亥剋初供御膳、以藤原元姫爲陪膳、故參議菅根卿女、中納言平時望卿室、須著晝裝束、而依事倉卒、上一本髮也、女藏人四人、傳供御膳、件藏人先日試仰令設雜具、依式申不堪之由、給裝束料、御臺盤不可加臺、而今夜加臺供之、失也、但御飯者、依昨付料米、內膳炊貢之、御菜本家設其所、而令調供之御器、用今朝自內所被奉之器供御膳、了女藏人捧盤、居土器二口、就陪膳之後、陪膳盛御飯於一盃、盛御菜等於一坏、授女藏人、々々々受之、參入御帳中、是阿末可都料、其後撤及下物、如內裏例、今日以前御在所寢殿西方、始自今夜、御於東放出新御帳、仁和寺僧寬忠降誕之後候於夜居、今夜同令召候云、其座御帳東方立禮盤、其上敷疊、廿四日以後、件禮盤立於御帳南方、又畫御座鋪於南庇東第三間、繧繝端疊二枚於筵一枚、是御脇息於其上、又改王卿饗所敷殿上侍座、件座西對以南妻爲侍、以西庇爲宿所、入夜朱雀院御使別當兼忠朝臣參來、付亮雅信朝臣、中宮（穆子）御使亮常行參來、付左近少將伊尹、傳御消息云、今日宣命平安被遂行之由、聞食悅不少者、卽報答恐由、

廿四日、己丑、午上晴後雨、今日本家調食、給女官及采女等、又號酒直給小錢、女史以下六貫、采女等四貫、須賜饗於四陣、而依去月十八日、不設仰饗、依聞寂然之由、給酒直、其數如昨、奉手偏依內仰不儲、三个日饗膳事見之、頗似閑寂、後人猶可儲備歟、朝夕供御膳、其次第幷下物等如昨、但采女候所、須立御膳宿御厨子、而依無新厨子、觸事由於權亮有相朝臣、卽奏事由、被給棚厨子一基、權亮消息云、天慶七年者、一物以上、自中宮被給、如此之雜具也、至于此殿、本家不必有新作之雜具歟、屢尋問不具之雜具、可催奏者云々、本家設四尺臺盤三脚、八尺一脚、給四尺二脚於臺盤所、給四尺一脚、八尺一脚於殿上侍、又給朱漆器於兩所、坏廿口、大盤卅枚、小盤十枚給男方、坏廿口、大盤廿枚、小盤十枚給女房、知家事、美作目秦茂本著絹當色、昇御湯、二中取而供奉、皇子降誕之後、其儀式如此、當色、同宅案主多治常松、本家雜色長同秋守著布司進女官差文、掌侍橘鮮季女子、紀安良子等加著、女史二人　官人代一人

殿部女孺二人　厨女孺一人　御髮上一人　番所二人　水取二人　硯一人

人　油守二人　掃部女孺一人　洗人二人　藏人收女二人　御厠人二

采女司、天慶七年例、進本司差文、而此度不進男官差文、進女官差文、其數過先例也、天慶七年進四人、此度進六人、

内侍司女官ノ差文ヲ進ム

朝夕食ヲ諸陣ニ給フ　坊官除目ノ日時定　皇太子御衰日　坊官除目　召名ヲ奏ス　兼宇ヲ賜フ　本家ノ男等御湯殿ニ奉仕ス

廿五日、庚寅、雨、女官朝夕食仰兩處、令調給諸陣、又給酒直、其數如昨日、權亮有相朝臣來、傳仰云、廿七、八日可有相撲召合、廿九、卅日當御物忌、來月左右大臣及大夫等忌月、然則監署除目、今朝(明カ)間可定歟、無殊難者、今日可參入者、答云、今日儲君御衰日、明日內裏御衰日、但廿三日、坊官除目已始也、至于以後、不可必有其忌歟、抑只今參入、可承仰事、申剋參入、依御覽左右相撲內取、已及戌剋有相朝臣仰左大臣云、今夜已闌、明日可行監署除目事者、

廿六日、辛卯、〇中略予及大夫參內、申剋傅左大臣及予候御前、有除目事、々畢左大臣取副除目於笏、著陣座、令右中辨有相朝臣清書、依參議不候也、卽令持外記有方、參上御在所奏聞、其次仰云、少屬山前豐範可給兼宇者、大臣還座、召廿三日召名、付兼宇、又參上奏聞如前、還座、召式部丞清雅、給召名、

主膳正平利建、元內舍人、息所宅人、佑淺井宗行、本申、宮令史額田利實、息所宅人、主殿首源劇、元河內權少掾、仁和寺親王申、令史大原久安、息所宅人、主馬首坂上方忠、西四條內親王等申、

御湯殿事、須付主殿署、而雖任官人、未有雜人及其所等、仍如例、以本家男等、令供奉之、昨日以前啓陣官人等、帶兵仗、今日以後不帶之、御對幷仕丁御頓料等、今日被下宣旨、

東宮宮主御巫ヲ補ス　御乳母御巫ヲ推擧ス　天曆四年立太子記

廿七日、壬辰、〇中略今日以神祇權少史直氏茂兼任宮主、以安倍高子爲御巫之由、被下宣旨、件兩人宣旨、可申下之由、先日示權亮有相朝臣也、御巫是乳母左近之擧也、先日神祇伯忠望王來、令申云、東宮御巫、是先例官可(所カ)申補也、而自本家可被補云々、是尤不安、答云、檢符案、依令旨補任之例、其數已多、今伯所稱之例似不慥、抑言上解文、於官自有裁定歟、〇柳原家記錄所收御記部類ヲ以テ校ス、

〔榮華物語〕一月宴(天曆四年)　はかなう御いかなとも過もていきて、むまれ給て三月といふに、七月廿三日に東宮にたゝせ給ぬ、九條殿はおほきおとゝ(忠平)のうせ給ひにしを、返々くちおしくおほされて、えいみあへすゑほたれ給ぬ、一の御子(繪詞)のはゝ女御のゆみつをたにもまいらて、ゑつみてそふし給へる、いみしくゆゝしきまてにそきこゆる、

〔江次第〕十七立太子事　上卿座前立白木床子一脚、置式(筥カ)、今日不立宜陽殿西廂內辨兀子、但九條殿天曆四年立太子記立之、

〔大鏡〕一冷泉院　同年(天曆四年)七月廿三日、東宮にたゝせ給ふ、

〔爲房卿記〕康和五年八月十七日、甲子、陰晴不定、今日有策命立太子事、〇中略雅樂頭泰長參入、奉仕御反閇、〇中略天曆四年、渡御之日、有御反閇、今度有議行之、〇中略兼日神祇官進請

奏五色絹、任天暦記文、自本宮給之、各疋、三自餘料物自官催渡、○略中今夜僧正增譽參仕夜居、二間敷半帖爲其座、依暦四年例、今夜召夜居、天

【玉葉】治承二年十二月十五日、甲辰、○中略此日有冊命立太子事、○中略

一歳立太子例○略中

冷泉院天暦四年七月廿三日、

【立坊次第】七月　村上第三子天暦四年庚戌七月二十三日立太子、春秋一、降誕以後八十八箇日、在坊十八年、冷泉院

【公卿補任】五

左大臣從二位藤實賴、五十一、十左大將、七月廿三日兼皇太子傳、

權中納言從三位藤師尹、三十一、十左兵衛督、七月廿三日兼春宮大夫、

【公卿補任】丘天暦五年　參議從四位上源雅信、三十二、十同四七廿三兼春宮亮、

【公卿補任】天暦九年　參議從四位上藤有相、四十八、十同四七廿三兼春宮權亮、

【公卿補任】康保四年　參議從四位上藤文範、五十九、十廿二日（天暦四年七月）使宣旨、

【公卿補任】天延二年　參議從四位上源惟正、四十六、十同四七ー補東宮藏人、

【西宮記】二除目　年中行事　○前田家本正月下　天暦四年七月廿六日、今日任東宮監署官、左右大臣候御前、兩相降殿、召左中辨有相朝臣、於參議座令書除目、依參議

不參也、

【北山抄】四立后事　拾遺雜抄下　天暦四年、大臣不參、依重服也、宣命後、左大臣依召參入、行坊官除目、卽被仰以大臣可任傅之由、依延長三年例、可仰他上卿者、大臣就陣令書召名之間、大納言顯忠卿有召參上、奉傳事、大臣奏淸書後、大納言又令書傳召名奏之、大臣惣取下式部、大臣又參上、被定補藏人、殿上人等、書出（カ）奏覽、給權亮有相朝臣云々、

【小右記】寬仁元年八月九日、甲戌、今日皇太（後朱雀）弟立給日、○略中余（藤原實資）出外辨、○略中兵衛、彈正參列、召國儀、問兵部、彈正參入之例、申云、天暦四年、式部、兵部、彈正參列者、後日、見彼年外記日記、有式部、彈正、○中略抑見天暦四年故殿御記、坊官監署除目、所被承行也、而依傳給除目後召大納言顯忠、被仰傳事、

○立太子ノ日ヲ定ムルコト、六月二十六日ノ條ニ、立太子後ノ御所ヲ定ムルコト、七月十一日ノ條ニ、興福寺別當空晴等、立太子ヲ賀スルコト、本月二十八日ノ條ニ、天台座主延昌等、立太子ヲ賀スルコト、八月五日ノ條ニ見ユ、

二十五日、庚寅、山陵使宣命草ヲ奏ス、

〔西宮記〕十二月　班幣　荷前　御記云、天曆四年七月廿五日、民部卿藤原朝臣(元方)令奏明日山陵宣命草、申云、山階(藤原鎌足)、後山階(藤原冬嗣)等使申障、須差中納言源朝臣(高明)、而申穢由、至于山陵不可忌歟、令仰云、山陵不忌穢、又內裏有觸穢事、宜差充源朝臣、

勸學院學生、立太子ヲ賀シ奉ル、

〔日本紀略〕冷泉院　天曆四年七月廿五日、庚寅、勸學院學生參賀、

〔御産部類記〕二條殿記錄利三〇伏見宮御所收　天曆四年七月廿五日、庚寅、〇中略此日勸學院六位別當以下參賀、令取見參、六位別當一人、學頭以下學生十九人、院事三人、六位別當式部丞清雅令申云、須別當有相朝臣相共參入、而依申忩劇之由、不能率參者、惣此度啓慶寺々、

綱所　東寺　西寺　天台前唐院　極樂寺　法性寺　興福寺〇柳原家記錄所收　東寺、西寺、天台前唐院、極樂寺、法性寺、興福寺、御産記部類ヲ以テ校ス、

二十六日、辛卯、勅シテ、諸國受領ノ吏、限ヲ過ギテ赴任セザル者ヲ罪科ニ處セシム、

〔符宣抄〕別本　右中辨藤原朝臣有相傳宣、(師輔)右大臣宣、奉勅、諸國受領之吏、過限不赴任國之徒、新立可科罪之制、載在去延喜廿二年二月、同年八月廿五日兩度宣旨、雖陸奥出羽遠國官長、而懲肅之法、無有分別、而出羽守藤原朝臣令問寄事、有所申請、過限不向任所、須依彼兩度宣旨科責之、然而依有所申、此度殊免、但自今以後、諸國長吏、若過其限、不早赴向、依先宣旨、必處科罪、不曾寬宥者、

天曆四年七月廿六日　　左大史海宿禰業恒奉

二十七日、壬辰、相撲召合、尋デ、追相撲アリ、

〔西宮記〕七月　童相撲　天曆四年七月廿五日九記云、覽內取、左自下覽之、右自上覽之、廿六日、覽昨日取還、先覽右、次覽左云々、廿七日、召合、左右大將依重服不參、左衞門督高明進左右奏云々、大納言顯忠卿候簾前、有樂云々、前日將監公幹申云、次菜料物、若可給歟、仍案內左大臣殿、不給其料者、家同不給、依重服也、

〔西宮記〕七月　召合　天皇御南殿、(太子參上)、內侍出、王卿參上、〇略ス、(註位)、〇略ス、內侍倚簾下、上卿候簀子敷、出居著、〇略ス、次出居昇、〇略ス、中取版位、

〔西宮記〕七月　十六日　相撲式　同四年、(天曆)馬助出居、

將藤原朝成出居云々、

同四年七月廿八日、追相撲云々、右貴德王一人、山城介仲野宿禰貞行云々、

天曆四年七月廿八日、中納言左衞門督奏左(右脫カ)奏、左少將伊尹、右中將雅俊、取傳各奏文云々、

別當一人、學頭以下學生十九人、院事三人

延喜二十二年二月及ビ同年

八月ノ宣旨　此度ニ限リ宥免ス

內取

音樂アリ

出居

左右奏ヲ奏ス

〔御産部類記〕（二錄利三〇伏見宮御記所收）冷泉院　九條殿記　天暦四年七月廿七日、壬辰、〇略中此日相撲召合、有樂云々、〇（柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、）

〔北山抄〕（二年中要抄下相撲召合事）七月　同四年、（六脫）左兵衛佐不參、以左馬助有時、爲代官、

興福寺別當空晴等、立太子ヲ賀シ奉ル、

〔日本紀略〕（冷泉院）七月廿七日、壬辰、興福寺僧參賀、

〔御産部類記〕（二錄利三〇伏見宮御記所收）冷泉院　九條殿記　天暦四年七月廿七日、壬辰、霽、興福寺僧綱以下合廿六人參來、進見參、少進守忠傳取啓之、令少屬豐範仰云、天慶七年四月廿八日、見參所載廿一人也、而此度已過彼數、其由如何、爰無可陳申、而改見參、載廿一人進之也、卽可參入僧等之令旨、仰右近右兵衛陣、召著右近陣、給布施、僧都二人、（白大褂各一領）律師一人、（衫一領）威儀師二人、從儀師二人、各衾一條、（白絹各一疋、）已講二人、（一疋、）凡僧十二人、（赤絹各一疋、以上皆以紙裹之、）此次令大進遠規仰云、代々儲宮、定當時之名僧、令奉仕御祈願、其例具可勘申者、別當僧都空晴、承仰罷出、〇（柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、）

二十八日、癸巳、東宮御殿祭、

〔御産部類記〕（二錄利三〇伏見宮御記所收）冷泉院　九條殿記　天暦四年七月廿六日、辛卯、雨、大夫初參入、就殿上侍座、召陰陽寮、令勘申可奉仕御殿祭、御井祭幷鎭祭、御膳所神、及可始政日時、須一官共進勘文、而依他官人各申障、助茂樹宿禰一人勘申、（此間寮頭闕也、）

廿八日、癸巳、〇略中傳左大臣始參候殿上侍、下官及大夫幷殿上人等、同在座、廳官聊儲酒食、神祇少副春行率宮主、御巫等、祭御殿御膳宿、上下御厨子、御井等、其料神祇官自諸司爰（受カ）之奉祭之、但比々奈料幷五色絹等本家給之、事了給祿、中臣權少副可節、忌部少副齊行、各紅染衾一條、宮主、御巫、各赤絹一疋、舁御机神部四人、各絹三屯、但天慶七年、饗後給祿、是依當日不給祿、而後日更召也、今日當日給祿、仍無饗、依夜闌也、

今日男方始供御膳、女藏人爰（受カ）阿末加都御料如例、〇（柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、）

山城、河內、攝津ノ三國ヲシテ、春宮坊御料ノ稻粟ヲ進ゼシム、

〔類聚符宣抄〕（四御膳帝皇）

太政官符民部省　外、

竈杵稻佰參拾壹束壹把漆分壹毫

糯稻漆束貳把

山城

粟捌拾肆束貳把肆分
　已上山城國
竈杵稻佰參拾壹束
糯杵稻漆束貳把
　已上河内國
竈杵稻佰參拾壹束
糯稻漆束貳把
　已上攝津國
右從今年七月廿三日、至于十二月、春宮坊御粥、依例所定如件者、省宜承知、符到奉行、
右中辨（藤原有相）　　左少史

天暦四年七月廿八日

三十日乙未、御物忌、山陵使ヲ定メ、桂芳坊修理ノコトヲ定ム、

〔御産部類記〕二（伏見宮御記錄所收）　〇（柳原家記錄所收御産記部類ヲ以テ校ス、）

日、御物忌、左（實頼）大臣參內、承仰差定諸陵使、爲告立儲貳之由也、陰陽寮勘申其日

也、來月九日云々、大夫權亮有相朝臣率修理職官人等、定桂芳房修理事云々、

件房修理事、去廿三日頗始行也、〇東宮、桂芳坊ニ入リ給フコト、十月二十二日ノ條ニ見ニ、

是月、兵部丞從五位上大江澄明卒ス、

〔本朝文粹〕十四　逍善　願文下　爲亡息澄明四十九日願文　後（朝綱）江相公

弟子朝綱敬白、悲之又悲、莫悲於老後子、恨而更恨、莫恨於少先親、雖知老少之不定、猶迷先後之相違、伏惟、亡息兵部郎中澄明、夏季受病、秋初背世、今當七七忌、令修此惠業、常念西日影斜、付後事於吾子、豈圖北芒駕促、營終制於老翁、泗水遺風、待七年而餘慶、九泉別淚、送千秋而無窮、方今芸閣塵深、竹簡幾千卷、苦壠雲靜、松風只一聲、一蘭中之花月、相傳失主、七月半之盂蘭、所望在誰、抑亡者早在未病之前、深談出家之趣、爲思門業、泣而不許、湯藥之中、此志彌切、登覺之路欲趁、脫去春官及第之袍、遊岱之魂更還、乞求夏臘高僧之戒、入道之後、遂以掩眼、爲禦秋山之寒嵐、追贈福田之法衣、又臥病之間、爲蒙冥助、有奉圖藥師如來之願、筆墨初點、丹青未畢、今加繪畫、聊以供養、除病延命之願、已以不諧、滅罪

父朝綱登明ノ七日忌ヲ修ス　願文作者朝綱
夏季病ヲ受ク
夙ニ出家ヲ望ム　朝綱門業ヲ思ヒテ許サズ
澄明病中藥師佛ヲ畫キテ果サズ　朝綱丹青

ヲ加ヘテ供養ス

登覺之謀、豈其不熟、無一於此、誰仰如來、仍奉圖某佛、奉寫某經、便於仙遊道場、敬展講筵、功德多少、摠導幽靈、光陰隔歲、憂喜同門、去冬之歡情、幾誇家風於一枝之桂、今秋之悲淚、欲開覺藥於千葉之蓮、嗟吁幽靈、知我此志、稽首和南、敬白、

天暦四年月日　　左中辨大江朝綱

〔十訓抄〕下可停懇望事　後江(朝綱)相公の隆(澄)明におくれて、後世を訪れける願文に、

悲之亦悲、莫悲於老後子、恨之更恨、莫恨於少先親、

とかける、前後相違の恨、けにさこそはと、さりかたく哀に覺ゆれ、

〔日本紀略〕村上天皇　天暦三年十一月廿日、巳未、文章得業生大江澄明奉方略試、

〔本朝文粹〕三對册　辨山水○略ス、中　文章得業生正六位上大江朝臣澄明對

對○文略ス、

〔大江氏系圖〕

朝綱

澄明兵部、民部、早世、

官歷　文章得業生

正六位上

世系

清通從四上、周防守、

〔大江氏系圖〕○續群書類從本

朝綱

澄明從五位下、兵部丞、

清通美濃守、讃岐守、正四位下、周防守、

定經美濃守、從五位下、正四位下、三河守、母從三位豐子、右大將藤道綱女、

女子橘爲義妻、正四位下、筑前守義通朝臣母、

女子宮內卿中母、

〔二中歷〕十三名人歷　學生字　江澄明一太

〔二中歷〕十二詩人歷　詩作者　扶桑集七十六人　江澄明

〔扶桑集〕九及第　澄明、重光一度及第、不勝欣喜、書詩相賀、

江(朝綱)相公

幸遇明時恩不訾、併名拔萃兩家兒、人言窓雪將三葉、桂許門風各一枝、忽見撫駒嘶破櫪、更憐養筍透疎籬、老牛蹄□漏無用、舐犢歡餘涕似縻、

仲春釋奠聽講古文孝經、同賦夙夜匪懈

〔本朝文粹〕九人事　詩序二

天暦四年七月是月

字　江澄明

詩人　大江朝綱、澄明重光等ノ及第ヲ賀ス

釋奠ノ講筵ニ列シ詩及ビ序

ヲ作ル

夫臣之奉君也、進思盡忠、退思補過、詩云、夙夜匪懈、以事一人、故文宣王閑居、曾子輿之避席、垂於竹帛、還之將來、爾來出白鷺之水邊、向丹鳳之闕下者、服膺不忘、言爲口實、何唯鄭尚書伏闕之夜、遙知履聲、徐侍中還家之朝、自歎犬吠而已哉、於是舍菜禮成、尊師儀畢、杏壇槐市之前、圓冠鼓篋、雲幕霞軒之下、大帶摳衣、闇々如、侃々如、濟々焉、穆々焉、傳聞、魯人浮東海、見仲尼及七十子遊海中、昔疑其言之如妄、今感其禮之長存、乃知夫子之道、留在我朝、于時貂蟬交領、鵷鷺成行、酒後耳温、各以賦詩云爾、謹序、

〔扶桑集〕七山居　北堂文選竟宴、各詠句探得披雲臥石門、

江澄明

傍山披得暮雲屯、好是貧幽臥石門、龍夢松聲當枕散、洗心泉響繞床喧、柴扃日落歸溪鳥、澗戸煙消□□猿、勝地古時擒麗藻、染毫還媿謝家魂、

〔本朝文集目錄〕上卷第三十五　大江澄明

辯山水對策、

○澄明方略試ノコト、三年十一月二十日ノ條ニ見ユ、

北堂文選ノ竟宴ニ列ス

文

八月　小盡　丙申　朔

三日戊戌　春宮坊廳事始、

〔御産部類記〕二　○伏見宮御記錄利三十五所收

八日、癸巳、霽、巳刻大夫、兩亮、大少進等、於殿上侍、○中略又且定廳案主三人、石城保兼、備前乳母申、江沼實盛民部乳母申、秦保間、左近乳母申、藏人二人、小槻有堪、大夫申、早部是爲來月三日始廳事也、依天慶七年例、○天慶七年四月二日ノ條參看、二大夫奉件令旨、○中略

八月三日、戊戌、秋分中、此日始廳事、以本家政所爲其處、辰剋以前、廳官作印請文、大夫以下皆書其署所、大進遠規、少屬豐範加署、大屬維宗率案主一人、藏人一人、辰剋就外記受之、令持鎰取、卽來於廳、件印可請取之由、外記豫問其旨、巳剋坊官亮以下藏人以上、始著廳事、其座亮以下少進以上、北面東上、長疊之上各鋪半疊一枚、亮半疊、紫縁、進縁、但屬座疊之上敷黄端半疊、依非先例、令取棄其半疊云々、史生座可在西小板敷、而今日依史生未任之上、無案主藏人之座處、假召著於件座、初行之事者、自諸司所請御頓料絹布等、仰帳亮以下加署請印、但錢油在件內、而世俗云々事始可忌者、仍不載件帳、先例亮在座之時史生請印、而今日史生未補、仍以案主秦保間、爲史生代令請印、件男兼大炊史生、頗知事儀云々、納印之後、聊儲饗

天慶七年ノ例本家ノ政所ヲ坊廳ト爲ス春宮坊印ヲ造ル

案主藏人等ヲ定ム

廳座鋪設

未ダ史生ヲ任ゼズ

史生代請印ス饗饌ヲ設

ク

四陣御火料ノ薪

饌、廳以本家案主矢田部實連令設、件實連可任史生之由議定了、仍内定所令設云々、件屋七間也、中三間爲倉、北二間敷板敷、以其所爲廳座也、本家政所移於南妻二間、今日以前、四陣御火料薪、本家給之、一把、杉一把、又本家聊調酒肴、日々送於殿上侍、〇下略、東宮擬帶刀ノコトニカ、ル、本月四日ノ條ニ收ム、柳原家記錄所收御産記部類ヲ以テ校ス、

水旱ヲ祈ルニ宣命ニ寶位無ハ勤ノ句ヲ書セズ

伊勢賀茂ヲ皇大神宮ト稱ス

勅ニ依リテ天慶七年ノ例ヲ奏ス

四日己亥、臨時奉幣ノ宣命ヲ奏ス、

〔北山抄〕六備忘略記 奉幣諸社事

天暦四年八月四日、奉幣叵、作進宣命、參上奏聞、蒙仰云、祈水旱之宣命、不可造進寶位无動之句、古宣命必不措此詞者、還陣座之後、引見古宣命、延長之比、多无此詞、仍止、伊勢、賀茂稱皇太神宮云々、

東宮擬帶刀ヲ貢スベキ所々ヲ定ム、

〔御産部類記〕二錄利三〇伏見宮御記 十五所收 冷泉院 九條殿記 天暦四年八月三日、戊戌、〇中略、春宮坊廳事始ノコトニ收ム、カ、ル、本月三日ノ條ニ收ム、權亮有相朝臣來云、依先日令申、而可奉帶刀試之人々事奏聞、仰云、天慶七年〇五月二十三日ノ條參看之例、可注進者云々、卽書寫彼年勅使幷宮司加署之奏案、令奏之、四日、〇中略、延昌等、立太子ヲ賀シ奉ルコトニカ、ル、後條ニ收ム、權亮有相朝臣依内仰、持來可奉帶刀試之人可貢所々書出文也、是依先日催奏也、

朱雀院

中宮（尊子）

内裏藏人所

式部卿重明（明）親王

左大臣（實頼）

右大臣（師輔）

大納言藤原朝臣顯忠

左衞門督源朝臣高明

大夫藤原朝臣師尹

治部卿源朝臣兼清

亮源朝臣雅信

權亮藤原朝臣有相

一品康子内親王

女御（安子）

令奏云、見度々之例、尚侍同貢也、又女一親王（承子）雖幼少、奉仕之男等有其數、又延喜例、儲君之舅故太政（忠平）大臣、左大臣、彼間非參議而貢之、是等之例、若可被因准歟、息所令伊尹傳同亮云、前齋宮（雅子）内親王已爲儲宮（冷泉）御姑也、又身已候同所、不被入件定内者、頗淡薄歟云々、〇柳原家記錄所收御産記部類ヲ以テ校ス、

〇東宮帶刀試ノコト、十月二十五日ノ條ニ見ユ、

天台座主延昌等、立太子ヲ賀シ奉ル、

〔日本紀略〕冷泉院 天暦四年八月五日、延暦寺僧上啓奉賀、

〔御産部類記〕二錄利三〇伏見宮御記 十五所收 冷泉院 九條殿記 天暦四年八月四

三綱賀表ヲ作ル
賀表ノ用紙ト表裝
布施ヲ給セズ賀表失錯アリ三綱加署
賀表

日、延暦寺三綱作賀表、令持良藝等獻之、大進遠規傳啓之、件文書於美濃白色紙、以朽葉色縑端一重裹之、以紫色叢濃糸結之、付於五粒松、但引勘天慶七年〇五月二十三日ノ條參看、四月日記、不見給祿之由、不載給布施之文云々、仍不給施物、但件表注八月五日、而今日進之、頗似失錯、又天慶七年例、阿闍梨以上加署、而此度只三綱加署、〇下略、東宮擬帶刀ノコトニカ、

〔朝野群載〕

一啓　文筆上　延暦寺奉賀儲君始立啓

延暦寺沙門延昌等謹啓、伏聞、儲君殿下、去月廿三日、正太子之尊、就少陽之位、椹袍藍袖、懽々于市朝、蕙帳蓬扉、欣々于巖谷、殿下感瑤光而託孕、應瑞氣而誕姿、生而神聰、已掩軒轅於五帝之德、立是天授、豈假羽翼於四皓之賢、既賀寢膳之有問、盍悦監撫之有歸、鴻景之基、固於磐石、鸞殿之志、安於泰山、昔在周武之育成王、全繼聖哲之體、漢文之生景帝、定齊恭儉之名、周漢之風、于茲可觀而已、嗟哉出轂之鳳雛、想煙霄於咫尺、離胎之龍子、致雲雨於須臾、斯則曩因高殖、宿分不定、猶如日之不可踰、天之不可階者也、延昌等棲深山之古洞、纔驚喜鵲之聲、樂大厦之新成、欲表賀蘧之志、不勝欣躍抃舞之至、謹遣寺主僧傳燈大法師良藝等、奉賀以聞、謹啓、

天暦四年八月一日（五カ）

百日餅ヲ供進ス
女房女官四衛陣等ニ饗ヲ給フ
雜事定
餅御膳ヲ供ズ
東宮ノ御座
陪膳

五日庚子、東宮御百日ノ儀ヲ行ハセラル、

〔西宮記〕

臨時　親王對面　東部記、天暦四年八月五日、東（春カ）宮供進百日餅
〇前田家大永鈔本　更
以尋常供膳、大盤供、唐菓子、木菓子、餅、干物各八種、盛樣器花盤、女房、女官、四衛陣給饗、各有碁手錢、殿上女房、女官各十千、近衛各四千、

〔御産部類記〕

二條　〇伏見宮御記　冷泉院　九條殿記　天暦四年七月廿八日、癸巳、霽、巳剋大夫、兩亮、大少進等、於殿上侍、定來月五日饗雜事、彼日當降誕後百日、仍可（所カ）定也、

御膳、付御厨子所、男方殿上饗、大進遠規、女房四陣官人饗、大屬維宗、女官饗、少屬豐範、飩食十具、盛三具、盥（行カ）具、主膳佑宗行、荒四具、兩屬各二具、〇中略

八月五日庚子、晴、此日儲宮（皇太子）降誕之後當百日、依世俗例、供餅御膳、朱小臺六基、一基御七筋餅八種、一基水菓子四種、以上銀器、二基唐菓子八種、二基盤、以上盛銀平盤、此間御座設於御帳東面、御疊一枚、端繧繝、其上敷簟一枚、唐東京錦端、以乳母橘等子民部、爲陪膳、女藏人傳供之、陪膳及藏

切餅百枚　柳匕ヲ以テ御餅ヲ供ズ　碁手銭アリ　夢想物怪ヲ消除ス　仁壽殿ノ鋪設　仰ニ依リ五番ヲ召ス

人皆理髪、西二剋初供之、於御臺之外、切餅百枚之端、而盛於銀御器、以摩粉木摩之、加漿、以柳匕供之、件御膳等、御厨子所調供之、殿上幷女房四陣女官等饗如先定、但飩食十具之中盛三具、本家女房、同侍所、各一具、荒七具、四陣各一具、女官一具、女房、同侍所、各一具、本家隨身所一具、又女御々膳折敷九枚、少進守忠奉仕、碁手五十貫、十貫殿上、十貫息所、五貫女官、十貫四陣、兵近衛各二貫、十貫本家女房、〇柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、

〇東宮御誕生アラセラルヽコト、五月二十四日ノ條ニ見ユ、

八日、癸卯、右大臣師輔、東宮ノ御爲メニ、律師明達ヲシテ、延命法ヲ修セシム〔御産部類記〕二〇伏見宮御記錄利三十五所收

日、癸卯、召天台律師明達、奉爲東宮、令修延命法、伴僧十口、爲消除夢相物恠也、〇柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校ス、

十日、乙巳、綾綺殿ニ於テ、臨時相撲アリ、

〔西宮記〕七月童相撲　天暦四年八月十日、於綾綺殿有相撲事、延喜七年例、〇延喜七年八月九日條參看、仁壽殿東廂壇間、立大床子、其後立屏風一帖、當御座巽角檻下、設上卿座、御前幷邊曳斑幕、左右幕前敷出居座、次將向陣召公卿、〔藤原師尹〕左衞門督參上、左右中將候出居座、依仰召五番、取了給座、內藏官布、給飯饌、召預相撲人、左十人、右七人、所雜色相分獻

盃、了布曳七番、机盛布、次給祿、各疋絹、最手加布二端、相撲於庭中再拜

〔西宮記〕七月十六日相撲式　一本、天暦四年八月十日記下云、前例公卿不參上（頭書）前上卿以藏人被申可敷侍從座由、

〔權記〕長保二年八月十二日、丙辰、〇略　十三日、丁巳、〇中略　右金吾送書狀云、昨日之儀、有違例之事等、其一、內府先參入（藤原公季）事也、仁壽殿召合時、次第參上、況於臨時事哉、又內藏允以上給食事如何、〇中略　報云、內大臣被參上事、別被定仰也、此事依天暦四年例所被行也、彼年依延喜七年例、〇延喜七年八月九日ノ條參看、被行、件四年內藏寮給饌、雜色爲勸盃云々、仍被准行也、

主殿署、始メテ、東宮ニ御湯殿ヲ供ズ、

〔御産部類記〕二〇伏見宮御記錄利三十五所收　冷泉院　九條殿記　天暦四年八月十日、主殿署始供御湯殿、依未任彼署下部等、以廳案主藏人各二人、令昇中取、事了奉仕、名對面如內裏儀、是先例也云々、〇柳原家記錄所收御產記部類ヲ以テ校入、

上皇皇女昌子ヲ內親王ト爲ス、

〔類聚符宣抄〕四親王

太政官符中務、式部、民部、大藏、宮内等省

昌子内親王、歳壹、

右太(朱雀)上天皇親王所定如件、省宜承知、依例行之、符到奉行、

右中(藤原有相)辨　　左大史

天暦四年八月十日

〔本朝皇胤紹運錄〕

朱雀天皇

昌子内親王(冷泉院皇后、観音院本願、母熙子女王、)

○昌子内親王御著裳ノコト、六年十一月二十八日ノ條ニ見ユ、

二十日、乙卯、上野ノ御馬ヲ、公卿侍臣ニ賜フ、

〔西宮記〕(八月駒牽事)　天暦四年八月廿日、(藤原師尹)小一條記云、上野御馬分賜、不賜信濃馬、(御馬カ)公卿侍臣等、(實頼)左大臣就中隔行事、入夜甚雨、大臣已下殿上侍臣、於宜陽殿西廂奏慶由、

裝束記文云、當日早旦、上御格子、(但不撤障子、)南廂西第四間、中央鋪廣筵、立大床子御座、其北母屋柱西(南イ)立太宋御屏風二帖、簀子敷西第三間西柱下鋪筵一枚、大臣座、御帳乾角裝飾御裝物所如常、

信濃ノ御馬ヲ卿侍臣ニ賜ハズ大臣以下奏慶

上皇皇女

紫宸殿ノ鋪設

二十九日、甲子、上皇、石清水宮使御發遣ニ依リ、御燈ノ日、神事ヲ行フ例ヲ勘ヘシメ給フ、

〔西宮記〕(三月三日御燈)　○前田家本　天暦四(裏書)ー八ー廿九ー小一條(藤原師尹)記云、院仰云(朱雀上皇)、來月三日欲發石清水使、而彼日當御燈、若有可准事者、檢三代實錄、貞觀十一年、元慶二年御燈日、被行神事佛事、仍令奏其由也、

御燈ノ日神佛事ヲ行フ例

揚名書生

揚名史生ハ公廨ニ與ラズ

上皇御在位中ノ御願

九月大乙丑朔

五日己巳、一分召、

〔源語祕訣〕李部王記云、天暦四年九月五日、一分除目、令一勞書生讓件揚名書生云々、

〔魚書祕傳別抄〕（料所收塙史）揚名介事、此一通被盡委細候、此外無別才覺候、於山城近江說者、僻事由存候、可在諸國之條勿論候歟、又强不可限介候哉、長德之比、有上野揚名掾、（大江御厨檢挍云々）天暦四年、一分召、有揚名史生沙汰、所詮不預公廨四字肝要令相存候、

十一日乙亥、伊勢例幣、上皇御願ノ神寶ヲ例幣使ニ付シテ奉ラシメ給フ、

〔西宮記〕（九月例幣）天暦四年九月十一日、天皇不御八省院、依例發使、（朱雀）太上皇依在位時御願神寶幣物等、付召（件カ）使令奉彼宮、但今日差院司、就八省廊令付使乎、（一小條記、）

十三日丁丑、宇佐使發遣ニ依リ、大宰府及ビ路次ノ諸國ニ官符ヲ下ス、

〔類聚符宣抄〕（一宇佐使）

太政官符大宰府、幷山陽道諸國司、（內印、）

路次ノ國ニ潔齋ノ人ヲ置キ汚穢ヲ除カシム

大宰府庫綿ヲ以テ宇佐使ノ祿料ヲ給セシム

使左衞門權佐從五位上藤原朝臣克忠

卜部從七位上卜部宿禰方本

右中納言從三位兼行陸奥出羽按察使藤原朝臣在衞宣、奉勅、爲奉幣帛幷神寶等於八幡大菩薩宮幷香椎廟、差件等人宛使發遣者、府國承知、依宣行之、仍須路次之國、設潔齋人祇候遞送、不得疎略以致雜穢、符到奉行、

位左大史

天暦四年九月十三日

驛鈴貳口（一口伍疋、一口參疋、）

太政官符大宰府、（外印、）

調綿貳佰屯

右奉八幡大菩薩宮幷香椎廟幣帛使左衞門權佐從五位下藤原朝臣克忠祿料如件、中納言從三位兼行陸奥出羽按察使藤原朝臣在衞宣、奉勅、宜以府庫綿給之者、府宜承知、依宣行之、符到奉行、

位左少辨

位左少辨

天暦四年九月十三日

主稅寮官人等勘稅帳ノ疑義ヲ相論ス　民部省ヲシテ理非ヲ定メシムル主稅弘仁式

勘稅帳ノ四義

天曆四年九月十三日

十六日甲辰民部少輔惟宗公方省ノ勘文ニ署セザル狀ヲ奏ス、

〔政事要略〕五十七　雜公文事　交替雜事十七

不能進署省勘文事

右左大史海宿禰業恒仰云、右中辨藤原朝臣有相傳宣、左（實頼）大臣宣、奉勅、主稅寮勘稅帳、式所稱返帳事、彼寮大允下房三與寮官、互有所申、依宣旨、各進勘文、爰讃岐介伴宿禰彥眞、重進房三勘文有誤失之由解文、幷件式勘文等、宣仰惣省、令定申其理非者、檢件寮弘仁式云、凡勘稅帳者、先據去年帳、勘會今年帳、次計會出擧、租、地子、驛馬等帳、訖待神祇、治部、主計等移、乃造損益帳二通、申官省各一通、然後返抄送省、若當年勘出、大國滿一萬束、上國八千束、中國六千束、下國四千束、卽返帳、但造損益帳一通留寮、仍錄返由申省、其未納幷交替欠、及去年勘出物未塡者、雖是束把亦猶返帳、唯當年勘出、不滿差數及餘（除カ）年中出擧雜用之外、所殘穎不糙之類、竝顯勘出、不須返帳者、案之、此式至于勘當年稅帳、隨勘出有無多少、或放返抄、或副返由寮解、返却其稅帳、令改正塡納之式也、細而言之、其義有四、無勘出之時、造損益三通、返帳送省、是一、勘出不滿差數之日、載勘出於返抄放之、是二、所謂未納不滿差數、不須返帳、幷貞觀格稱稅帳返抄、載徵物下國等也、又當年勘出、滿差數者、造損益一通留寮、副返却帳、申返本帳、是三、案其返帳字、是返本帳之意也、何者、返抄之義、無勘返之謂也、今對返抄之文、立返帳之文也、況復貞觀、延喜格式、迭引返抄之文、爲返本帳之義乎、又未納交替欠、去年勘出未塡者、省須造返却帳、申返大帳、而令改正塡納、是四、故以此四義、爲放返抄與返本帳之式也、但返却帳成文、雖不見此式、案其理致、是錄返由、申省解文也、何者勘出色目、注顯此帳、是錄返由之義也、造帳之樣、既修以解、是申省之意也、卽載返却帳稅帳、相共申返色、不待後年、々內塡納、可請返抄、何者、此式上稱當年、下云去年、既依去年物、惣返當年帳、可謂塡納之期、各不可及明年、加以、今有諸使皆責返抄之文、律立諸使妄干他事之制、案其如此、使不請返抄還國者、不可預釐務、既不預釐務、何課（課カ）畢使事乎、爰知使請本帳、還國之後、改正塡納、請其返抄、可預釐務、是皆使事法式、有限之故也、又稱去年勘出者、當年勘出、不滿差數之時、載於返抄、下國之後、明年稅帳進官之日、猶不塡納之謂也、所謂下文、稱顯勘出、不須返帳者也、又以未納交替欠之句、置去年兩字上者、斯蓋謂當年未納交易欠也、就中交替欠者、據交替式、隨欠物數、有徵塡限、於未納者、

貞觀格返帳ノ意義

職制律

交替式

寛平六年格　法理盡キザルヲ故ニ署ヲ進ムルコト能ハズ

水旱之年、蒙裁許所注未納者也、有徴率法、勘合帳面、不可返帳、此式所稱者、不經言上、不蒙裁許、所注載也、仍返帳之後、早可塡納、凡此式元意、皆是留（或カ）時當年之事也、管見所及不出外、而今省勘申旨、或以被返本帳、號返却帳、或以使預上日、稱勘畢之義、或以格式外例、爲案此式之備、或以有未納交替欠之句、爲難塡納勘出物之謂、或以舊年勘出之格意、爲案讀此式之證文、近則寛平六年格、舊年勘出、依非當時、雖未塡納、而不責返抄、而偏引此格、不詳塡納當時勘出之理、卽案云、至于返却本帳、專非國宰之苦、爲公爲國、無損無益者、既爲當時勘出之物、可塡而不塡者、是爲公有損、爲國有益、理之未盡、一端如此、仍不能進署、粗錄別狀、勘申如件、

天暦四年九月十六日　　少輔惟宗朝臣公方

件勘文、依卿（中納言藤原元方）仰催勘奉、依權大輔伴彦眞宿禰偏執卿論云、件式意爲舊年勘出也、非可謂當勘出、是甚不當論也、仍不奉同、亦々可案檢者、

二十三日癸亥、山城國ヲシテ、新嘗祭御酒料ノ稻ヲ進ゼシム、

〔類聚符宣抄〕（四御膳）　帝皇

太政官符民部省（外、）　御稻、

應進上新嘗會御酒料屯田稻貳拾束事

定山城國愛宕郡

右得造酒司解偁、來十一月新嘗會白貴黑貴御酒析、依例所請如件者、省宜承知、依件宛之、符到奉行、

（朝綱）左中辨

天暦四年九月廿三日　　左大史

二十六日庚寅、九日節ヲ停メテ、殘菊宴ヲ定ム、

〔西宮記〕（九月九日宴）　天暦四年九月廿六日小一條記云、左（伊頭）閣奉仰、改九日節、十月可行殘菊宴之詔、賜中務省、但依内記不候、自殿上仰朝綱朝臣、令仰（作カ）之、

〔本朝文粹〕（二詔）　停九日宴十月行詔（世號殘菊宴、）　後江相公

詔、望五雲而穿眼、汾水之遊不歸、攀九霞而摧心、荊岫之駕彌遠、九月九日者、先（堯）帝昇霞之月也、故九日之節廢而經年、丹菜無驗、徒傳禦寒之方、黄菊失時、空綴泣露之蔓、朕之長恨、千秋無窮、爰洛水春遊、昔日閣筆、商飈秋宴、今時卷筵、鹿鳴再停、人心不樂、詞人才子、漸呑吟詠之聲、詩境文場、已爲寂寞之地、孔子曰、文王已沒、文不在茲乎、宜開良燕於十月之首、以翫餘芳於五美之叢、凡厥儀式、一准

屯田稻二十束　造酒司解白貴黒貴御酒料

詔書ニ依リテ九日節ヲ廢セラル　儀式ハ重陽ニ准ゼシム

重陽、主者施行、

天暦四年九月二十六日、〇政事要略、年中行事抄同ジ、

○殘菊宴ヲ延引シ、尋デ、之ヲ追行スルコト、十月五日ノ條ニ、九日節ヲ復スルコト、安和元年八月二十二日ノ條ニ見ユ、

十月　小　乙未　朔盡

一日、乙未、旬、番奏ニ候セザルニ依リテ、右衞門督藤原師氏ヲ勘責ス、

〔政事要略〕二十五年中行事、二十五日、朔日旬事、

有勘氣罷出、

四日、戊戌、承子內親王御著裳ノ儀アリ、

〔西宮記〕臨時九、內親王著裳、更部記云、天暦四年十月四日、〇四日ノ二字、前田家本西宮記ヲ以テ補フ、

承子內親王初服袴、主上御飛香舍結袴腰、供進御肴、沈香折敷六枚、銀土器樣器辨備之、昇殿公卿、次又候簀子敷、殿上侍臣陪南軒廊、給酒肴、曲宴、酣醉、御衣一襲給右大臣、（師輔）其公卿已下內親王家賜祿、公卿女裝束一襲、四位五位白細長袴各一重、六位袴一具、其殿上男女房設饗、所々諸陣賜屯食云々、

五日、己亥、凶會九坎ニ依リテ、殘菊宴ヲ延引ス、尋デ、之ヲ追行ス、

〔政事要略〕二十四年中行事、九日節會事、殘菊宴事、

更部記、天暦四年十月八日、

九日節停止後、屬文徒常愁寂然、今有新儀、以來月上旬、可聞食殘菊宴、其間准玉燭寶典、十月五日、可宜由略定了、而彼日當凶會九坎、誠雖有本文、可准依曆道忌、延五日以八日可被遂行、但明年已後、以五日可爲定日由、昨日被定下耳、式部少輔三統元夏執殿下文臺筥、到東階下、左少將藤原伊尹空手進執殿上臺筥、（文歟カ）還東階、加執殿下筥、經殿東廂、入

飛香舍出　御主上親ヲ　袴腰ヲ結ヒ　バセ給ヲ　曲宴ニ　師輔ニ御　衣ヲ賜フ　饗ヲ設ク　屯食ヲ賜フ

玉燭寶典ニ據リ毎年十月五日ニ行ハシム

勅シテ博士等ヲ召サシム　勅使

御酒勅使

講詩ノ儀大江朝綱佳句ヲ詠ズ

御製ノ詩

重明親王等召ニ依リテ參入　重明親王

重陽宴ニ准ズ

母屋東面第一間、置大臣座西南、初伊尹私問置文臺筥儀、卽以延長例示誨之、少將又云、內辨大臣仰可置臺盤上由、答云、是敍位日置位記之筥例也、讀(讀カ)詩之時就平座、何更安盤上、雖然大臣所仰必有所據候氣色可進止、仍伊尹捧筥、跪大臣座後候氣色、殊無處分、(終脫カ)後置之、又內宴例、次將加弓執筥、節會仗槍已立仗頭、仍拱手而進、(實明)乘燭如是、又勅左大臣、召博士等、大臣卽仰參議維時朝臣、令召朝綱朝臣、直幹、元夏等、江宰相(維時)下殿、令(命カ)告知博士等、後進南欄召之、左大臣云、仰御酒勅使者、所以降殿、依不知夾名也、今指名仰之、須直進召之、後下殿令告之、左大臣展詩、右(師輔)大臣擇之、講詩儀如延長例、左中辨大江朝綱有佳句、令獻坏、巡先及講師、殿上總太守(上獻詩者脫カ)章明親王、參議維時弁余也、參議就臺獻之、親王所上之詩、及讀(讀カ)詩之次、左大臣乞求之、仍付(授カ)與之、其御製當扶給、落置物御机下、左大臣就賜之令講之、朗詠未畢、左大臣奪御製懷之、右大臣云、先例當座第一人領之、今大臣强領、可恠之、

〔西宮記〕

九月九日宴　吏部記云、○中略天曆四年十月八日、有召、未刻參入、侍臣文人共就座、召博士令獻題、一獻後、(實明)左大臣奏余及中務卿(重明親王)親王後參之由、令內竪召之、卽昇殿、庶儀准重陽宴、但茱萸不著、菊花不立、無茱萸可然、已賞菊花、不立乖義、殿上文臺、當御前立南欄、(師輔)延長立南廂東四柱西、今日失、第三獻未終、別當高明卿奉(奏カ)坊家奏、右大臣咳驚、以爲巡終可奏之、後良久不發音樂、左大臣云、內宴例、見奏者退、而立、參音聲終須退、久立失儀云々、左少將伊尹空手進取殿上文臺筥、還降加取發樂聲云々、仍令催之間、奏樂云々、樂前大夫當校書殿南第三四間立、(延長殿南端當)殿下筥、經殿東廂、入母屋東面第一間、置大臣座西南、初伊尹私問置筥儀、卽以延長例示之、少將云、內辨大臣仰可置臺盤上之由、答云、是敍位日置位記筥之例也、講詩之時就平座、何更安盤上、雖然大臣所仰必有所據、候氣色可進止、仍伊尹捧筥、跪大臣座後候氣色、殊无處分、然後置之、又內宴例、次將加弓取筥、節會仗槍已立仗頭、仍拱手而進、(乘燭如此、又)次樂舞踏了、左大臣仰維時朝臣、令召在昌朝臣、直幹、元夏等、江宰相下殿、令告博士等、後進南欄召之、左大臣云、仰(卽脫カ)酒勅使者、所須降(以カ)殿、依不知夾名也、今指名仰之、須直進召之、後下殿令告之、諸儒進候云々、左大臣召元夏令讀(讀カ)詩、他儒侍公卿南、左大臣展詩、右大臣擇之、左中辨朝綱有佳句、令獻盃、(巡脫カ)先及講師、殿上獻詩者、上總太守章明親王、參議維時朝臣幷余也、參議就臺獻之、親王所上之詩、及講詩之次、左大臣乞求(之カ)也、仍附(付カ)與之云々、御製令講之、朗詠未了、左大臣奪之懷之、右大臣云、先例當座第一人領之、左

菊花ヲ立テザルハ義ニ乖ルニ坊家奏ヲ奏ス

藤原伊尹殿上文臺ノ宮ヲ執ルニ伊尹宮ヲ置ク儀ヲ重明親王ニ問フ

諸儒ヲ召ス　三統元夏ヲシテ詩ヲ講ゼシム　章明親王等詩ヲ獻ズ

殿上鋪設　殿及ビ庭中文臺ノ位置ニハ大夫ヲ稱シ小節ニハ侍從ヲ稱ス　紫宸殿出御次侍從ヲ補ス　舞臺ノ三方ニ菊花ヲ立ツ　橘直幹三統元夏ヲ召シ題ヲ

大臣强領之、可恠云々、今年十月五日、當凶會日、仍有議用八日、但後年可用五日之由有定云々、

〔九條殿記〕

（部類年中行事　菊花宴　九條家本）

剋參入、諸司裝束如常、但內藏寮、殿上文臺立南簀子敷中央、庭中文臺立第四間、東西各三本、舞姫北方中一本、舞臺東北西三方立菊花、天曆四年十月八日、壬寅、天晴、巳三（右近陣日記云、立第四間者、而立第五間、似裝束司失、）

樂人座同正月七日、未御南殿以前、召御前有一兩仰事、又師氏朝臣日來有所恐不參、可召遣之由、同奉仰、午二剋御南殿、未著御座之前、可補（被脫カ）次侍從四人之由、藏人頭有相朝臣傳仰左大臣（實綱）、祚（ママ）王、實相眞人、認朝臣、清光朝臣等也、同剋親王公卿出著外辨座、未引侍從文人列、仰外記正統、再三令催仰、良久之後、纔參入、同剋開內（門カ）、大臣喚舍人、稱唯之後、少納言朝望替（參カ）入、大臣仰云、侍從喚云々、大節侍從、入自承明門東扉、式部引文人、入自西扉、謝座、謝酒、著座如常、中務、式部錄持簡、點檢侍從文人等、須相共入、而中務先之、式部後之、似相遞也、左大臣起座、奏云、題令獻之、上開（聞カ）之、大臣稱唯復座、召參議師氏朝臣、起座進立左大臣之後、仰云、直幹、元夏喚、（件兩大夫、當時師氏稱唯、立南簀子敷喚之、兩大夫起座稱唯、

勅シテ直幹ノ獻題ヲ用ヒシム　元夏韻字ヲ付ス　直幹ヲシテ序ヲ作ラシム　御粉熟ヲ供ズ　內敎坊奏アリ

師氏復座、大夫等經舞臺南東、入自東軒廊西第三間、昇東階、經南廂東妻母屋南面東一間、進立大臣後以東、去南五尺許、大臣仰云、題獻（禮）、兩大夫共稱唯跪、大臣取硯筥授直幹、（如式、座定之後、座在前可置之）直幹給之、書云、霜花滿叢菊、次元夏同紙書孟冬菊初坼、書了直幹撤硯雜具、入彼筥獻大臣、々々揷笏取之、直進西、就御帳東、跪奏聞、天皇御覽之間、置筥取笏候、（若准尋常奏、御覽之間、猶取筥可候歟、）大臣仰云、可用直幹題、但以元夏令付韻字者、卽所獻之、返（返脫カ）給大臣、々々又揷笏返給入筥復座、傳仰元夏、書云、以寒爲韻、大臣奏聞如常、天皇取久（之カ）御覽之後、置西方置物御机、大臣復座、置筥於座□（傍カ）、初兩博士所書案文、只令書韻字、大臣取之、示座腋次見下、直幹如舊硯等入筥、置大臣後、大臣問直幹云、可作序之人誰哉、申云、直幹、元夏兩人之間、隨仰可作、大臣仰直幹可作之由、（昨日召元夏、私問云、序者事、上卿所定仰歟、當初博士等所定申歟、元夏云、先日九日宴序隨策次第、依萬次直幹可作、又若棄先第者、更始朝綱朝臣可作云々、）博士等經初道復座、內膳益供、群臣起座、供御粉熟獻之後、良久□（不カ）賜（師卿）臣下、此間爲下侍從宣旨、內辨大臣就左近陣座、仍无人催行、依事可延引、僕示參議等令催仰、經剋之後纔益賜、三獻之後、內敎坊別當中納言源朝臣（高明、）取內敎坊奏、進付內侍復座、

御酒勅使

舞姫樂人等著座、樂前大夫失アリ

文人等詩ヲ獻ズ

女樂拜アリ

博士等ヲ召サシム

主殿寮ノ女官等脂燭ヲ執リテ候ス

□(大カ)臣奏引御酒勅使事、四人大夫奉仰之後、二人留東幄、二人經舞臺南、就文人幄、獻內教坊奏之後、須早起樂、而良久不起、仍別當中納言起座催仰、參入音聲奏之後、次調子之間、樂前大夫左馬助有時、右馬助仲舒、從弓場殿出進南、並立右近陣東南屏幔東頭、(東面、舞姫樂人等著座、舞姫座在右近陣、樂人座在弓場殿)調子吹了、樂前大夫猶立內辨大臣及式部(後カ)卿(重明親王)親王曰、調子之後、大夫可還入、而猶立似失、仍可還入之由、以參議師氏朝臣令傳仰、先舞蘇合六人、次玉樹十二人、次央宮樂六人、次萬歲樂六人、(童女、)次催馬樂十二人、樂漸欲畢之間、大臣起座著陣座、爲催見參也、固見參之後復座、此間樂未了、文人等獻詩之後樂了、元夏起座、進經舞臺西、取庭中文臺筥、經版位南舞臺北、立東階下、(先例、或如今日、女樂拜未了之前取之、或拜之後取之、今日拜後可取之由儀定了云々、而拜前取之、是外記等失錯所催行歟、)左近少將伊尹昇自東階、經簀子敷西、進取堂上筥、更還下取加輔所持筥、進置公卿座西南頭退還、上下群臣拜舞、是所謂女樂拜也、群臣復座之後、上仰可召博士等之由、大臣仰參議維時朝臣云、朝綱朝臣、在昌朝臣、直幹、元夏等召、其儀如爲令獻題召之時、蒙仰之間、大臣不起座、又不稱唯、此事未知理非、博士等又經舞臺南東參進、主殿寮女官取脂燭、候東北障子口、左近中將義方朝臣、少將伊尹昇自東階取脂燭、義方經公卿座東南、候

元夏ヲ講者ト爲ス

下臈ノ詩ヨリ讀ム

御製ヲ數度奉讀ス

實賴第一親王ヲ措キテ御製ヲ進ミ取ルル

宣命使祿使

裝束司

博士ヲ召ス儀

御帳巽角、伊尹便進西、候御帳東頭、(少卸、小)王卿起座、乍著靴進居、親王北頭、公卿南頭、此時博士等、進候南廂東第三間、大臣召元夏爲講者、(經大臣北臺盤南進居之、)左大臣取筥蓋覆置、先讀序、僕隨左大臣命、擇與詩五位以上之中、策家及一兩大夫詩十枚以下、自下臈讀之、至于隨內辨上卿令擇上詩者、此若納言所作歟、雖有事疑、爲從大(實資)兄命不敢辭、讀詩了之間、依朝綱朝臣詩有佳句、仰之令勸盃、天皇授御製、大臣進給之、撤初所讀臣下詩、令讀御製數度、賞歎之後、今日貫首式部卿親王欲給御製之間、左大臣進取之、親王、大臣遽稱先例、(先例、(忩ぎ)閣仰云、讀畢御製之後、第一親王給之者、而延喜御製兩三枚、故殿(在脫カ)、若此時親王早出之時給歟、)讀詩畢王卿著座、博士等降殿著座、此間依心神惱罷出之、後聞、參議隨時朝臣爲宣命使、維時朝臣爲祿使、刁一剋許事了云々、此日式部卿親王云、九日節日、金銅毬各殖菊一本、立御前南廂中央間東西柱下云々、其由問裝束司辨朝綱朝臣、答曰、聞食重陽節之時立菊花、今於他日必不可用、有事疑所不立也者、

〔西宮記〕九月九日宴

西記云、天曆四年十月八日、始有菊花宴云々、有勅、大臣令參議師氏召博士四(朔カ)人、其儀同召酒勅使之儀云々、

〔北山抄〕二年中要抄下　九月九日節會事

天曆四年、殘菊宴、左大臣奉仰所召也、

紀在昌ノ傳歷文章得業生

大内記文章博士

式部少輔伊豫權介ヲ兼ヌ

式部大輔

民部大輔

○殘菊宴ヲ定ムルコト、九月二十六日ノ條ニ見ユ、紀在昌ノ事蹟、便宜左ニ附載ス、

〔類聚符宣抄〕九方略試問者　左大臣（忠平）宣、宜令民部大輔藤原博文朝臣、問文章得業生紀在昌方略之策者、

延長六年三月廿日　大外記伴宿禰久永奉

〔日本紀略〕朱雀院　承平五年十二月二日、壬戌、先帝第十四親王成明、讀御註孝經之（テカ）、有竟宴事、於凝華舍、召文人賦詩、序者大内記紀在昌、

〔二中歷〕二儒職歷　文章博士　紀在昌天慶元七十二、從五上、

〔類聚符宣抄〕九方略試　請殊蒙宣旨、令奉方略試近江權大掾正六位上大江朝臣重光狀、

右重光、○略中望請天慈、殊降宣旨、○略中令奉件方略之試、仍錄事狀、謹請處分、

天慶九年二月廿一日○略中　正五位下行式部少輔兼文章博士伊豫權介紀朝臣在昌

〔二中歷〕二儒職歷　式部大輔（紀カ）天長以後　村上　藤在昌

〔類聚符宣抄〕九文章生試　民部大輔紀在昌朝臣下○略上

右左大臣（實頼）宣、件等人今日令候陣頭者、

天曆二年七月七日　少外記菅野正統奉

爲被問定擬文章生詩所召也、

〔本朝文粹〕六奏狀中申官僚　正五位下行文章博士橘朝臣直幹誠惶誠恐謹言、

請被特蒙天恩、兼任民部大輔闕狀、

右直幹謹檢案内、○略中今檢前例、職經博士、見在當朝者、○略中紀在昌朝臣、先兼式部少輔、後兼民部大輔、大内記○略中等是也、○略中

天曆八年八月九日

〔二中歷〕二儒職歷　學士侍讀　冷泉紀在昌天曆四、

〔玉藻〕建曆二年八月三日、○略中

宗業申狀等

宗業誠恐謹言、

御儒學幷式部大輔勞欲召加御侍讀事、

一式部大輔爲御侍讀學士例、　以後、○略中

紀在昌朝臣○略中
右狀端落了、可尋入、

〔紀氏系圖〕○大和

淑信

- 在昌（策冊）式部大輔、從四上、東宮學士、大內記、儒者、冷泉院御侍讀、或本淑人子云々、
  - 伊輔（策）式部權大輔、從四上、民部大輔、儒者、母橘公廉女、
    - 輔任　名醫也、
    - 伊賢（式女）越前權守、從五下、民部、式部、
  - 兼輔　刑部丞、

〔諸家系圖纂〕二十下　堀田

淑信

- 在昌　式部少輔、文章博士、民部大輔、大內記、學士、從四位上、冷泉院侍讀、延喜八年、於江野官餞渤海客（廿）（綠籬館）飯國、有文、有詩、同十九年、北堂漢書竟宴詠史、
  - 伊輔　大內記、民部大夫、從四位上、式部大輔、
    - 輔任　名醫、
    - 伊賢　民部、式部大輔、越前權守、從四位、
  - 兼輔　權少外記、刑部丞、

〔二中歷〕十二　詩人歷

諸大夫　紀在昌　式部大輔、
詩作者　扶桑集七十六人　紀在昌　延喜二十年ノ

〔本朝文粹〕九　序乙　詩序二　祖餞付審客餞別

（條參看）

夏夜於鴻臚館餞北客歸鄉、○五月十一日

紀在昌

執徐之歲、北客來朝、候龍星之一周、涉鼉波之千里、朝家憐彼遠節、賜以優寵、其禮峻焉、其恩深矣、既而觀天儀畢、歸蕃期至、逼王程之有限、歎友道之不終、夫以人之送別、別之傷人、自然之感、不覺而生、昔尼父之去周、老聃所以贈言、子高之還魯、季節由其攬淚、況乎天涯眇絕、雲帆長歸、馳思於煙驛、則梯山之程難計、通夢於波郵、則航溟之路易迷、於是燭燒紅蠟、歌奏驪駒、可以銷攀慕之魂、可以穿悵望之眼、今之相惜、不其然乎、于時桂月漸傾、梅雨斜落、勸紅螺而緩愁、染紫毫以寫思、君子之別、良有以哉、若予者、久積丹螢之光、未入白鳳之夢、不顧拙目、敢課庸音云爾、

〔江談抄〕四

渤海大使裴璆ヲ餞ス

兼輔　權少外記、刑部丞、

五嶺蒼々雲往來、但憐大庾万株梅、（天暦十年内裏御屏風詩、菅三品、○中略）
此御屏風詩題目者、左大辨大江朝綱奉勅、自坤元錄中撰進、三人作詩、卽朝綱、文章博士橘直幹、大内記菅原文時也、○中或人云、紀在昌不入作、内心竊爲歎云々、

〔河海抄〕十四 柏木　右將軍かつかにくさはしめてあをしとくちすさひて、それもいとちかき世の事なれは、

本朝秀句 天與善人吾不信、右將軍墓草初秋、（紀在昌、）

八條 右大將保忠事を作れる詩也、（左大臣時平息、母基康親王女、）

〔類聚句題抄〕晴添草樹光　紀在昌
纖葉景含寒縷解、嫩花粧映暖袍新、皐禽遊處蘭心媚、野馬馴來柳眼瞋、
停盃看柳色　紀在昌
脣謝十分青眼過、手忘三雅綠腰期、憐來雪絮巡無促、望盡煙枝飲欲遲、
白雲抱幽石　在昌
膚是綠苔尋點合、根猶碧溜逐痕遷、影濃文錦疑沈浪、色亂香鑪似吐烟、

〔和漢朗詠集〕下 雜　詠史

（和漢朗詠集ニ入ル）

藤原保忠ヲ賦ス

在昌坤元錄御屏風ノ詩作者ニ入ラザルヲ歎ズ

賓雁繫書秋葉落、牡羊期乳歲華空、（在昌、）

〔新撰朗詠集〕下 雜　詠史

三千里外隨行李、十九年間任轉蓬、（蘇武、紀在昌、）

〔和漢兼作集〕五 夏部下　池鳥晩眺　紀在昌朝臣

岸竹枝低應鳥宿、潭荷葉動是魚遊、（○和漢朗詠集同ジ、）

〔日本紀竟宴和歌〕天慶六年　得阿直伎　從五位上行式部少輔紀朝臣在昌

久太良與利、奈見遠和氣許之、岐見奈禮婆、奈遠波奈加禮天、乃許須奈留倍之、

〔本朝文集目錄〕上卷第三十五　紀在昌

夏夜於鴻臚館餞北客歸鄉詩序
北堂漢書竟宴詠史得蘇武詩序
宇多天皇爲源融修追福諷誦文

〔通憲入道藏書目錄〕一合第百十五局

紀在昌集三員、

○紀在昌、漢書竟宴ニ序並ニ詩ヲ作ルコト、延長元年三月七日ノ條ニ、宇多法皇ノ御爲メニ、諷誦文ヲ作ルコト、同四年七月四日ノ條ニ、内宴

著書　文　歌

ニ詩ヲ賦スルコト、同六年正月二十一日ノ條ニ、方略ノ試ヲ受クルコト、同年三月二十日ノ條ニ、内宴ニ詩ヲ賦スルコト、同七年正月二十一日ノ條ニ、日本紀竟宴ニ和歌ヲ詠ズルコト、天慶六年十二月二十四日ノ條ニ、藤原師輔室藤原盛子ノ周忌法會ノ願文ヲ作ルコト、同七年九月九日ノ條ニ、痢病ヲ煩フコト、同八年十二月十日ノ條ニ、皇子憲平ノ御湯殿讀書ヲ奉仕スルコト、天曆四年五月二十四日ノ條ニ見ユ、

十日、甲辰、興福寺維摩會、

〔維摩會講師研學竪義次第〕

四年、庚戌、講師壹和（朱書）〔清顯公〕左大臣實賴宣　年六十四、一ノ一　藏四十九、多治法相宗、興福寺、去年十一月廿六日宣、廿九日請」

同四年、去年十一月講師壹和（朱書）〔去年十一〕興福寺、法相宗、年六十一、藏四十、助精之弟云々、

竪義經印、年五十三、藏二十六、次勝怡、

〔三會定一記〕一

一天曆四年講師壹和注云、件講師不經研學竪義也、凡離本寺、至尾張國、補郡司職、其國内有荒人神、諸人問不審事、相示事、其言不違、然間件壹和飼馬忽失、相求四方、敢不見之、試問此神、答云、汝還住本寺、可遂維摩講師、又驚悼問其故、答云、維摩講師次第、帝釋宮所被記置也、汝前後二人、前二人、延（者脱カ）空、祥延

壹和尾張郡司ニ補セラルトイヘリ　壹和人神現ト云ヘリ　維摩會講師ヲ遂グ

也、其後二人者、基操、觀理也、仍還住本寺、如告神令遂講畢、勝事也、（朱書下同ジ）「長者右大臣實賴始宣」

講師壹和　法相宗、興福寺、去年十一月廿二日宣「六十一」　竪者經印　興福寺、

〔僧綱補任〕二　○興福寺本　講

次勝怡、

十三日、未、檢非違使ヲシテ、刑部省徵送ノ贖銅代物ヲ納メシム、

〔政事要略〕八十二　糺彈雜事

太政官符檢非違使

應納刑部省徵送贖銅代物事

右得彼省去閏五月十日解偁、謹檢案内、徵納贖（銅脱カ）元是司之最也、大同三年、以贖贖司依倂此省、偏掌此事、其後依弘仁十一年十月廿五日格、使檢非違使徵送勘納者（省カ）家隨家（嵰カ）官符宣旨、充行色々雜用、依天長九年七月九日格、停隸檢非違使、被付省家、又貞觀式偁贖（凡脱カ）凡銅錢者、收納獄司、省相共出納者、然則省徵司納、充公用之色也、而今囚獄司官舍顚倒、无實年久、比者亦復始自廳（遂カ）造于門屋、頻年顚倒、四面露形、殆无宿直之居、漸爲狐兎之棲、因之年來所徵贖物、計便宿納、數盜失、公用之時、轉治官人已下要劇田直、常以補塡、如此之漸、俸料虛耗、事之爲煩、莫過於斯、伏檢式條、獄囚應給衣粮薦席醫藥、及修理獄舍之類、用贓贖物、

刑部省ノ解　弘仁十一年ノ格　天長九年ノ格　貞觀式　囚獄司ノ官舍連年顚倒ス

延長四年ノ宣旨ニ獄囚ノ衣服料等ハ檢非違使ノ掌ル所

醍醐天皇女

薨奏

御世系

又延長四年五月廿七日宣旨偁、〇其條ア リ、以贖銅代物、充給左右獄囚冬時衣服、臨時食料幷修理獄舍等粮、是罪人被下囚獄司之時事也、宣旨所稱、左右獄囚衣服粮等、今檢非違使之所職也、今件贖銅粮、既无處於檢納、議獄決罪、非省之職掌、商量事情、專不穩便、名實相違、不可不申、望請官裁、贖銅申進未依舊、省將對濟納物、(宜カ)實放返抄、(仍カ)使令檢非違使行者、左(實朝)大臣宣、依請者、使宜承知、依宣行之、符到奉行、

右少辨藤原朝(顯光)臣

右少史山直

天曆四年十月十三日

參議藤原師氏室靖子內親王薨ズ、

〔一代要記〕醍醐天皇女　靖子內親王　延長八年九月廿九日、爲內親王、年十六、天曆四年十月十三日薨、年三十六、配大納言藤師氏卿、生一女、母源氏、

〔西宮記〕十二薨奏　臨時己〇前田家本　凶事　(裏書)九記云、天曆四十廿(十カ)四、〇略中　靖子內親王薨由、權中納言師尹奏聞、依內侍不候、付藏人奏聞云々、

〔本朝皇胤紹運錄〕

醍醐天皇

嶋町雜舍燒亡ス

淨藏栢梁殿ノ火災ヲ豫言ス

竿博士ヲ召ス

靖子內親王配師氏卿、母同克明、〇聖女、舊醍醐天皇、

〔花鳥餘情〕二十七寄生　同皇女靖子內親王ト爲スコト、延長八年九月二十九日ノ條ニ見ユ、

〇皇女靖子ヲ內親王ト爲スコト、延長八年九月二十九日ノ條ニ見ユ、

十五日己酉、朱雀院火アリ、

〔園太曆〕二十　文和二年二月五日、天晴、〇略中　匡遠仙洞火事例、隨身示之、

仙洞火事例

天曆四年十月十五日、朱雀院失火、嶋町雜舍皆悉燒亡、

〔皇年代略記〕村上天皇　天曆四十四、朱雀院燒亡、

〔元亨釋書〕十二感進四之二　釋淨藏　承平(朱雀)太上皇有病、藏筮曰、上皇疾易差、而明年宮中有栢梁(朱雀院)之災、果如言、〇上下略

〇皇年代略記、十四日ニ作ル、今園太曆ニ據リテ揭書ス、

十七日、辛亥、左大臣實賴ヲシテ、曆博士賀茂保憲、大春日益滿等ヲ召シテ、造曆ノ異論ヲ問ハシム、

〔西宮記〕臨時六定交替使事　天曆四年十月十七日小一條記云、左(實賴)大臣奉仰、於陣頭召問兩曆博士、爲竿訛謬、召竿博士宗平預此座也、

〔北山抄〕四省試判雑抄下　依宣明暦ニ益満ハ會昌革ニ據ル　拾遺雑抄下　召問儒士事

天暦四年、召問暦博士賀茂保憲、大春日益満等之日、小庭設座、竿博士泰平（宗カ）宿禰依仰令召候、明年五月、保憲以丁酉為朔、益満以戊戌為朔也、保憲申依宣明暦作進由、益満申會昌之由、申下官符畢、會昌革之由、宣明暦者、貞觀年中、大春日眞野麻呂可用件經之由、申下官符畢、會昌革不入（被カ）申請、延喜十七年御記、葛木宗公申依經説由、弘範申依會昌革之由、可依經説之由定畢、

二十日甲寅、荘子女王ヲ女御ト爲ス、

〔一代要記〕村上天皇後宮　女御従四位上荘子女王　中務卿代明親王女、母右大臣定方女、天暦四年十月二十日爲女御、

〔榮華物語〕○月宴富岡本　又おなし御はらからの代明の中務の宮の御むす（母左大臣定方）め麗景殿の女御にてさふらひ給、（庄子女王、具平母也、）

參議伴保平致仕ス、

〔公卿補任〕五　參議従三位伴保平　十月十五日致仕、八、四、十　天暦四年十月廿日、參議保平致仕、遣左近少將藤原伊尹於保平朝臣第、以口勅被仰許致（所謂イ）仕由、先尋例、弘仁菅野眞道例云々、召内記於陣、賜辭狀、次賜承知官符、

〔西宮記〕臨時二　王卿已下抗表事　天暦四年十月、參議保平致仕時、遣左少將伊尹於

〔北山抄〕六　勅答事　備忘略記　天

彼第、被仰許致仕之由、弘仁菅野眞道例也、以表下給上卿、々々又給内記、仰辨令下承知符於所司、

○公卿補任、十五日ニ作ル、今西宮記ニ據リテ掲書ス、

二十二日丙辰、延暦寺等二十一箇寺ヲシテ、御讀誦ヲ修セシメラル、

〔西宮記〕臨時五　院宮事　天暦四年○中略九記云、○中略同年十月廿二日早朝、廿一箇寺行御讀誦事、毎寺綿一連、但東西及延暦寺各三連、

東宮、桂芳坊ニ入リ給フ、

〔日本紀略〕冷泉院　天暦四年十月廿二日、丙辰、入桂芳坊、

〔西宮記〕臨時五　東宮行啓　冷泉天皇儲闈初入内、記在別、傳、大夫、學士、亮、進、左右兵衛尉已下一員、兵衛廿人、上卿奉勅仰外也、記、誡兵衛府也、陣頭十人、侍者八人、内舍人六人、殿上人、藏人所帯刀等供奉、乗糸毛御車、召（云々カ）副公卿出帯刀料移馬、新主帯刀未補之間行啓兵衛尉已下供奉、

天暦四年十月廿一日（二カ）、皇太子（金本）入桂芳坊、左兵衛、左近啓陣前、引啓内舍人陣頭、侍從次之、坊亮大夫相分、前駈主馬署、儲馬二疋、又引御前、太子與母御（女御安子）乗牛車、庇差糸毛車副朝服、著深履、如中宮例、大少進侍者、宮殿上人從車後云々、

毎寺綿一連東西寺各延暦寺各三連ヲ賜フ　傳大夫以下供奉ス　左兵衛等啓陣　東宮御母ト御同乗　東宮殿上人

〔西宮記〕臨時五　院宮事

天暦四年、〇略中九記云、〇略中同年十月廿二日早朝、〇略中御庇差車、入自陽明門、至縫殿陣御牛車、陣列次第新定、左右近將監以下、府生以上乘公馬、主殿下部四人秉燭、廳別納儲饗、碁手卅貫、勅使有年朝臣、祿物白大褂二領、

〔爲房卿記〕（節會）康和五年八月廿一日、戊辰、〇略中不補帶刀以前行啓例、（冷泉一才）天暦四年七月、於九條（第一條）右府（立坊、〇七月二日ノ條）、八月、行啓桂芳坊（十一月ノ補帶刀、參考十三）、

〇東宮御殿祭ノコト、七月二十八日ノ條ニ、桂芳坊ノ修理ヲ定ムルコト、同月三十日ノ條ニ見ユ、

二十五日、己未、東宮帶刀試、

〔西宮記〕十二　薨奏　臨時已　〇前田家本凶　事

文、其文云、延喜十三六十四、申送恬子内親王薨由、十五日、郡司召云々、仰云、此例可准、然則明日試事、猶令行者、靖子内親王薨由、權中納言師尹奏聞、依内侍不候、付藏人奏聞云々、

〔西宮記〕〇臨時立皇后太子任大臣事　（裏書）九記云、天暦四十廿四、令伊□（伊カ）奏、昨所作勘治部卿兼明作勅使、向右近埒、試春宮擬帶刀、坊亮以下預試、先試騎射、次試歩射云々、〇撰集秘記異ナシ、

〔西宮記〕臨時五　院宮事

兼明卿、未刻始了、屬召計史生名、車亮（筆力）把（朝雅カ）筆記中否、殿上人陣頭侍者參、

〇東宮擬帶刀ヲ貢スベキ所々ヲ定ムルコト、八月四日ノ條ニ見ユ、

二十八日、壬戌、郡司讀奏、

〔西宮記〕四月郡司讀奏　天暦四年十月廿八日九記云、左（實頼）大臣被行讀奏事、予（師輔）不著座、兩大臣著例、无所見故也、

二十九日、癸亥、東宮御修善、

〔西宮記〕臨時五　院宮事

天暦四年〇略中九記云、〇略中同廿九日、（十月）宮御修善畢、僧等給度者之由、亮雅信朝臣傳仰、此事無上代例、嘉祥三年五月有可准例、

日時定　先ヅ騎射ノ試次ニ歩射ノ試

アリ　源兼明ヲ勅使ト爲ス　亮源雅信筆ヲ執リテ中否ヲ記ス

竟　請僧ニ度者ヲ給フ

十一月大　盡　甲子朔

七日庚午、春日祭使ヲ定ム、

〔西宮記〕六　十一月　上申日春日祭　（裏書）天曆四年十一月七日小一條記云、○前田家本

依召參內、仰云、內藏助已上觸內裏穢、不參春日祭、擇參社頭諸大夫、可爲寮使者、召仰外記有方了、

十日癸酉、權少僧都寬空等、仁和寺寶藏御物實錄帳ヲ作成ス、

〔仁和寺御室御物實錄〕

合

金銀泥繪御厨子壹基有金銅鍍子兩面覆、○中略

右御物、以去承平元年七月十日、自御室、假所被上納寺家寶藏也、○其條アリ、而彼時實錄帳紛失無實、仍今相加未納物造實錄帳、同假檢納本藏如件、抑此帳一通各々分書加納厨子韓櫃等、又以惣帳三通分置寺家圓堂幷觀音院西室等、但若可開閣寶藏者、加署之人必令會集、至于後代者、御後爲長之人、率寺家別當三綱圓堂三僧等、同共可勤此事、相對件等帳、勘知御物數、若有一人不會、不得輒開見之、

承平元年ノ實錄帳紛失ス

惣帳三通ヲ寺家ニ分置ス皇宇多法ノ御後ヲシテ寶藏ヲ開閣ヲ行ハシム

內裏穢アリ更ニ內藏寮使ヲ選ブ

仁和寺　御室御物實錄

合

金銀泥繪御厨子壹基　有金銅鍍子南面扉

　　紙金金剛界廿七尊像　銀光　但七尊金銅座

一躰四寸

右御物以去元和元年七月十日自御室假所被上納寺家寶藏也而彼時寶錄帳紛失無實仍今相加未納物造寶錄帳同假檢納本藏如件抑此帳一通各〻分書加納厨子轜櫝等又以惣帳三通分置寺家圓堂并觀音院西室等但若可開闔寶藏者加署之人必令會集至于後代者　御後爲長之人率寺家別當三綱圓堂三僧等同共可勤此事相對件等帳勘知　御物數若有一人不會不得輙開見之

天曆四年十一月十日

圓堂三僧

權少僧都　二叠

大法師　乙十兩

此事相對件等悵勘知　御物數若有一人
不會不得輙開見定之

天曆四年十一月十日

圓堂三僧

權少僧都　二叠

大法師　九十面

大法師　

御經藏勾當

大法師　

寺司

別當大法師　

權別當大法師　

上座大法師　

寺主從儀師　

都維那法師　

實錄使

奉記事濃尓嘗覧　

文章生和氣　

仁和寺　御室御物實錄

合

金銀泥繪御厨子壹基　有金銅鏁子兩面覆

一躰四寸　此金金剛界廿七尊像　銀光但七尊金銅座

右御物以去兼平元年七月十日自御室假所被上納寺家寶藏也而彼時寶錄帳紛失無實仍今相加未納物造寶錄帳同假檢納本藏如件抑此帳一通各〻分書加納厨子轉櫃等又以惣帳三通分置寺家圓堂并觀音院西室等但若可開闔寶藏者加署之人必令會集至于後代者　御後爲長之人率寺家別當三綱圓堂三僧等同共可勤此事相對件等帳勘知　御物數若有一人不會不得輙開見之

天曆四年十一月十日

圓堂三僧

權少僧都　二叠

大法師　九十通

原寸　縦〇・二八一米

此事相對件等悵勘知　御物數若有一人
不會不得輙開見之
天曆四年十一月十日

圓堂三僧
權少僧都二奎
大法師九十四
大法師寬忠

御經藏勾當
大法師

寺司
別當大法師
權別當大法師
上座大法師

寺主從儀師
都維那法師

實錄使
奉記事美濃嘗麗
文章生和氣

圓堂三僧

御經藏勾當

實錄使

天曆四年十一月十日

圓堂三僧

權少僧都（自尋下同ジ）「寬空」

大法師「平遍」

大法師「寬忠」

御經藏勾當

大法師「寬穗」

寺司

別當大法師「[illegible]」

權別當大法師「寬救」

上座大法師「仁寬」

寺主從儀師「禪鴻」

都維那法師「禪雄」

實錄使

大內記兼美濃介菅原朝臣「文時」

文章生和氣規行

○宇多法皇、御室ノ御物ヲ仁和寺寶藏ニ納メ給フコト、承平元年七月十日ノ條ニ見ユ、

十七日、庚辰、豊明節會、

〔西宮記〕六　十一月　中卯日新嘗祭事

○前田家本　天暦四年十一月十六日夜、可御中院、而小忌唯參議一人而已、依無先例停行幸、雜人汙散内膳供神物、僅捕得一人、卽下獄云々、

〔西宮記〕六　十一月　新嘗會

○前田家本　天暦四十一十七日、右(藤脩)大臣有所勞、自掖參上、

〔政事要略〕二十六　年中行事　二十一月　中卯新嘗祭事

嘗會、就殿座後、内辨左大(藤房)臣、告今朝下補大歌別當宣旨由、右(藤脩)大臣不候列座、群臣座定、仍升殿、左大臣問其故、右大臣答云、依有所勞不就列也、非有免列宣旨、雖大臣猶可就列、其不候列者、供膳後、内辨奏其由、可召者也、而内辨不奏直進、頗可怪、若殊内侍令奏歟、

十八日、辛巳、女王祿ヲ延引ス、

〔北山抄〕一　年中要抄　上　正月　八日給女王祿事

隨辨官觸藏人可令入女王之由、仰右陣

畢、見藏人舊例作奏文、後日奏之、參議加署、近代無其事、

天暦四年十一月、依上不參、後日給之、

〔政事要略〕二十七　年中行事　二十一月　三日(中巳日)　中行事二十七日(中巳日)賜女王祿事

上不參也、有勅定、後日給畢、參議師氏朝臣行事、

○北山抄、政事要略、日闕ク、今姑ク恆例ニ據リテ掲書ス、

二十日、癸未、東大寺、封戸莊園ノ租庸調ヲ檢シ、寺用ヲ謄記ス、

〔正倉院文書〕東南院文書　參櫃第三十二卷

(實朝)東大寺封戸庄薗幷寺用」

○端闕ク、

九百五疋七□調

(疋カ)
卅□四丈□□(疋カ)

糸三百二約六□(綱カ)

綿千三百九十二屯

九百廿二屯調

四百七十屯庸

中男作物
調布
庸布
商布
白米
黒米
租代
調代
仕丁養

十屯中男作物
調布千五百九十一端一丈九尺
九百二端調　五□□百端□(仕)□(丁カ)養商布三百端
庸布七十四段一丈四尺
商布三百六十段
中男作物
油九斛七斗三升四合
紙二万四千五百六十張
和布九十斤
黒葛五十斤
白米四百九十斛二斗一升三勺一撮
黒米千二百七斛五斗四升六勺
二百六十五斛一升八合六勺租代　九十五斛五斗調代
七百二斛八斗五升庸　百卌四斛一斗七升二合仕丁養
稲三百八十束

封租
仕丁
國未到ノ仕丁日功錢
封戸大和
伊賀

大豆六十二斛四斗
小麥十斛
封租穀二千七百五十二斛五斗一升一合
鹽廿五斛三斗五升　粳堅鹽
仕丁七十二人
（千六カ）六十人見役
五十六人國未到
日功錢百十八貫九百卌四文　人別二貫百廿四文、

大和國所進
白米卅五斛五斗　油六斛
伊賀國百戸
調糸百九十一約七兩二分阿拜郡六十戸斬、約七兩二分伊賀郡卌戸斬、　代米九十五斛五斗
庸米五十一斛三斗（十八斛九斗阿拜郡斬、二斛四斗伊賀郡斬、）
租白米八十斛五斗八升八合九勺（卌九石六斗八升三合七勺三撮阿拜郡、卌石九斗五合一勺七撮伊賀郡、）定九十四石五斗八合九勺（（宋書下同ジ）「二合精代」）
中男作物胡麻油一斗六升一合（五升六合阿拜郡、一斗五合伊賀郡、）「代一升充五束之」

近江

仕丁四人 二人見役、二人國未到、日功錢四貫二百卅八文、「以米充升別十文辦之」養米廿二斛五斗、人別五石六斗二升五合、

近江國百五十戸

調絹百卅二疋五丈二尺五寸　八十七疋五丈二尺五寸愛智郡百戸斬、大國縣鄉、五十五疋坂田郡五十戸斬、上坂田鄉、「疋別充四石辦之」

庸米百五十四斛八斗　九十六斛六斗愛智郡、五十八石二斗坂田郡、

租穀六百斛　四百石愛智郡、二百石坂田郡、「代米二百七十三石三升九合」「二百石代米九十石一升三合」

中男作物胡麻油七斗七升　四斗二升愛智郡、三斗五升坂田郡、「一升代充稻五束」

仕丁六人 一人見役、五人國未到、日功錢十二貫六百卅四文、「十文代充一升辦之」養米廿五石六斗八升、人別四石二斗八升、

美濃

美濃國百戸

調絹廿八疋二丈二尺五寸　十七疋二丈二尺五寸大野郡五十戸斬、伊倫鄉、十一疋方縣郡五十戸斬、「代米七十石八斗四升　疋別二石五斗」

庸米卅二斛七斗　十九石七斗大野郡、十三石方縣郡、「朝妻定百廿石、斗別充米三升辦之」

租穀二百廿九斛五斗二升　白米七十一斛七斗四升　卅八石二斗二升大野郡、卅三石五斗二升方縣郡、百七石二斗一升籾、

中男作物胡麻油一斗七升五合　七升大野郡、一斗五合方縣郡、「以見油辦之」

仕丁四人國未到　日功錢八貫四百九十六文、養絹六疋四丈、人別一疋四丈、「調絹代同之」

駿河國百戸

調絹卅四疋四丈五尺　廿疋三丈益頭郡五十戸斬、益頭鄉、廿三疋三丈、富士郡五十戸斬、久頭鄉、「若沽時充六百沽之」

駿河

下野

庸布七十四段一丈四尺　卅六段一丈一尺益頭郡、廿八段富士郡、「段別充六十文辦之」

中男作物紙千九百廿張　九百八十張益頭郡、九百卅張富士郡、「見帋辦之」

租穀四百斛　二百石、五文沽之」

下野國二百五十戸

調庸粟調布千百十端一丈九尺　七百九十五端一丈四尺調、三百十五端五尺庸、「端別充六十文辦之、沽法卅文」

二百廿二端二丈四尺足利郡五十戸斬、

二百五十三端一丈四尺都賀郡五十戸斬、二百五十三端二丈八尺芳賀郡五十戸斬、

百卅端七尺鹽屋郡五十戸斬、

租穀千斛　二千張足利郡　千八百八十張梁田郡　千六百張□、二千張芳賀郡、千七百六十張鹽屋郡、「不定也」

仕丁十人日功錢廿一貫二百卅文　養調布百端　商布三百段代、「充卅文辦之」

若狹

若狹國五十戸

調鹽廿五斛三斗五升　「見堅鹽八百果辦之、果別充三升」「穀二百石」「斗別充十文」租白米卅二斛二斗二升四合四勺　「前分八十果」庸米廿四斛　一斗五升「見進」

仕丁二人 一人見役、一人國未到、日功錢二貫百廿四文、養米八石五斗六升、人別四石二斗八升、

中男作物紙六百八十張　「佔別充十文辦之」

越中

越中國百五十戸

越後

調綿七百卅七屯　四百卌一屯射水郡百戸新、阿努古汗鄉、三百六屯新川郡五十戸新、志留鄉、
庸綿三百五十屯　百九十九屯八兩射水郡、百五十屯八兩新川郡、
租穀三百六十五斛三斗九升一合　中男作物胡麻油四斗一升三合　二斗五升五合射水郡、二斗五升新川郡、
仕丁六人國未到　日功錢十二貫七百卅四文、蓑絹九疋、

越後國二百戸

調絹二百卅疋　「足別充七百文辨之」百卅疋頸城郡五十戸新、十疋石船郡五十戸新、「端別充六十文辨之」
調庸絁調布三百四十七端二丈八尺　百六端二丈八尺調、二百卅一端庸、定八十五端二丈八尺調、
　百卅三端二丈八尺頸城郡　卅二端二丈八尺調、七十七端三嶋郡　廿七端調、五十端庸、
　七十七端沼垂郡　廿七端調、五十端庸、五十端石船郡　十端調、卅端庸、
租穀八百斛　每郡二百石、「斗別充六文辨之」中男作物調布三百四十七端二丈四尺　每郡八端一丈四尺、「充六十文、又八十充收之」
仕丁八人國未到　日功錢十六貫九百九十二文、蓑商布二百卅段「充卅文」

丹後國五十戸　竹野郡納野鄉、

調絹卅疋　「充七百文之」「屯別充五十文」租穀百廿四石九斗三升　「斗別充五文」中男作物　和布九十斤、以大六斤爲一人析、黑葛五十斤、以大五斤爲一人析、
仕丁二人　日功錢四貫二百卅八文、蓑絹五疋、「同調」

播磨國五十戸　餝磨西郡、

播磨

丹後

越後

調絹卅一疋庸米卅五石「六」「一斗」　「穀二百石」租白米六十八石四斗九升三合二勺中男油一斗四升四合
仕丁二人　日功錢四貫二百卅八文、蓑絹五疋、

紀伊國五十戸　伊都郡、

調綿百九十二屯庸綿七十二屯　「屯別充百廿文」
中男作物綿十屯　仕丁二人　一人見役、一人國未到、日功錢二貫百廿四文、蓑絹五疋、「充一貫辨之」

阿波國百戸

調糸三百二絇六兩　二百三絇板野郡五十戸新、九十九絇六兩那賀郡五十戸新、
租大豆六十二斛四斗　五十二石三斗板野郡、十二石一斗那賀郡、小麥十石　那賀郡、中男油三斗七升八合　二斗三升八合板野郡、一斗四升那賀郡、
仕丁四人　一人見役、三人國未到、日功錢六貫三百七十二文、蓑絹十疋、

讃岐國百五十戸

調絹百廿疋二丈二尺五寸　卅六疋三丈山田郡五十戸新、卅疋七尺五寸鵜足郡五十戸新、卅四疋二丈香川郡五十戸新、
庸米百卅三斛九斗五升　卅八石二斗五升山田郡新、五十一石一斗五升香川郡、
租白米百卅七斛五斗五升　卅五石二斗二升九合山田郡、六十一石七升六合香川郡、卅一石二斗六升五合鵜足郡、
中男油二斗四升五合　一斗四升山田郡、七升香川郡、一斗五合鵜足郡、
仕丁六人　一人見役、五人國未到、日功錢十貫六百廿文、蓑米卅二石二斗二升、人別五石二斗七升五合、

讃岐

阿波

紀伊

土佐　伊豫　寺田

土左國百戸

調絹五十二疋五丈二尺五寸　廿二疋三丈二尺五寸香美郡五十戸新、卅疋二丈二尺五寸吾川郡五十戸新、「足別充一石二斗五升辨之」

庸綿七十五屯八兩　卅九屯香美郡、卅四屯八兩吾川郡、

租白米五十四斛六升五合八勺　卅三石九斗五合八勺香美郡、廿一石吾川郡、中男油四斗一升九合　二斗二升一合香美郡、二斗八升八合吾川郡、

仕丁四人　一人見役、三人國未到、日功錢六貫三百七十二文、糞米十七石四斗三升、人別四石三斗六升五合、

伊豫國二百戸

調絹二百四疋五丈二尺五寸　卅疋温泉郡五十戸新、卅八疋風早郡五十戸新、「足別充一石二斗五升」　百十六疋五丈二尺五寸喜多郡百戸新、

庸米百五十三斛三斗　卅四石九斗五升温泉郡、卅四石六斗五升風早郡、卅四石九斗五升喜多郡、

租黑米二百六十五斛一升八合六勺　六十六石五斗二升二合五勺風早郡、六十六石五升二合五勺温泉郡、百卅六石九斗一升三合八勺喜多郡、

中男油五斗六升七合喜多郡、紙二千七百廿張、　千三百六十張風早郡、千三百六十張温泉郡、

仕丁八人　二人見役、六人國未到、　日功錢十二貫七百卅四文　糞米卅七斛七斗一升一合　人別四石七斗一升四合、

田地三千四百六十二町六段百五十五步

水田二千七百八町二段百五十步

未開二千四百九十五町七段百廿五步

見開二百十二町五段百廿五步

畠百九十四町三段百廿一步

鹽山五百六十町　三百六十町幡麻(磨)國明石郡垂水村、二百町紀伊國海部郡賀田村、

平城左京田畠九町一段三百卅步　水田四町九段二百八十步、畠四町二段百卅二步、

二條五町二段百步

七坊三町七段十二步　三町十二步雜人幷仕丁等居住所、七段開發、沽直米三石六斗四升、

二里一町五段八十二步　二段八十八步荒、見田一町三段、沽直米五石六斗七升、

三條二腹見里一町五段　三段荒、一町二段荒、二段見、沽直米九斗、

四條五坊坦穴田一町二段百廿步、直米六石一斗一升、八條市庄畠一町二段百廿步、西市地百廿步、西南角、

大和國田地九十五町四段三百五十二步

添上郡酒登庄六町五段百六十五步　畠八段百七十五步、

田五町六段三百五十步

同郡櫟本庄田卅町五段七十二步　常荒并古今年荒十二町七段二百七十二步、

定田十七町七段百六十二步

山邊郡長屋庄田二町二段

城下郡村屋庄田地六町四段廿步　畠五段廿步、田五町九段、

山背　添下郡清澄庄田地廿七町二段七歩
畠一町一段百卅八歩、田廿五町二百廿九歩、常荒幷古今年荒溝所十九町一段百十三歩、
高市郡飛驒庄田地七町六段三百卅七歩
十市郡十市庄田地二町五段十歩
山背國相樂郡畠八町
泉庄四町

攝津　甕原四町　六段造寺所
攝津國田地八十六町七段卅一歩
嶋上郡山埼水成庄田地
河邊郡猪名庄田八十五町一段三百卅二歩

伊賀　住吉郡安曇江、新羅江兩庄地一町五段五十九歩
伊賀國阿拜、伊賀兩郡柏野庄田十四町二百七十歩

近江　近江國水田二百五十町二百十二歩
神埼郡因幡庄田百廿一町廿六歩　愛智郡大國庄田七町一段三百廿歩
犬上郡覇流庄田百十二町七段卅六歩　坂田郡息長庄田四町三段六十歩

伊勢　同郡私市庄田四町八段百卅歩
伊勢國三重郡三重庄田五十町已荒、

美濃　美濃國安八郡大井庄五十二町九段百八十歩

尾張　尾張國田百九十七町五段百九十歩

海部郡十町　中嶋郡百五十六町九段百八十歩

山田郡六町　愛智郡五町　葉栗郡四町　丹羽郡十町

越前　越前國田七百六十八町九十九歩

丹生郡椿原庄田五十町

足羽郡道守庄田三百廿六町二段五十五歩　鎧庄田百町九段二百八十八歩

加賀　糞置庄田十五町八段二百六十八歩

坂井郡國富大庄田卅七町七段卅歩　國富小庄田卅六町一段百八十歩

鯖田庄田十七町四段二百九十歩　小榛庄田卅町

溝江庄田百卅三町六段七十二歩

加賀國能美郡幡生庄田二百五十町

越中　越中國田七百卅九町七段百八十歩

越後　礪波郡狩城庄田百町　石栗庄田百廿町
　　射水郡須賀庄田五十六町七段二百九十四歩　楔田庄田百卅町八段百九十二歩
　　成戸庄田五十九町八段百卅歩　鹿田庄田卅町三段二百歩
　　新河郡大荊庄田百五十町　丈部庄田九十一町九段十二歩
　　越後國田百十三町二百八十九歩
　　頸城郡石井庄田六十五町一段七十四歩　吉田庄田廿町九段九十八歩
　　眞沼田庄田廿六町百六十歩
丹波　丹波國多紀郡後河庄田廿二町四段百歩
　　同國布佐比內地
因幡　因幡國高草郡高庭庄田十二町一段二百八十六歩
伯耆　伯耆國河典
播磨　幡（イヽ）磨國多可郡粟生庄田廿一町六段六十九歩
周防　周防國吉敷郡椹野庄田九十一町六段十九歩
阿波　阿波國名方郡新嶋庄田地八十八町二百六十五歩　地八十五町百九十五歩、田三町七十歩、
伊豫　伊豫國新居郡新居庄田九十三町　田四町六段百八十歩、畠八十八町三段百八十歩、

寺用白米　白米七斛二斗五升二合　一箇日析
大佛御供　一斗大佛御供析　五斗二升佛聖廿六柱御供析　一斗四升律師一口從析　六升僧三口析、三升二合沙彌二口析、四升八合童子四人析、
佛聖廿六　九升六合別當一員從析　四升僧二口析、二升四合童子二人析、　六升威儀師一員從析　二升僧二口析、二升六合沙彌一口
杜御供　析、二升四合童子二人析、　四升從儀師一員從析　一升六合沙彌一口童子二人、
　　一斗二升三綱三員從析　各沙彌一口童子二人、四升八合沙彌三口析、　七升二合童子六人析、
　　八合等數二員干食析　一升六合堂達四員干食析　五斗四升年分證師正供
　　從析　三斗正供、二斗四升沙彌析、　二石八斗安居講師從析、沙彌二員九十箇日析

黒米　黒米
　　八斗四升六合男雜色六十五人粮析　一斗長二人析、造二人、倉人一人、幷五人析、各二升、
　　二斗八升六合定額十六人析　一斗八升六合十一人析、各二升六合六勺　倉人三人、鎰取四人、大小膳二人、商長一人、
　　五斗五升八合員外卌七人析　二升綱所鎰取一人、四升土師工二人、四升杣工二人、一斗四升膳夫七人、
　　三斗六升七合二勺女雜色卌人析　二斗八升廿八人析、八合泉庄預、四合大津庄預、三升小子六人析、各五合、

菱女　一斗六升六合六勺定額十六人析　二升六合六勺寺刀自二人析、各一升三合三勺、一斗四升長二人、
神子料　一斗八升二合六勺員外廿二人析　醬刀自、酢刀自二人、御厨女四人、雜使四人、菱女二人幷十六人、各一升、
　　六斗六升仕丁十六人析　三斗二升粮析、各二升、　八合神子二人析
　　各八合三勺、　二斗四升菱析、

天暦四年十一月二十日

鹽

二合大佛御粥　二升三合四勺佛聖廿六柱御粥　五合三勺律師一員粥（二合七勺僧三員、一合八勺沙彌二員、四勺童子二人粥、）
四合別當從粥（一合八勺僧二員、一合八勺沙彌二員、四勺童子二人、）　二合二勺威儀師一員從粥（九勺僧一員、九勺沙彌一員、四勺童子二人、）
一合三勺從儀師一員從粥（九勺沙彌一員、四勺童子二人、）　一合一勺十禪師一員從粥（九勺沙彌一員、二升童子一人、）
三合九勺三綱三員從粥（各沙彌一員、童子二人、）　二升七合年分證師正供從粥
二升六合二勺男女職掌百五人粥（一升一合二勺廿八人粥、各四勺、）　一升五合七十八人粥（各二勺、）
六合四勺仕丁十六人粥（各四勺、）　一斗二升六合安居講師從沙彌二員九十日粥

味醬

二合大佛御粥二升三合四勺佛聖廿六柱御粥四合五勺律師一員僧三口沙彌三口幷五員粥（各九勺、）
三合六勺別當一員、從僧二員、沙彌二員粥（各九勺、）一合八勺威儀師一員從僧一員、沙彌一員粥（各九勺、）
一合八勺從儀師一員從十禪師一員、從僧二員、從沙（行カ）彌二員粥、（各九勺、）一斗七合年分證師正供從粥
二合七勺三綱三員從沙彌三員粥（各九勺、）　一斗八合安居講師從沙彌二員九十箇日粥

和布

五把大佛御粥　三連九把佛聖廿六柱御粥　七把五分律師一員從僧三人、沙彌一人幷五員粥
六把別當從僧二口、沙彌二口幷四員粥、　六把威儀師一員從僧二、沙彌二幷四員粥

荒布

四村大佛御粥　五嶋二村佛聖廿六柱御粥　一嶋律師一員從僧三、沙彌二幷五員粥
八村別當從僧二、沙彌二幷四員粥　八村威儀師一員從僧二人、沙彌二幷四員粥
六村從儀師一員十禪師一員、從沙彌二員粥　六嶋年分證師正供從粥
三嶋二村仕丁十六人粥　卅六嶋安居講師從沙彌二員九十箇日粥

醋

二合大佛御粥　一升三合佛聖廿六村（柱カ）御粥　二合五合（勺カ）律師一員從僧三、沙彌二幷五員粥
二合別當從僧二沙彌二幷四員粥　二合威儀師一員從僧二、沙彌二幷四員粥
一合五勺從儀師一十禪師一、從沙彌二員粥　一合五勺三綱三從沙彌三員粥
一升五合年分證師從沙彌一員粥　七升二合安居講師從沙彌二員九十箇日粥

絹

四丈五尺春秋神祭粥　七疋櫻會講師布施　五疋安居講師布施　十一疋同法用布施
五疋政所歲末讀經布施　二疋同粥綱所粥　二疋花嚴般若兩會勅樂官人氈代粥

神祭禰宜春秋淨衣料

一疋神祭禰宜春秋淨衣料　三疋二丈花嚴般若兩會堂達四人赤袈裟料　各二丈五尺、

百六十五疋男女職掌等衣料

八十七疋男五十五人料　卅六疋定額十六人料、十二疋長二人、造二人幷四人料各三疋、廿四疋鎰取四人、倉人四人、酒長二人幷十二人料、各二疋、

五十一疋員外卅九人料　廿四疋綱所鎰取一人、土師工二人、杣工二人、膳夫七人各二疋廿七疋廿七人料各一疋、

卅八疋女十八人料

卅六疋定額十六人料　十二疋寺刀自二人、女長二人幷四人料各三疋、廿四疋舂酢刀自二人、厨女四人、雜使四人、羹女二人幷十二人料各二疋、

二疋神子二人料

綿

十屯櫻會講師布張（脩カ）　卅屯同會聽衆布施　廿三屯安居講師布施

十屯花嚴般若兩會勅樂史生丸（藪）代料

二百十四屯男女雜色百五人料

百卅二屯男六十三人料　十屯各三屯　百十四屯五十七人料　各二屯、

八十二屯女卅人料　十三屯各二屯　六十八屯卅四人料　各二屯　二屯神子二人料

卅二屯仕丁十六人料　卅四屯諸堂童子卅二人衣料　四屯二人料、

八屯諸庄々守衣料　泉二人、春日庄一人、櫟本庄一人、原二人、長屋庄一人、村屋庄一人、猪名庄一人、

調布

卅端櫻會聽衆布施　十四端吉祥悔過七僧布施

四端櫻會法用布施料　三端二丈六尺佛廿八柱敷布（所カ）　一丈六尺二所、廿六端各六尺、

七端三丈八尺伎人等早袖冠幷前裳料　各一丈、

二端一丈膳夫七人、大炊女、上院伎女一人幷九人早袖冠料　各一丈、

五端二丈八尺女卅八人前裳料　各六尺、

廿端花嚴會造花細工等甑代料

二百六十六端男女雜色人等衣料

百五十八端男六十三人料　六十四端定額十六人料、各四端、各二、

百八端女（卅八人カ）□□□□（斷カ）六十四端定額十六人、各四、卅四端員外廿二人料、各二、

卅四端諸堂童子卅二人衣料　各二、

四端春秋神祭、陰陽師布施幷疫神祭、

庸布

四端神祭禰宜淨衣　卅端諸堂童子卅人衣料　二端吉祥導師呪願布施

商布

疫神祭　二段疫神祭敷布　二百六十六段男女雜色人衣粁　百廿八段男女定額廿二人粁、各四、百卅八段同員外六十九人粁、各二、
狹岡神祭料　卅二段仕丁十六人衣粁　各二、　十六段庄々守八人衣粁　各二、　二段狹岡神祭粁
僧官從者員數　僧綱從法僧正一柱　僧五員、沙彌四、童子八、　大小僧都　僧四、沙彌三、童子六、
律師　僧三、沙彌二、童子四、　威儀師　僧二、沙彌一、童子二、　別當　僧二、沙彌二、童子二、
仕丁一、菁三百爲、　從儀師　沙彌一、童子二、　安居講師　沙彌二、經九十日、年分證師　沙彌一員、

供法

供法　僧一員　白米二升、沙彌一員　白米一升六合、童子一人　白米一升一合、仕丁一人　黑米三升五合一勺　二升食、一升五合一勺養、
僧沙彌　各鹽九勺、味醬九勺、醋五勺、和布一把五分、荒布二村、童人（子）一人　鹽二勺、仕丁一人　鹽二勺、荒布二村、油一升五合

布施法

布施法　安居講師　絹五疋、綿廿三屯、法花講師　絹七疋、調布四端、從僧粁四人、
聽衆一員　調布一端、綿一屯、但隨時與、

樂人布施法

會々樂人布施法　花嚴般若兩會　官人一人　絹一疋、（史）吏生一人　調布二端、物師等中　錢三貫文、
請人錢四百文　專寺一人　但樂頭准請人　二百文　菩薩一人百文　天人一人百五十文

御祓使

天曆四年十一月廿日　　都維那法師

別當大法師（自署）「光智」

上座大法師

權寺主大法師

寺主大法師〇本書東大寺印九十九顆ヲ踏ス、

二十二日乙酉賀茂臨時祭、

〔西宮記〕六　十一月　賀茂臨時祭　（裏書）天曆四年十一月廿二日、雪、午剋御禊、
〇前田家本　依雪改座、舞人候仁壽殿西簷、陪從候南廊壁頭、上達部候年中行事障子東頭、
使頭雅信朝臣、上達部下官、宮大夫、只二人候、俄立幄、其下舞人（脫アラン）挿頭、右寮有穢、
仍用左御馬、九記、

十二月小甲午朔盡

十日癸卯御體御卜奏、

〔北山抄〕二十日奏御卜事　年中要抄下　六月　同四年十二月、神祇官解、中臣官人不足、代以散位高邦、令候御卜所、(奉イ)〇江次第同ジ、

〇北山抄、日闕ク、今姑ク恆例ニ據リテ揭書ス、

十一日甲辰神今食祭、

〔西宮記〕十二月　荷前　(廣業)天曆四年十二月十三日小一條記云、今日可有荷前事、而昨日仰云、神今食齋中裏幣物事、頗以不穩、同四年十二月十二日九記云、朝綱來云、〇中略十二(三)日、是致齋散齋也、齋內至切裏幣物有所憚、

〇西宮記、日闕ク、今姑ク恆例ニ據リテ揭書ス、

十二日乙巳荷前使ヲ定ム、

〔類聚符宣抄〕四荷前　帝皇

內舍人紀　正衡　小野傳相　坂上陳平

布瑠千里　橘　能固　文室輔高

右六人候東宮啓、

大納言藤原顯忠卿宣、件等人、宜令奉仕今月十三日荷前、若猶有不足者、差仕省丞等者、

天曆四年十二月十二日　　少外記紀理綱奉

同日、召仰中務少錄依智秦永時、

十三日丙午散齋日ニ依リテ、荷前ヲ延引ス、

〔九條殿記〕部類年中行事　荷前事　〇九條家本　十三日、有忌不行例

天曆四年十二月十二日、左中辨朝綱朝臣來、令小野之盛傳云、內裏仰云、去八日、依陰陽寮勘申、以十三日、可行荷前事之由定了也、而今所疑念行者、十三日是致齋後散齋日也、至于切裏幣物、非無所恐、爲決疑、引覽先(醍醐)帝御日記、延喜十七年、陰陽寮定申十三日、依有疑、遣使右(忠平)大臣家令定申、々云、如仰旨已有其疑、須仰陰陽寮、彼十三日外、重令擇申吉日、卽召陰陽頭房滿令擇申、々云、十三日外無吉日、頗宜日當戌日、々々是不可祭者、然而改十三日、而戌日被行了也、至于廿一年又如此、然則改明日、可行十七日戌日者、復命云、昨今日有所愼、不能自參、須召外記仰事由、彼八日、愚心成此疑、雖然不令奏其由、故者式云、致齋前

延喜十七年例

同二十一年例十七日ニ改定ス

散齋日、雖輕服不得參內裏者、如此文者、至于前散齋日、不可參內裏、可參諸司、今裏幣物、非禁中行事、是於諸司所行、以此准之、可無殊咎、雖然今已有延喜御時例、何不被據行哉云々、

〔西宮記〕十二月　荷前　天曆（裏書）四年十二月十三日小一條記云、今日可有荷前事、而昨日仰云、神今食齋中裏幣物事、頗以不穩、延喜御時已不行、須用來十七日者、左大臣（實頼）奉仰、令仰諸司訖、（延木十七、廿一兩年例也、○延木以下ノ分註、前田家本西宮記ヲ以テ補フ、）同四年十二月十二日九記云、朝綱來云、明日荷前停止、以十七日可行、其故十二日、是致齋散齋也、齋內至切裏幣物有所憚、加之延喜十七廿一兩年、依此疑改十三日云々、

〔北山抄〕二年中要抄下　十三日點荷前使　參議已上事　天曆四年、勘申十三日、延喜年中有此例、而十二日、可裏備幣物、彼日神今食後齋、仍改他日、准彼例、十七日可行云云、○撰集祕記同ジ、

〔樗囊抄〕年中行事　荷前　縮例　天曆四十二年十二月十二日、幣裏月次後、伊世幣前後齋例　天曆四十二年十二月十二日、

〔師光年中行事〕十二月點荷前使事　若當大神祭幷臨時祭者、今日不定事、立春近時、式日定之、當申日者、侍從定後日云々、又使立日事、依無日次、陰陽寮雖擇申十三日、猶可用後日也、其故前一日裏幣物事、當神今食後齋之故也、（見村上御記天曆四年中行事祕抄同ジ、○年中行事也、○年中行事二十八日、）

御衣ヲ浄藏ニ給フ　王卿侍臣ヲ塗籠口ニ召シテ御遊アリ

○十七日、荷前追行ノコト、所見ナシ、

二十三日、丙辰、御佛名、

〔西宮記〕十二月　御佛名　天曆（裏書）四十二年十二月廿三、御佛名竟夜、曉錫杖間、簾中調琴音、三禮間、頭雅信朝臣、自簾中以御衣一襲給淨藏、又召公卿侍臣塗籠口、有御遊盃酒興、延喜十三年例、御導師景銓、

〔政事要略〕二十八日上　年中行事　御佛名　天曆四十二年（廿脫カ）、御佛名竟夜也、曉御導師淨藏錫杖之間、簾中調琴音、三禮之間、藏人頭雅信朝臣、自簾中以御衣一襲給之、次召上達部侍臣於塗籠中、有御遊盃酒、倭歌之後、各給祿有差、延喜例、

〔北山抄〕二年中要抄下　十九日御佛名事　十二月　天曆四年、竟夜御導師淨藏、誦（噉カ）錫杖之間、簾中調琴音、三禮之間、藏人頭雅信朝臣、自簾中以御衣給之、事畢召王卿侍臣於塗籠中有御遊、有令讀和歌、給祿有差、（○中又御導師長絲竹道、略合其音、仍有恩賜云々、）

光仁天皇國忌、

〔西宮記〕十二臨時己　凶事　○前田家本　天曆四十二廿八(三カ)東寺、無上卿行、
東西寺國忌　光仁天皇　白壁、十二月、十三日、東寺、
當時國忌

二十五日、戊午、文章生試、

〔公卿補任〕六天祿元年　參議從四位上源保光、四十、同(天曆)四十二廿五宣旨奉試、
衣无異禮詩、

〔河海抄〕九乙通女　源保光、代明親王男、天曆四年十二月廿日、奉文章生試、

〔公卿補任〕六正曆三年　非參議從三位菅輔正、六八、十同(天曆)四月日補文章得業生、
年廿六、

○源保光奉試ノ日、河海抄、二十日ニ作ル、今公卿補任ニ據リテ揭書ス、
及第ノコト、五年二月二十二日ノ條ニ見ユ、菅原輔正ヲ文章得業生ニ
補スルコト、便宜合敍ス、

二十六日、己未、方略試、

〔類聚符宣抄〕九方略試　請蒙天裁、令奉方略試、紀伊掾正六位上藤原朝臣後生狀、
右後生、故右大辨從四位下佐世朝臣孫、式部少輔正五位下文貞男也、學承二
家業、謹請處分、
天曆四年四月十四日　從五位上行式部少輔兼文章博士三統宿禰元夏
從五位上行文章博士兼伊豫權介橘朝臣直幹

〔江談抄〕四　藤原後生ノ詩ヲ天覽アラセラル
悲倍夜蓋鳴砌夕、淚催黃葉落庭晨、秋懷、後生、藤
箕裘欲絕家三代、水菽難酬母七旬、
此詩經天覽、蒙方略宣旨云々、

橘直幹等ノ擧狀
葉、染儒林拔萃之風、運待千年、逢聖代求材之日、仍同房儒士等、請令獻策之狀、
去天曆元年十一月、具注事由、奏聞既訖、而天裁未下、歲序頻移、方今後生、業企
箕裘、齡過丁壯、若不期射鵠之藝、長應墜食鷄之勤、望請、因准先例、被賜宣旨、令
繼家業、謹請處分、
天曆四年四月十四日　權少外記春道有方　奉

是歳、丹波、播磨兩國、蝗蟲ノ災アリ、因リテ、軒廊御卜ヲ行ヒ、諸社ニ奉幣セシム、

〔小右記〕寛仁元年八月二日、丁卯、依攝(隆通)政召參入、丹波國蝗蟲事、被勘蝗蟲被行之例、天暦四年言上丹波、播磨蝗蟲事、有軒廊御□(卜)、其□奉幣諸社之由勘申、

〔北山抄〕六備忘略記　軒廊御卜事　上卿奉仰、々外記、令召神祇官陰陽寮、各率僚下參入、應召入自日華門、著軒廊座、

(頭書)天暦四年、重服上卿行之、○江次第同ジ、

○重服ノ上卿、軒廊御卜ヲ行フコト、便宜合敍ス、

天台座主延昌、延暦寺講堂ヲ改造ス、

〔天台座主記〕一○華頂要略百二十所收　第十五權律師延昌　(寛平)同四年、庚戌、改造講堂、

〔朝野群載〕十七　知識文　佛事下

延暦寺牒　諸大施主　衙

欲被加隨分知識、改造講堂一宇狀、

右講堂者、天(淳和)長之朝廷、給稻九萬束、所被肇造也、自爾以來、草創悠邈、木星廻環、

日月不居、赭堊之餝自舊、雨露長冐、簷宇之構先頽、何況山雲之霑礎、柱根爲之朽摧、嶺霧之埋甍、梁棟爲之腐敗、凡玆山之爲體也、南嶺則疊嵯嵓之奇巖、々有雷室、東脚則帶渺瀰之大湖、々有龍宮、因之迅雷(驟カ)聚雨、倏忽于晴天、大雹猛風、慘烈于暑月、但恐常住之佛軀、俄皈魔滅之法、不變之經卷、盡遭粲爛之憂、當于其時、噬臍而不及、廻肝而難追、豈止構堂宇之煩、兼有補佛像之費、不早修之誚、還山鳥之語譆譆、有曉誘之□(傷)、峽猿之聲愧惱、是以營造之思、久積胸懷、嗟歎之音、漸出唇吻、然而玆寺、有風雨之饒、而乏于儋石、有烟霧之富、而貧于貨泉、適運帷帳之壽(籌カ)、纔得毛髮之力、伐直木於高島、聚良材於富津、而今力屈於採材、計絶於雇匠、雖云觖望之有日、只歎創刻之無期、玆堂難營、唯在一事耳、嗟哉浮天之濶水、積于衆流之宗、興雲之高山、成于微塵之聚、若不假濟々之衆力、何以起魏魏之一堂、望也、內外官司、上下士庶、寸鐵尺木、添陳力之資、一錢顆粒、加隨分之志、然則凌雲之大厦、忽焉以成、滿月之尊容、儼然不改、昔有三千人、共修一塔、後爲三千佛、遞現一刹、堂塔名殊、功德惟一而已、唯願因此勝緣、植餝蔔之芳種、證彼妙果、扇栴檀之香風、仍以奉唱如件、以牒、

天暦四年四月十日

延暦寺牒　當國衙
近江國衙ニ材木ヲ運上センコトヲ請フ
山神ハ四社ノ一
守以下ノ俸祿ヲ割キテ其貲ニ充テシム
近江國ノ衙ヲ所シテ材木

延暦寺牒　當國衙

欲被殊加衙勢、令運上材木、造建講堂一宇狀、

牒、竊以、吾山者、貴府之鎭護、貴府者、吾山之檀那也、譬猶鷲峰與王舍、雙擧(寄カ)於二諦而已、況復府中、瞻山堂閣、挿著於雲漢之際、山上望府樓臺、隱映於烟樹之間、豈只地形之相接、師檀之成契矣哉、便是眼界之所通、心瞻(膽カ)彌親而已、既而山神者、四社之其一、山僧者、千口之其一、剩三百六時、行道之砌、共祈貴境之豐饒、三密觀念之窓、各禱貴境之快樂、則都鄙緇素、普所見聞也、今件講堂、建立年久、破壞日新、楣朽而暮年半摧、梁傾而晴虹將斷、若無修造之勉(勤イ)、定有顚倒之傷、因之寺家廻策、山麓採材、徒委濱頭之沙、未構嶺上之用、非公(飛アラン)家修理之色、盖施松門補綴之媒、仍以奉牒如件、乞衙察狀、上自長官、下及掌國、分彼隨目之俸、備此不日之功、然則三穗之禾、定入府君之夢、兩岐之麥、必播州民之歌、以牒、

天暦四年四月十一日

延暦寺牒　當國四所　衙

欲被加隨分力、令曳上材木、造講堂一宇狀、

牒、件講堂者、傳教大師最初之建立也、自爾以降、木星廻環、草創夐遠、山雲之潤礎石、柱朽而長苔、嶺霧之入甍瓦、梁木腐而敗棁、若不企興造之計、恐更遺顚倒之愁、因之運籌於松扃、採材於桂嶺、其材大小三千餘枝、悉委於白浪之濱、未移於碧岩之嶂、嗟哉積土成廟之誡、定昇地上之地、聚沙爲塔之戲、遂作天中之天、何況盛(盛イ)浪痕之大木、結雲表之高堂者哉、仍以牒送如件、乞也察狀、四所一心、多類併力、曳未曳之堂木、殖難殖之佛種、唯願諸君、因此功德、現世則富均陶朱、壽倍商皓、當生則貌寫滿月、位登法雲、以牒、

天暦四年四月十日

曳上ニ合力セシム
材木大小三千餘枝

○延暦寺講堂供養ノコト、天徳元年五月一日ノ條ニ見ユ、

權律師實性ヲシテ、多武峯金堂ニ法華三昧ヲ修セシム、

〔多武峯略記〕上佛事　法華三昧

於法華堂修之、要記云、○中略天暦四年、天皇勅沙門實性、於談峯令修法華三昧、然其堂未造、故修之金堂、

○右大臣師輔、多武峯金堂ヲ改造スルコト、便宜左ニ附載ス、

師輔金堂ヲ改造ス

〔多武峯略記〕（下堂舍付佛像）金堂（檜皮葺、三間四面、）要記云、定慧和尚、講堂東建金堂、修彌勒金佛、天曆四年、九條師輔公改造之矣、

延曆寺僧良源ヲ東宮護持僧ト爲ス、

〔僧官補任〕（大師號）慈惠大師（良源、）天曆四年、爲東宮護持僧、于時凡僧、

〔慈慧大僧正傳〕（天曆）同（天曆）四年、可保護儲宮之由、頻有議定、和尚數度辭讓、而九條（師輔）丞相强以執奏、仍數降鳳詔、令侍龍樓、（下略）（上）

〔慈慧大師傳〕（天曆）四年庚戌、修三百日護摩、至其期之盡、夢可任座主、醒自謂、諸佛利生、可隨人願、我不思現世之榮進、何其有斯告乎、稻幹喩經曰、勤求菩提、卽成現世悉地、恐在玆乎、不幾而詔護儲宮、不得辭侍龍樓、從此皇眷日渥、（下略）（上）

大神宮權大司大中臣伊茂

佛舍利四千八百粒ヲ甲乙二壺ニ納ム

國土衰危ノ時粒數減少ス

年末雜載

神社、

〔類聚大補任〕權大司正六位上大中臣朝臣伊茂　三月日任、本峯巷、在任七年、

佛寺、

〔東寶記〕（二大經藏）佛寶中　佛舍利（○略）中

私云、高祖（父母）進官錄所載、佛舍利八十粒也、然至天曆（村上）、天祿（圓融）明時、已及四千八百粒、甲乙二壺分配、爲大師御在世否不知子細、勘計記云、權少僧都寬空、天曆四年正月十五日、於眞言院所計、甲壺四千二百五十九粒、乙壺五百卅五粒、（略）（○中）天下豐饒之時、分布陪增、國土衰危之時、粒數減少、甲乙互示增減、奇異在眼前、可貴可仰、

〔東寺百合文書〕（ヲ○山城）（三十一之七十）

當寺御舍利事　天曆四年正月十五日、於眞言院勘計、（權少僧都寬空、香隆寺、）

甲壺　四千貳百五十九粒

乙壺　五百卅五粒

都合四千七百九十四粒（以前記錄無之、○中略）

延元々年三月廿一日、於東寺西院、以執行權律師忠救記錄勘注之、

法務僧正弘眞（花押）

法華十講會ヲ貞松房ニ修ス

〔大神宮法華十講會緣起〕

（天曆四年二月、始修貞松房、）

夫以、鹿苑駕車、轉法輪之跡始到鷲峯却綸、至道場之門方通、送六十小劫於食頃、披三千大界於門前、是以覺母入海、多濟群品、鷲子出房、更廻小心、遍法界中、草木悉霑一味之雨、盡虛空際、瓦石併蒙平等之光、但機未及者、根未熟者、火宅臭煙、一門難出、化城頓處、四衢不通、弟子等已值大法、是非小緣、若不殖善根於宿昔、是意萠佛因於當今、何況惟大明神、月輪分光、日域垂跡、暫辭彼白蓮之華界、幾救我國土之行也、何異妙法一乘之旨哉、然而載其明德者、蒙其神威者、或是氏人、或是國人、道俗改心、男女勵力、奉爲權現正覺、於此社頭精舍、敬肆大乘之講莚、欲增十號之尊位、於是梵風聲々、和魚山之古曲、瑞華色々、縡露地之新言、五个日裏、擎香華於供養佛之壇上、十講會間、調鹽梅於施經之床前、嘱淨侶於丹洞、晝說鷲頭中道之經、尋高僧於靑溪、夜禮鷄足下生之佛、是此爲送鶴齡

五个日間社頭ノ精舍ニ於テ法華經ヲ講ズ

大明神迹ヲ日域ニ垂レテ我國土ヲ救ハントス

於一生之日、攀龍華於三會之春而已、講經畢夜、念佛終夕、堂上傳戒、三聚之珠照昏、庭中列燃、萬點之星依晝、弟子等寄、下明神力、修白業誠、已應福豈唐捐、唯願諸佛、照察中凉、現世萬年、遠移南山之蔭、後生九品、近迎西方之月、擧此善根、先奉資國主、河清協時、山呼奏曆、東宮儲君桐溝春深、中宮國母椒房年久、鳳客鸞臺、羽翼不變、諸司百官、榮爵常新、國光（說アラン）寮佐百福於門戶、都吏上下、盈七珍於庫倉、天家豐樂、海內淸平、五穀成雲、九穗滿畝、功德無邊、何分法界、併出迷津、盡登覺岸、敬白、

盜八坂寺ニ入ル

〔淨藏法師傳〕（○筑前）

天曆四年夏、住八坂寺（法號法觀寺、行基菩薩建立）結夏安居、仲夏下旬、强盜十餘人、各帶弓箭闖入、依之諸人周章驚愕、法師出大音聲云、守護者无歟、于時盜人等、庭中僵臥、擧聲大叫、如被杖椎、但不失本心、呼喚尤切也、隣人應響來集、法師云、寇賊元愚癡也、願善神速可免捨之、是時賊徒皆得尋常、慚謝而去、

淨藏ノ法驗

〔古事談〕（三僧行）

天曆比、淨藏之八坂房ニ强盜數輩亂入、而間燃炬拔劒嗔目、各徒立更無其所作、忽無言語、先後不覺、稍經數刻、更漏漸闌、殆以垂曙、爰淨藏啓白本尊、早可免遣者、于時賊徒、適復尋常、致禮出去了云々、

公家、

〔類聚符宣抄〕七諸長上等事

修理職燒石灰長上清宗忠孝

太政官符式部省

應補修理職燒石灰長上從八位下清宗宿禰忠孝事、

右得彼職去四月廿八日解偁、謹檢案內、清宗氏秀以石灰長上之勞、去年被任山城權少目、自爾以降、依無其人、動闕其用、方今件忠孝、是氏秀之男也、箕裘繼業、職掌可堪、不學若人、誰練其道、望請、以件忠孝、被補氏秀之替、將令勤石灰之事者、右大臣宣、依請者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

父氏秀轉任ノ替

胎藏私記

右少辨藤原朝臣國光

天曆四年九月廿三日　　左少史栗前宿禰扶茂

學藝、

〔金剛寺聖教奧書〕○河內

胎記(胎藏私記)上卷

初驚覺印○中略

次不思議惠菩薩印　右手空風相捻、如持珠之勢、以印先向上外、(宋書)「次向」

天曆四年七月十五日點定已了、月十五日手印已了、

攝津兒屋鄉常地賣買券文鄉長解

賣買、

〔朝野群載〕二十一雜文上田地賣買券

攝津國嶋上郡兒屋鄉長解申、立賣買常地券文事、

合地參町伍段

在五條一里、十七十八兩坪內、七段十九坪八段　廿坪一町　廿一坪一町

四至　東限沒官地、南限路、西限藤原種雄地、北限公田、并紀峯高領山、

右得內豎從七位下紀朝臣氏秀辭狀偁、件地故親父岑高、以去延長八年六月十三日、從大藏利常之手、所買得也、其後親父存生之日、所處分給也、而今充價直稻肆佰貳拾束、限永年、沽與主計史生從七位上御船宿禰眞元既畢、望也(ヒ)欲被立券文者、長依辭狀、加覆審、所陳有實、仍勒賣買兩人、并保證署名、立券文如件、以解、

天曆四年六月十七日　　長

賣人內豎從七位下紀朝臣

買人主計史生從七位上御船宿禰

保證刀禰
郡判
國目代
國判

郡判

國目代從七位上凡河內忌寸正茂
大領從七位下三嶋宿禰
權大領從八位下檜前首
少領從八位下三嶋宿禰

天曆五年十月十七日

國判 依延長八年奏、

權守藤原朝臣
守藤原朝臣佐忠
介六人部宿禰
權介多

保證刀禰
從八位下粟田直
正七位下大原史

大掾藤原
少掾平
大目紀
少目尾張

死歿、

金剛峯寺寺主仲應寂ス
丹生高野兩大明神ニ加階ス
峯宿ノ弟子阿氏川莊ヲ開ク後ニ花園莊ト號ス
寺主ト爲ル

傳記

〔金剛峯寺撿挍帳〕一 ○青巖寺本 金剛峯寺撿挍執行補任次第

同（醍醐天皇） 第二執行寺主仲應 阿氏川庄開發領知、卽此時也、

朱雀院 第三執行別當定觀 號若狹講師云々、

第二執行仲應死去尅、卽以若狹講師定觀、被補中院別當執行歟、

〔紀伊續風土記〕高野山部三十四 高野山撿挍次第三十之一 淨慧 歷 第十世執行寺主仲應 天慶五年、執行職に任し、天曆四年寂、天慶六年、阿氏川の庄を開き田畠を作し、翌年始て供米を貢く、六年五月、此師職に在間に、兩大（丹生、高野）明神に加階の事あり、（龍光院譜、）山務七年、

〔紀伊續風土記〕高野山部三十四之一 高僧行狀部之一 淨慧 執行仲應傳

釋仲應、姓氏不詳、入峯宿室薙染、學成德積、而至山籠職、天慶五年、代宿補執行、住持中院、同六年、令開耕阿氏川庄田畠、以爲三綱之依怙、後世號花薗庄者是也、天曆四年月日滅度、惜哉、履跡不詳矣、（撿挍帖、）

〔高野春秋〕四 五年（天慶）壬寅春正月朔日、第二執行正別當仲應 中院 朝拜、天慶六年癸卯春正月朔日、第二執行寺主仲應朝拜、

案、寺主者、准據高雄三綱、此山亦置院主花園行事、（寺主、院主、同名也、）而令司總寺家

事業、是執行職已來之儀式也、仍一長者雖兼補金剛峯寺座主、不堪山務、故
撰宿徳僧、推擧三僧綱、（仲應者、則峯宿遺弟、）
〔夏中、寺主仲應大令開耕阿弖川庄田畠、爲三僧綱之依怙、案、此後維那事支配
（維那唱花園、持業得名也、今因用其來由、）
（天慶八年、）茲年、阿弖川庄新開始收納米、領知之、爲三僧綱之依怙、實執行寺主仲應之功
業、後世受其賜也、（後世高野三綱維那稱花園、蓋依所領立名也、具詳下永觀元年注、○中略）
〔天暦四年庚戌春正月朔日、執行寺主仲應朝拜、
五年辛亥春正月朔日、第三執行中院別當定觀師拜堂、（寺主仲應替、仲應寂日、院譜未分明也、）
寂日分明ナラズ

御物忌ニ依リ太皇太后ノ大饗ヲ停メラル雨濕ニ依リ東宮侍臣ノ拜禮ヲ延引ス

天暦五年辛亥

正月大尽亥朔

二日甲子、東宮大饗、

〔西宮記〕正月上二日二宮大饗　天宮饗（脱ざ）所、依御物忌、無后（穏子）宮饗、三日、東宮々（之イ）臣致拜禮、須以二日、而依雨濕昨日停止、

九記云、天暦五年正月三日、東宮侍臣大夫（藤原師尹）以下、於南庭奉拜、四位五位一列、六位一列、北面東上、撤書御座、立儲（儲イ）掃部寮倚子、垂母屋御簾、巻庇簾、昨日依雨今日行之、（昨日大饗也、○撰集祕記同ジ、）

四日丙寅、法性寺御八講、

〔西宮記〕正月中四日國忌　諸司皆參、少納言付內侍、進國忌奏、先一日、自天暦五年、於法性寺有御八講、後院若一院行事、諸卿殿上人侍從藏人所參入也云々、

○本書、月日ヲ記セズ、姑ク恆例ニ依リテ掲書ス、

朱雀院ニ朝覲行幸アラセラルル、

〔近衛家文書〕十二勘例　代々朝覲行幸年々○中略

紫宸殿出御

村上天皇〇中略

同（天暦）五正四、丙寅、行幸朱雀院、〇中略

右注進如件、

閏二月十一日

五日丁卯、卯杖ヲ上ル、

〔近衛家文書〕十二勘例　卯杖

非節會奏卯杖例〇中略

同（天暦）五正五、丁卯、天皇御南殿、有卯杖事、

二條院ニ朝覲行幸アラセラル、

〔御遊抄〕二朝覲行幸　同（天暦）五年正月五日、幸二條院、拜太后（穆子）、國史後抄、

七日己巳、敍位、是日、參議源等、右大辨及ビ勘解由長官ヲ辭ス、

〔公卿補任〕五

大納言正三位藤元方、六四、十正月七日敍正三位、

參議正四位下源等、七十、正月七日正四下、同日〇一代要記、同月ニ作ル、上表、辭右大辨、勘解由長官等、

昇殿ノ勞

先年藤原守義ノ加階ヲ止ム

下名ヲ式兵二省ニ給フ

〔公卿補任〕五　天曆九年　參議從四位上藤有相、四八、十同（天暦）五正七從四上、

〔公卿補任〕五　天德四年　參議從四位上源重信、三九、十同（天暦）五正七從四上、

〔公卿補任〕五　康保四年　參議正四位下藤齊敏、四十、五年（天暦）正七從五上、

〔公卿補任〕六　安和三年　參議從四位上源保光、四七、十同（天暦）五正七從四下、昇殿勞、孫王、

〔公卿補任〕六　天祿三年　參議從四位上藤守義、七七、十同（天暦）五正八從四下、越前任中率分其勳、先年止加階、今年又敍之、

〔外記補任〕二　大外記外從五位下雀部是連　正月七日敍、

〔三十六人歌仙傳〕祭主從四位下行神祇大副大中臣賴基　天曆五年正月七日敍從四位下、

〔二中歷〕二諸司歷　大夫尉　藤爲忠　天正正七　天曆五始、

〔北山抄〕一年中要抄上七日節會及敍位事　正月大臣召式省、稱唯、進搢笏屈行、給下名、大臣以左手、微々給之、判官記云、於大臣者、次給兵省如前、膝行云々、略〇中天曆五年、以跪給矣、

〔敍位除目執筆抄〕天曆五正六敍位、

八日庚午、後七日御修法、

〔東寺長者補任〕一　長者權少僧都寬空　後七日、

上皇紘歟ヲ奏セラルル

木工寮未ダ帶刀弓場ヲ作ラズ

寬空加持香水ヲ進ム

〔後七日御修法阿闍梨名帳〕（村上天皇）

記云、天曆五年延鑒修之云々、可尋決之、

十三日乙亥、二條院ニ行幸アラセラル、

〔御遊抄〕二朝覲行幸　十三日（天曆五年正月）、幸同院（二條院）、奉謁太后（穆子）、上皇（朱雀）奏絃歌、同（天曆）抄（續史後抄）、

左近弓場ニ於テ、東宮帶刀ノ手結ヲ行フ、

〔西宮記〕臨時五　院宮事　同（天曆）五年正月十三日、帶刀手結、於左近弓場行之云々、帶刀弓場、木工寮未作、仍於此弓場行之云々、

十四日丙子、御齋會內論義、

〔御質抄〕末加持香水　李部王記第二云、（年中行事二）○中略天曆五年正月十四日、未一刻參內、二刻內論議、法師等參、寬空僧都進加持香水、延珍律師立兀子北、讀僧名如去年、三刻論議了云々、

〔台記〕久安六年正月十四日、壬辰、翌日十五日、使覺敏得業問寬信曰、西北二抄、小野年々記、皆加持香水後、讀論義僧名、送此等記令見、夜前陳有兩說之由、非無所疑、宜見證文、報命曰、先師嚴覺、教有兩說之由、後於先父爲房卿家、勘吏部王記、實有二說、卽送勘文一紙、

灑水ノ前ニ僧名讀奏ヲ行フ

師輔請客使ヲ待テ參向ス

拜禮アリ

致仕者ヲ招カズ

致仕參議伴保平謝座ス

保平主人ノ請ニ依リ源兼明上座ニ著ス

先讀奏後灑水說○中略

先灑水後讀奏說

同記同卷、○中略同（天曆）五年、○中略已上寬空僧正三度、件四人九度、皆灑水前、奏後、可下給諸記、

左大臣實賴、大饗ヲ行フ、

〔九條殿記〕部類○九條家本　年中行事二　大臣家大饗　天曆五年正月十四日、丙子、申三剋御前內論、了左（實頼）大臣大饗、予（師輔）退候東宮、四剋府中將朝成爲請客使來、卽進向、拜禮自餘事如例、左大閤前日示云、致仕宰相必欲招者、而及今日無其事、主人有不招詞、

〔北山抄〕三　拾遺雜抄上　大饗事　同（天曆）五年、致仕參議保平卿、依大臣命參著、昨左大臣家饗、

十五日丁丑、右大臣師輔、大饗ヲ行フ、

〔西宮記〕正月上　臣家大饗　天曆五年正月十五日小一條記云、今日右（師輔）府大饗也、召致仕宰（保平）相預座、三獻後、更謝座著座、

同日吏部記云云々、屛風用題書者召史生、雅樂入後、致仕參議伴保平卿來謝座、就治部卿兼明卿座上、蓋主公所請也、治部卿稱座次有疑、移就南座、案式、致著ノ上座ニ著ス

致仕大納言冬緒ノ例

仕者就本位有職上、治部卿疑旨无所據、主公云、致仕大納言冬緒卿、應昭宣(定カ)公
召至日、策杖至中門、端笏進謝座云々、主人勸盃南北納言座云々、次便勸盃一
世源氏盛明朝臣、今日就南欄座故也、伶人奏曲、了給祿云々、

〔九條殿記〕部類年中行事二　大臣家大饗　天曆五年正月○中略十五日、召致仕人

○九條家本

丁丑、家大饗、於東殿行之、午剋納言以下來集、仍以府少將眞忠朝臣爲請客、申
四剋尊者入來、召史生後、雅樂舞如例、依有前例、喚致仕參議保平、再拜著座、自
餘事如例、

〔北山抄〕三大饗　拾遺雜抄上　同(天曆)五年、致仕參議保平卿、依大(師輔)臣命參著、昨(實賴)左大臣家饗、
主人有不招詞

〔法曹類林〕二百公務八　非執政三位上藤與參議三位下藤署所事○中略

天曆五年大饗、致仕保平應丞相請、就同位上藤兼明卿上、兼明卿移就他方、丞
相以下無所定行云々、

〔政事要略〕六十九致敬拜禮下　糺彈雜事九　馬事　式部式云、前參議(上イ)以下被召見參、及預朝
復歟
參者、致仕者在本位見任上、以理解者在同位下、○中略
沒檢近例、天曆五年、右大臣大饗日記云、(九條右丞相、)載在吏部記、

召史生、雅樂入後、致仕參議伴保平卿來謝座、就治部卿座上、蓋主公所請也、
治部卿稱座次有疑、移就南座、案式、致仕者就本位有職上、治部卿雖本位在
上、理誠合在下、持疑旨无所據、主公云、致仕大納言冬緒卿、應昭宣公饗召至
日、策杖至中門、端笏(衍カ)進遲(衍カ)謝座也者、彼時之義又叶式文、

十七日己卯、射禮、

〔北山抄〕三射禮儀　拾遺雜抄上　六衞府射手等、自中務省垣下西行、陣起、入自左
右衞門陣中央、經左兵衞陣北東行、更北折就行立標、(天曆五年記、射手東)
天曆五年、內辨休幕設東樓下、(北折所、皆立標云々、)

二十二日甲申、鹿嶋、香取兩社奉幣使ヲ發遣ス、

〔類聚符宣抄〕一鹿島使　太政官符下總常陸兩國司　內印、
學生正六位上藤原朝臣行葛
內藏史生從七位上秦公連扶
右爲奉鹿島、香取兩社幣帛、差件等人宛使、發遣如件、兩國宜承知、依例行之、符
到奉行、

式ニ據リ致仕ハ本位有職ノ上ニ就カシム

標ヲ立ツ　內辨ノ休幕ヲ東樓下ニ設ク

章者入來雅樂ヲ奏ス

致仕保平卜同位上藤兼明卜藤ノ座次

天暦五年正月廿二日

驛鈴二口ヲ給ス　驛鈴貳口各三廻、

二十三日、乙酉、内宴、是日、女御徽子女王、尚侍藤原貴子等加階ス、

藤原在衡詩題ヲ獻ズ　澁河鳥ヲ奏ス

〔北山抄〕三内宴事　拾遺雜抄上　天暦五年、依召參御前、奉尚侍(貴子)、從二位、女御徽子女王從四位下、加階事、召内記、仰可儲位記之由、臨期、仰師尹卿令行之、依女位記不唱、又父親王(重明親王)不奏慶、後日奏之、申刻召王卿云々、喚中納言元方、在衡等卿、令獻題、〔召詞、民部卿藤原朝臣云々、參入音聲、舊例最涼州也、而奏澁河鳥、未知其意、罷出音聲、海青樂、例多如之、但延喜廿二年、安樂鬘、天暦元年、五常樂急、私記、〇撰集秘記同ジ、〕

重明親王源博雅等音樂ヲ奏ス

〔古今著聞集〕六管絃歌舞　同(天暦)五年正月廿三日、宴(内脱カ)おこなはれけるに、式部卿重明親王(貴朝)琴、左大臣箏、中務大輔博雅朝臣和琴、侍從延光朝臣琵琶、散位朝忠朝臣、右近中將藤原朝臣笙、安名尊、春鶯囀、席田、葛城などをぞ奏しける、其後平調曲も有けり、

〔御遊抄〕一内宴　同(天暦)五年正月廿三日、

笙　朝忠朝臣、右近中將藤原朝臣、

比巴　延光朝臣、

箏　左大臣實頼、

琴　式部卿重明親王、

和琴　中務大輔博雅朝臣、

安名尊、春鶯囀、席田、葛城、

〔體源抄〕三末上　澁河鳥古樂、中曲、無舞、拍子十一反叱末ニ加三度拍子、或拍子十二、或新古澁沁字通用、此曲隋煬帝用汴澁河作之、序絕了、本者無喚頭、中古出來云、行道用之、〇中略

天暦五年正月廿三日、内宴、參音聲用此曲、忠拍子ア(天暦)同五年正月廿二日、内宴、參音聲ニ用之、〇中略内教坊ノ別當左衛門督高明奉行之、

〔教訓抄〕六無舞曲樂物語　澁河鳥拍子十二、或說、拍子十、古樂〇中略

天暦五年正月廿三日、内宴、參音聲用此曲、忠拍子、加拍子時、打三度拍子、

〔續教訓抄〕舞之部壹越調　菩薩蠻調　澁河鳥〇中略

同(天暦)五年正月廿二日、内宴、參音聲ニ用之、内教坊ノ別當左衛門督高明奉行之、

〔三十六人歌仙傳〕齋宮女王　從四位上徽子女王　五(天暦)年正月廿三日内宴、敍從四位下、

女御、

三十日、壬辰、除目、

〔公卿補任〕五

大納言正三位藤元方、六、四、十同(正月)卅日任大納言、民部卿如元、

中納言従三位藤師尹、三、二、十正月卅日轉正、春宮大夫、左兵督如元、

権中納言従三位源庶明、四、九、十正月卅日叙従三位、任権中納言、

參議従三位源兼明、三、八、十治部卿、正月卅日兼紀伊權守、

正四位下大江維時、六、四、十正月卅日兼近江守、

藤師氏、三、九、十右門督、正月卅日兼大和權守、

従四位上源正明、五、九、十同(天暦)五正卅任參議、

源雅信、三、二、十同(天暦)五正卅任參議、

〔公卿補任〕天暦七年 參議従四位上大江朝綱、六、八、十同(天暦)五正卅左大辨、

〔公卿補任〕天暦八年 參議正四位下源兼忠、五、四、十天暦五正卅近江權守、

〔公卿補任〕天暦九年 參議従四位上藤有相、四、八、十同卅日(天暦九年正月)右大辨、

〔公卿補任〕天徳二年 參議従四位下(上)橘好古、六、六、十同(天暦)五正卅左中辨、

源庶明従三位ニ叙ス

〔公卿補任〕天徳四年 參議従四位上藤伊尹、三、七、十同(天暦)五正卅兼紀伊權介、

〔公卿補任〕天禄三年 參議従四位上藤元輔、五、七、十天暦五正卅右少將、

〔公卿補任〕天元六年 參議正四位下橘恒平、六、二、十同(天暦)五正卅越前介、

〔公卿補任〕天暦三年 參議従三位菅輔正 同(天暦)五正卅播磨權少掾、○中古歌仙三十六人傳同ジ、

〔外記補任〕二

大外記外從五位下雀部是連 卅日(正月)遷土左守、

菅野正統 正月卅日任大、

少外記春道有方 正月卅日任、

權少外記文武並 正月卅日任、元民部大錄、○魚魯愚鈔同ジ、

〔政事要略〕二十五朔日諸司歳内進奏考選并雑公文等事 十月中行事

太政官符式部省

合職事、天暦五年預考并不考、新附、遷任、卒、惣參拾參人事、○中略

中上

大外記正六位上菅野朝臣正統 上日三百廿、